
ジュニアポリス

城啓裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジュニアポリス

【Nコード】

N0055I

【作者名】

城啓裕

【あらすじ】

父親と喧嘩して家を抜け出した少年、上原州。彼はドラゴンシテイで倒れ、二人の少女に保護される。そして、親戚の子と偽り生活することに。二人がジュニアポリスと知った彼は、父親を見返そうと、ジュニアポリスに入ることを決意する。なお、ロックマンエグゼと同じ世界という設定ですが、時代、場所が違っているのでロックマンエグゼのキャラクターはほとんど登場しません。また、ロックマンエグゼを知らなくても、楽しめるかと思えます。現在、次回が思いつかないので話の凸凹を埋めてます。

第0話 プロローグ

204X年。ニホンは、大不況から立ち直りまた経済が活発になり始めた。

物語はニホンの真ん中辺りにあるドラゴンシティで起こる。

ドラゴンシティは若者や企業や希望も多く、デンサンシティに次ぐ第二の首都となっていた。

しかし、それと同時にこの町は犯罪が多く今の警察では手に負えない状態だ。

困り果てたドラゴンシティ警察署は、町の小中高生に犯罪の身近さを知ってもらおうと、子供科を設立。

子供警察、通称、ジュニアポリス、略称JPの誕生である。

これは、JPに入団した一人の少年のひとつの物語。

なお、これらに登場する人物・団体名はすべて架空のものであり、現実の人物・団体とは一切関係ありません。

第0話 プロローグ（後書き）

小説を書くのは初めてですがみなさん、じゃんじゃん見てってください。

あと、ドラゴンシティの由来は、静岡県の天竜から由来しています。
場所的には、浜松市あたりですね。

第1話 出会いー1 (前書き)

ここから物語が始まります。

第1話 出会いー1

ここは、ドラゴンシティから約20キロ離れた山道。まだ夜が深いので人影はまったくといっていいほどない。しかし、そんな中一人の少年が走ってくる。

「はあ、はあ、はあ、はあ。」

彼こそこの小説の主人公、上原州である。

「はあ、はあ、はあ、はあ。」

彼は父親と家のことで喧嘩をして、家を飛び出してしまった。

「はあ、はあ、はあ、はあ。」

州の実家は畳屋である。州の父は彼に畳屋を告がせようとしていた。しかし、州にはデンサンシティに行って、バンドをやるという夢があったのだ。

しかし、父はそれに断固反対だった。断れば将来は強制的に軍隊に入るといわれたので、彼は父に夢を語らなかつた。

しかし、一ヶ月前、州は大失敗を起こし、多額の借金を作ってしまった。そして、後が怖かつたので彼は家を抜け出したのだ。しかし本人は少なくとも軍隊に入るよりはましだろうと思っていた。しかし、父は警察に搜索願を出しただろう。見つかると思つた後が怖いので3日間、走り通した。彼は夜の山道をひたすら走り続けていた。

2日後、彼はドラゴンシティにやってきた。しかし、彼はここがどこなのかまったく検討がつかめなかつた。

「はあ……。はあ……。それにしてもいつたいここはどこなんだ？」

州の声は完全にしゃがれていた。しばらくすると、雨が降ってきた。しかし、それでも彼は走り続けた。

さらに数時間後の夜、州は大きな建物を見つけた。しかし、完全に疲れきっているの、見上げる気力もない。目の前の光景が歪んできた。意識も遠くなった。州はそこで倒れてしまった。もはやしゃべる気力も動く気力もない。彼の意識は遠くなり、死んだように眠ってしまった。冷たい雨が州の体をぬらしていた。

「君！しっかりして！」

州は少女の声を聞いた。しかし、彼は疲れていて喋るところではない。少女は州の口に手をあてがった。

「大丈夫！息はしてる」

州は不幸中の幸いだと思った。

「つかさ！そつちもって！」

「分かった！でも、どうするの？お姉ちゃん」

しかし、州をどうするつもりだろうか。

「とりあえず、家に連れて行こう。」

「でも、管理人さんにはどうやって説明するの？」

「従姉弟って説明するの」

「分かった。」

その後、州は何かに担がれたような気がした。

州は眠ったままどこかに運ばれるような気がしてやまなかった。管理人と思われる人物と少女の会話の後、上に上っていくような感覚に包まれた。しばらくして、その感覚がなくなったと思っただらまた上に上っていく感覚が彼を包んだ。すぐにその感覚はなくなり、ドアが開く音が響く。姉の少女とつかさは、ソファーに州を寝かせた。しばらくして、会話が聞こえてきた。

「何か食べさせないと。」

「そうね、たしかレトルトお粥があった気がする。」

しばらくすると、グツグツと何かをゆでているような音がした。レトルトお粥を温めているようだ。さらに時間がたつと、音が鳴り止み、少女は器におかゆを流した。

「アチチチチチ」

少女はお粥の入った器を持って州のところに戻ってきた。そして、スプーンでお粥をすくい、州の口に流し込む。が……。

「アチチチチチ!!!僕は猫舌だからちゃんと冷ましてから食べさせてよ!!!」

あまりの熱さに州は目が覚めた。

「あ!気がついたのね。」

「ああ。」

州は我に振り返り周りを見渡した。

「ここはどこだ?」

「ここは私の家よ。」

その少女が説明した。州はお礼にと、自己紹介することにした。

「助けてくれてありがとう。僕は上原州。課柄県、対用市日影町から来たんだ」

「対用市日影町!?!ずいぶん遠くから来たのね」

どうやら、州の住んでいた町を知っているらしい。

「知ってるの?」

「知ってるも何も、あの町は犯罪や学生問題が一番多い町よ。」

それを聞いた州は、まずいところに育ってしまい、逃げ出して正解だった気がした。しかし、彼はまだ少女たちの名前を聞いていなかった。

「ところで君たちは？」

「私は高原渥美。」

「ボクは高原つかさ」

二人は姉妹のようだ。渥美は州に重要なことを聞いてきた。

「ところで、どうしてここにきたの？」

「話せば長くなるんだけどね・・・」

州は自らの過去を話し始めた。

第1話 出会いー1（後書き）

次回は主人公の過去です。最初のほうに書いた過去とは少々異なりますが、そこはあしからず。

第1話 出会いー2 (前書き)

主人公が自らの過去を語ります。

第1話 出会いー2

州は渥美とつかさに自らの過去を語り始めた。

「さつきも言ったとおり、僕は日影町という町に住んで、日陰小学校に通っていたんだ。だけど、僕はそこで散々ひどいじめを受けていた。かばってくれるのは女の子だけだったんだけど、父さんからは女とは口を聴くなんて言われてたんだ。」

「最低の父親ね」

「うん。父さんは女嫌いで母さん以外の女性の存在は認めないみたいなんだ。」

「君の実家は？」

「僕の実家は畳屋を営んでいて、父さんは僕に後継させるつもりだったんだ。だけど、僕はそれが嫌だった。」

「それなら言えばよかったじゃない。」「僕は畳屋なんか告がない」「って」

しかし、その一言が傷口に塩を塗ってしまったようだ。

「それができたらそうしてるよ。断りたかったんだけど、断ったら将来はアメロツパの軍隊行きだと言われて断れなかったんだ。あと、僕を生涯独身で誰にも僕をやらないうって」

「一人息子だったの？」

「いや、弟が一人いたよ。だけど、彼は誰とでも話してよかった。ひどいいじめを受け、女とはかわってはいけない僕は、クラスでも孤立していた。そんな学校生活に嫌気が指した僕は、不登校になったよ。でも、父さんは喜んでいて。だけど、僕は喜ばなかった。」

「何で？」

「僕は、デンサンシティに上京して、バンドをやるって言う夢があったんだ。だけど、父さんにより、その夢は壊されたんだ。」

州はあることを忘れたらしい。

「あ、話を戻すけど、父さんは僕に畳屋を継がすためにいろいろ教えていた。だけど、僕はそんな生活なんて、うんざりだったんだ。だけど、一ヶ月前、僕は大失敗を起こした。」

「そしてどうなったの？」

「多額の借金を作ってしまった、毎日のように借金取りが押しかけた。母さんも会社は解雇になった。そして、畳もぜんぜん売れなくなつた。やっと売れても不良品でどんどん送り返されてきたんだ。いつか軍隊に強制入隊されると思った僕は、あの日家を抜け出したんだ。」

「でも、いつか両親が探しにくるかもよ。」

それは無理はない。何しろ子供が家出をしたのでは、親は警察に捜索願を出すのは当然だ。

「そんな……。じゃあどうやって逃げるんだよ。」

「じゃあ、仮名を名乗れば？」

「仮名？昔の漫画みたいに？」

しかし、いくら仮名を名乗ったとはいえ、指紋で誰かが分かってしまつ。しかし、仮名を名乗らないよりはましだろう。

「僕は今日から高原秀だ。」

「私たちの苗字、とつてない？」

「うん、僕がまだ気を失つたとき、従姉弟つて説明するつて言つてたから、その従姉弟も偶然苗字が同じつてことで。秀才から取つて、秀にするよ。でも……。」

「でも？」

「行く当てがないんだ。もし、邪魔じゃなかったら居候させてほしいんだ。」

「最初からそう決めてたわ。従姉弟は預かるつて言つのが当然でしょ？」

「まあ。」

しかし、彼は重要なことを聴いていなかった。

「君たちは何年生なの？」

「私は4年生。」

「ボクも」

「僕は3年生。まだ、不登校を続けるよ。」

「いいの?」

「うん、それにこうしたほうが都合だよ。しばらく動きがなかったら、警察も搜索を緩める。そのときが学校に入るチャンスだ。まあ、最低でも4年生になるときまではね。っておい!」

渥美は秀に抱きついてきた。渥美は自らの顔を肩にかけ、秀に行った。

「秀、今までの生活つらかったでしょう?私に甘えていいから。」

秀は何も言えるはずはなく、無言で頷いた。つかさは、ジエラシーかは不明だが無言でテレビをつけた。テレビでは、ちょうどニュースがやっていった。

「警察は、遺体の身元の確認を急いでいます。次です。課柄県、対用市・日影町に住む上原家の長男、州君が、5日前から行方不明になっていきます。州君は、青いトレーナーに、緑の半ズボン、白いスニーカーをはいており、警察は100人がかりの厳戒態勢で州君の行方を追っています。」

それを聞いた秀は頭の中が真っ白になった。なにしろ、行方不明になって5日もたったら警察も厳戒態勢で搜索するも当然だ。

「父さんめ……。」

秀の内心は無性に怒りたい気分になった。しかし、彼の体は雨で冷え切っていた。

「ハックション！」

「秀、お風呂入ってきなさい。」

入りたかったが、今の秀にはそんな気力はない。動くことすら間々ならない。

「明日でいいよ。」

「ダメよ！そのままだと、風邪引いて衰弱死しちゃうわ！」

「……………」

彼は、浴室へ向かい、5日ぶりに入浴した。5日分の疲れが取れたようだった。ちなみに、着替えが入っているかばんは、脱衣所においてある。

風呂あがりした秀はさっぱりした気分だった。そして、残っていたレトルトおかゆを食べた。しかし、渥美たちには悪いことをした気がした。それに、大事なことを聞いていなかった。

「そういえば、僕はどこで寝ればいいんだ？」

「こっちよ。ついてきて。」

秀は渥美に言われるがまま、ついていった。

そこはたたみの部屋だった。しかし、テストの答案が猛烈に散らかっている。

「すげえ散らかってんだけど。」

「ごめん、明日片付けるから。」

「まあ、布団はないよりましかな。じゃ、おやすみ。」

秀は渥美に寝ることを言った。渥美が秀に言った。

「明日から、押入れの中に入ってる服を着て。使えないけど、防虫されてるから。」

「分かった。じゃ、おやすみー。」

秀は、眠りについた。久々にゆっくりと寝られる。秀の寝顔はどこかうれしそうだった。

第1話 出会いー2 (後書き)

感想、待ってます。

第1話 出会いー3 (前書き)

遅れましたが、第1話の3部目です。大目に見てください。

第1話 出会いー3

翌朝は、晴天に恵まれた。こんなに気持ちのよい目覚めを体験したのは何日ぶりだろう。秀は机の上に置いたPエETトを注目した。PETは、パーソナル・ターミナルの略称で、あの光熱斗も使っていた携帯端末だ。時計機能を見ると、午前6時45分になっていた。普段は、5時半に無理矢理起こされたので、今日は気持ちのよい目覚めだ。秀は、カーテンを開きベランダに出た。朝日が眩しく、気持ちのよいそよ風が入ってくる。これぞ、朝の目覚めであろう。秀は下を覗き込んだ。すると……。

「うわ、高！何階だよ！ここ。」

すると、渥美が目をこすりながらやってきた、

「何？朝っぱらから。」

「いや、ここ何階かって。」

「ここは、35階よ。」

道理で高いわけである。

「じゃ、私もう一眠りするから……」

そっぴい、渥美は眠りについた。

「僕もちよっと寝よう。」

秀もまた、部屋へ戻って二度寝した。

再び目を覚ますころには、すでに7時半を回っていた。秀は大欠伸をしながら、ベッドから出た。PETを見ると、不在着信が7件。メールが10本来ていた。しかし、秀はPETの電源を切った。もはや、このPETはお払い箱だ。しかし、PETには、GPS機能がついているため、いくら仮名を名乗ったとはいえ、逃げることはままならない。秀は、PETを分解し、GPSの線を切った。これで、自分はどこへ行ったかは誰もわからなくなる。秀は散らかっているテストの答案のひとつを見た。高原高貴35点。彼には、やる気というものがあるのだろうか。

「ご飯できたよー！」

渥美の声が響く。

「はい！」

秀は部屋を出たが、トボトボ歩いた。上原家にいたときは、朝ごはんはろくなものを食べさせてもらえなかった。なぜなら、彼の家はたたみはまったく売れず、毎月赤字だったのだ。しかし、リビングに出た秀は目を疑った。テーブルにはご飯、味噌汁、ハムエッグ、牛乳、野菜サラダと、朝ごはんにはもってこいの品揃えが並んでいた。こんなにいいものは、今まで見たことがない

「秀はそこに座って。」

「うん。」

渥美の朝食は、見れば見るほどおいしそうだ。

「「「いただきます」「」」

全員、挨拶を済ませ食べ始めた。秀は恐る恐るご飯を口に運ぶ。一口食べた秀は、今までこんなものは食べたことがない顔をした。

「おいしい！こんなにおいしいのは初めてだ！」

「君のお母さんはどうなの？」

こういわれると、誰もが気になるものだ。

「よく、砂糖と塩を間違えることがあるんだ。見た目もひどく、何をどうやったらこうなるんだという有様だよ。」

「要するに、まずいつてこと？」

「うん、母さんは、下手の横好きでそれに加え、外食も主婦の血とプライドが許さないってことで許可してもらえなかったよ。ところで、君たちの両親は？」

「ボクたちのお父さんは、冒険家だよ。でも、最近音信不通になっちゃったんだ。」

父とくると、母も気になる。

「で、母さんは？」

すると、渥美はうつむいてしまった。母親にはいい思い出がないの

かは知らないが悪いことを聞いてしまった気がする。

「私たちのお母さんは、お父さんに愛想をつかして、離婚して出て行っちゃったの。」

「ごめん、悪いこと聞いちゃった？」

「ううん、気にしてないよ。」

そうこうしているうちに、朝ごはんを食べ終えた。

「「「ご馳走様でした」「」」

そして、2人は自分の仕事に取り掛かる。しかし、秀は浮き気味だ。そこで、渥美に何をすればいいかを聞きに行く。

「渥美さん。僕は何をすればいいの？」

「秀、私たちのことは姉のように呼んでいいのよ。まずは、布団を干してきて。」

「分かった。」

秀は自ら自分の部屋に向かう。でも、全く見ず知らずの人に姉で呼ぶのは気が進まない。

「あと、私たちのも干して。」

「はいー！」

布団は、何年干されてないだろうか。完全にぐっしよりぬれている。しかし、疲れてそれにはまったく気づかなかった自分が情けないと思っただ。

しかし、そんなことなどお構いなしに、秀は布団を干す。まずは、掛け布団、次に敷布団。しかし、風で飛んでしまつとまずいので布団を挟む物（名前なんだっけ？）で、固定する。

そして、秀はベランダ伝いに、渥美の部屋に入る。部屋は、意外とシンプルにまとめられている。棚の上には、かわいい系の置物など、女の子らしさを主張している。秀は、引き続き布団を干すことにした。ベッドは2段ベッドで布団を取るのも疲れる。すると、リビングから声が聞こえた。

「つかさ〜！ごみ捨ててきて〜！」

秀は聞いてはいたが、引き続き布団運びを続ける。そして、布団干しを追え、自分の部屋に戻った。

気がつくと、秀はまだパジャマのままだった。秀は部屋のクローゼットを開けた。そこには、着なくなった服がたくさん入っていた。しかし、それらは男物だった。渥美たちが持つなんて、到底思えない。おそらくここは兄か弟の部屋だったのだろう。秀は服を着替えることにした。

時間はかかったが、自分の体格にジャストの服が合った。ちなみに秀は、少々痩せ型である。

「布団干し終わったよー！」

「部屋、片付けるからちょっと待ってて。」

しばらくして、渥美が部屋に入ってきた。手には、掃除機を持っている。

「それ、お兄さんが着てた服。」

「え？これ君のお兄さんの？」

「うん、高原高貴。数年前、事故で死んじゃったの。」

「その霊が乗り移ってるかも。」

その瞬間、渥美が掃除機を秀に構え、スイッチを入れた。

「う、うわああ！何するんだ！！」

「何って、悪霊を吸い取るだけよ。」

「吸い取るのはこのごみで十分だよ！」

言われた渥美は、掃除機のスイッチを切った。

「ごめん、私としたことが……。この、ごみ片付けるからちょっとリビングで待ってて。」

「ああ。」

秀はリビングに向かい、テレビをつける。今日は、日曜日だ。秀が好きな出張！アド町ツク全国の日だ。今日は、デンサンシティの

草華ヶ丘に出没していた。

「ただいまー！」

「おかえりー。」

つかさが帰ってきた。

「じゃ、つかさも帰ってきたし、こっちも終わったら、出かけるわよ。秀も支度して。」

渥美は、部屋の掃除を終えたらしい。

「どこへ行くの？」

「シティのほうよ。」

この市の住民は、この市のことを、シティと呼ぶらしい。しばらくして、渥美が戻ってきた。

「まずは、ビルの足元に行くわよ。」

「あーい。」

秀はP E Tの電源を入れた。しかし、GPS機能は秀により機能を停止したので、どこにいるのかは分からないようにしてある。こんなことなど実家にいたときは逃げ回ったとき、父に何回もつかまった経験だ。秀は歯磨きと洗顔を済ませ、渥美たちと外出した。暗く見えなかったこの町は何なのだろう。

その答えは、次回明らかに。

第1話 出会いー3 (後書き)

今回は、渥美とつかさが、秀に町を案内します。

ちなみに出張！アド町ツク全国のモデルは、テレビ東京の出演！アド町ツク天国です。

第1話 出会いー4 (前書き)

ここから町の案内です。メインのジュニアポリスの組織の登場は、
もう少し遅くなると思います。

第1話 出会いー4

秀と渥美とつかさは、家を出発した。家はビルの中なので、当然、エレベーターがついている。その隣には、ゴミ捨て場がある。時間が来ると、コンベアに乗っているゴミがダストシユートに落ち、地下のゴミ捨て場に落ちる仕組みだ。エレベーターに乗り込んだ秀はあることに気がつく。

「このエレベーター、30階までしかボタンがないんだけど。」

「ああ、それね、一回30階に下りて、そこから大型エレベーターで一気に降りるわよ。10階おきにしか止まらないからはやいわよ。」

「めんどくさいね。」

「でもこっちが効率いいって。」

そしてエレベーターは30階に到着した。そこは、スカイロビーで、隣にはマンションフロアをつなぐ階段がある。しかし、31階と32階の住民しか利用しないらしい。太い柱に見えるのは、ダストシユートのチューブだ。遠くには、従業員専用エレベーターが見える。そして、反対側を見ると、どこかへ向かう連絡通路が見えた。どうやら、ツインタワーらしい。秀がふと見ると、大きな扉が見えた。

「これが、大型エレベーター？」

「そつよ。」

秀は言われるまでもなくボタンを押した。しばらくすると、30階のランプが点灯した。

「今日は早いね。」

「そりゃそうよ。平日なんか、結構待たされたことあるもん。」

しかし、秀には話の内容が理解できなかつたらしい。

「????」

秀たちはエレベーターに乗り込んだ。何でも50人乗りらしく、エレベーターは、結構広い。そして、1階のボタンを押す。

エレベーターは、途中のスカイロビーをすべて通過しあつという間に1階に着いた。1階とあつてロビーは相当広い。しかし、いくらなんでも無駄に広すぎだろう。正面出入り口の案内を見ると、2階から9階がオフィス。11階から19階がホテル。21階から29階がショッピングパーク。そして31階から39階がマンション、そして地下はレストラン街らしい。

そして、三人はビルから出る。秀が振り返ると、ビルの名前が、石彫りで作られたオブジェが見えた。オブジェには、Dragon International Building(ドラゴン国際ビル)とかかかっていた。ちなみにビルの住民は、このビルのことをDIBと呼んでいる。秀は呆然とDIBを見上げた。隣を見ると、もうひとつの超高層ビルが聳え立っていた。DIBとその超高層ビルは、スカイロビーごとに連絡通路で結ばれている。2つ上の連絡通路は、さっき秀が見たものらしい。

「秀〜！何してるの？行くよ〜！」

「あ、待って〜！」

危うく、秀は置いていかれるところだった。ふと見ると、地下道への入り口が見える。

「あの地下入り口は？」

「あれは、地下鉄の駅につながってるわ。尤も、もったまだ工事中だけど。」

「いつに開通するの？」

「205X年の6月よ。ちょうど、あなたは中学3年生ね。」

「じゃあ、君たちは高校生だね。でも、ほかの町にはどうやっていくの？」

渥美は、高架橋のホームを指差した。

「あそこからバスで行くわよ。」

「うん。」

秀たちは、高架橋ホームに来た。ホームには、バスの時刻表、広告が張ってある。広告のひとつに、「早い！安い！ドラゴンバス！ドラゴンシティの移動はドラゴン交通局で！どこからどこまで乗っても100ゼニーです！」

と書かれている。ちなみに、ゼニーとは、この世界のお金の単位で

どこの国でも、このお金で通用する。案内板を見ると、ここは辰ノ町という町らしい。

「あのDIEBの隣にあるでかいビルは何？」

「あれは、井上コンツェルンの本社ビルよ。」

「あれが……。」

すると、アナウンスが流れた。

「お待ちせしました。まもなく、竜岡町行きバスが参ります。ホームドアより内側までお下がりください。」

しばらくすると、バスがやってきた。バスは、銀色の車体に山吹色の帯がついている。そして、帯の中にはドラゴン交通局の文字とエンブレムが描かれている。

「ドラゴンシティってこの市の名前？」

「そうよ。」

「え！？もしかして第二の首都ともいえるドラゴンシティってここ！？？」

「そこまで驚かなくても。」

秀たちはバスに乗り込んだ。バスは、ノンステップタイプで、専用軌道走り、渋滞に巻き込まれないので早く目的地に着けると人気だ。しかし、地下鉄が開通すると、廃止になってしまうらしい。バ

スは辰ノ町を出発した。しばらく走ると、住宅街に入った。

「ここは、コトブキタウン。シティで一番の住宅街よ。」

バスは、ホームに止まった。すると、たくさんの人が乗ってきた。

「すごい人だな。」

「ここはシティで一番人口が多い地区だから。」

バスはさらに走り、都会らしき町に着いた。

「ずいぶんでかい町だな。」

「ここは、エレキタウン。シティの大都市とも言える町よ。」

「ほかにはどんな町があるの?」

「港町の埠頭町。高校がある竜岡町、ニュータウンの欄内ニュータウンがあるわ。まだ開発中だけど。」

しばらく走ると、学校らしき建物が見えてきた。渥美がボタンを押す。

「次、止まります。」

秀たちはここで降りた。バスホームのエレベーターを降りてすぐのところ、学校の正門が見えた。校門には、ドラゴン学園と書かれた表札がかけられていた。ふと見ると、地下鉄乗り場への地下入り口が見えた。しかし、ロープが張られているため、入れない。

「1111は？」

「ここは、ドラゴン学園。私たちはここに通ってるの。いつかはあなたもここに通うことになるわ。」

「はいこれ。」

つかさがチップを秀に渡した。チップには、ドラゴン学園入学案内と書かれている。チップは、PETに差し込んで使うもので、PETにプログラムをインストールしたりできる。またこのほか、バトルチップもあり、ネットバトルに不可欠なチップだ。これについては、また後ほど。秀は先ほど手渡されたチップを差し込んだ。

すると、PETのスクリーンが現れ、学校の校舎が3Dで飛び出した。しかし、誰も驚かない。いまどきの時代、これが当然なのだ。そして、学校のPVプロモーション・ビデオが始まった。

しばらくして、PVが終わった。

「秀君、次の場所に行くよ。」

「あ、うん。」

つかさに呼びかけられ、秀は別の場所へ向かった。

第1話 出会いー4（後書き）

次は、どこに行くのかな？

あ、言い忘れたけど、感想待ってます。

第1話 出会いー5 (前書き)

渥美たちがいろいろな町を案内します。終盤は秀が学校に転入します。

第1話 出会いー5

そして、秀たちはエレキタウンに戻ってきた。シティの都会とあって、とても大きい町だ。

「さっきも言ったようにここは、エレキタウン。シティの都会といわれてる町よ。」

「あのでかい建物は？」

その建物は、工事中のため、布が張られている。

「あれは、電気やさんの予定地よ。モッソーは、「」ないものは、ない」「らしいよ。」

しかし、こういわれると、誰もが疑問に思うものだ。

「どっちなの？あるのかないのか。」

「さあ。」

さすがに、このことは、渥美も知らないらしい。そして、次の町へ向かった。

辰ノ町を過ぎてしばらく走ると、横に長い大きな建物が見えてきた。
建物の真ん中あたりには、ニホンナショナルレールウェイNNRと書かれていた。上のほうには、ニホンハイスピードレールウェイNHSSRとかかかっている。どうやら、駅のようだ。またしばらく走ると、バスは終点に到着した。そこは、開けた港町である。

「ここは、埠頭町。名前のとおり、海沿いの町よ。」

「あの建物は？」

「あそこは、魚市場。新鮮な獲れ立ての魚が売られてるわよ。」

秀は、向こうを見ると異色の道路が見える。その道路の先は大きな建物がある。造船場のようだ。

「あれは？」

「あれは、船の修理工場よ。船が入るときはあの跳ね橋が上がるの。あと、防波堤も開くようになってるわ。」

「すごいな。」

あまりのすごさに秀はただ呆然としているしかなかった。渥美は、秀の肩を取りある岬を指差した。

「あれは、乙女ヶ崎。トワイライトタイムのとき、あそこで告白したカップルは永遠に結ばれる言い伝えがあるわ。」

「へえ〜。ロマンチックだな。あれ？二人はいつもどこで買い物してるの？」

渥美が答えようとすると、つかさが口を挟んだ。

「DIBのショッピングフロアだよ。」

「せっかくだからよっていく？」

「うん。」

3人はバスの乗車ホームにやってきた。すると、折り返しのバスが到着した。よく見えなかったが、そのバスには、大和撫子みたいな少女が乗っていた。どうやら、秀とは同年代らしいが、むこうは気づいていないらしい。

そして、バスがロータリーを回りまた戻ってきた。秀たちはバスに乗り込んだ。バスは辰ノ町へ向けて出発した。

そして、駅前、市役所前を通り過ぎ、バスは辰ノ町に到着した。

「フゝ、タウンの空気は落ち着くゝ」

どうやら、この市民は自分の住む町のことをタウンと呼ぶらしい。3人は、DIBに入ってしまった。夕方とあって、買い物主婦が多い。時間はかったが何とか大型エレベーターに乗ることはできた。

そして、エレベーターはショッピングフロアのスカイロビーに到着した。入れ違いに降りる人たちが乗り込んだ。気がつくくと、渥美が秀の手を握っていた。

「人がたくさんいたらはぐれるでしょ。」

そのぬくもりは母親のようだった。そして、渥美も4年生なのに大人ぶって見えた。母がない家庭では長女は、毎日苦労しているのだろう。秀は明日から渥美お姉ちゃんたちを手伝ってあげよう。そう決心した。

その夜。

「はい、これ。」

つかさが秀にある箱を手渡した。秀は箱を受け取りあけてみる。それは、なんと新しいPETだった。PETは、ルビーのように真っ赤だった。

「前のPETは、明日古い服と捨てるけどいい？」

「うん。両親から逃げれるならそれでいいさ。」

「ちょっとついてきて。」

そこは姉妹の部屋だった。渥美は慣れた手つきでPETとパソコンを接続させ（この時代では、電子機器同士の接続はワイヤレスが当たり前になっている。）、パソコンを起動させた。

「そこにあるPETのアイコンをダブルクリックして。」
コクッ

秀は、PETのアイコンをダブルクリックした。すると、ユーザー登録画面が現れた。秀は画面の指示通り、ユーザー情報を登録した。パソコンはほとんど使ったことがなかったため、なれない手つきだったがそれでも入力した。そして、すべての情報を登録完了し、そのPETは、晴れて秀の物となった。

その翌朝、秀は自分でも驚くようなニュースが飛び込んできた。

「次のニュースです。えー、残念です。一週間前から失踪している

上原州君ですが、先ほど、ドラゴンシティの海域で服が見つかったとの情報が入りました。このことから、家出をした後、しばらく逃げ回り最終的に海に飛び込んで自殺し、服は脱げ海流に流されたと言葉も見られます。州君の遺体はまだ見つかっておりません。」

「え？これ何？もしかして、服を捨てたつてのは……。」

「ええ、これは全部捏造よ。あなたは海に飛び込んで死んだとも思うでしょ。警察は捜索をあきらめるはずよ。」

「だといけど。」

その後、秀の不登校期間中は、土日は渥美に家事の手ほどきをしてもらい、学校に言っている間は、秀が一人で家事を完璧にこなす毎日を送っていた。高原家は、豊かとは言い難かったが二人は秀に優しく、そして厳しく接した。秀もそれに応えていた。

そして、時は流れて2月。秀はちょうど、部屋の掃除が完全に終わったところだ。すると、渥美が部屋に入ってきた。

「秀、転校手続きは終わったわよ。」

「四月からまた再登校か。」

「まあ、学年は違うけどね。」

そして4月。ドラゴン学園は始業式を終えた。秀は担任の先生に導かれ自分のクラスへ向かった。ここは、4年C組だった。

「君はここで待ってて。」

「はい。」

そついい、担任は教室へ入っていった。秀はドアのところでも聞き耳を立てていた。担任の話し声が聞こえる。

「えー、皆さんは、今日から4年生です。今まで以上に気を引き締めていきましょう!」

しかし、全員黙っている。秀は、説得力がないと思っていた。

(大丈夫かな。この担任)

「私はこのクラスの担任を受け持つ坂下隼人です。そして、今日のクラスに転校生が入ってきています。入って来い。」

「あ、はい。」

ガラガラガラ

隼人先生は、黒板に秀の苗字と名前を書いた。そして、秀に言う。

「それでは転校生を紹介します。簡単な自己紹介でいい。」

「はい。えー、高原秀です。両親が海外に転勤して、親戚の家に預けられてここに来ました。不束者ですが、どうかよろしくお願いします。」

すると、一瞬の沈黙の後、拍手が飛び交った。

「じゃあ、君はあの席ね。」

「はい！」

こうして、秀の新しい学園ライフは幕を開けた。しかし、本当の始まりは秀が中三になったときから起こる。

第1話 出会いー5（後書き）

NNRのモデルは、JRです。ちなみにNHSRは、新幹線がモデルとなっています。関係ないけど、渥美はどうやって戸籍のない秀を学校にいれたんでしょうか？次回は、平和な世の中で起きる裏の話です。一話だけですが、あしからず。

第1話 出会い - 6

時は、同じくして裏インターネット。無法者の集まるエリアとして言われ、生きて帰ったものは一人もないという。

その一角でヒールナビの軍団が、赤いバンダナをつけたナビを追っていた

「てめえ！待ちやがれ！」

「待てといわれて待つやつがいるか！」

彼らは何らかの集団らしく、赤いナビが集団を裏切ったようだ。

そして、日陰エリアの入り口付近で、赤いナビは追い詰められていた。

「もう追い詰めたぞ。さあ、返してもらおうか。」

「いいだろう、渡してやる。俺をデリートできたらな！」

「なぜ貴様が裏切った。」

「それも、身分があのお方よりひとつ下のお前が。」

どうやら、赤いナビは裏切り者として負われているらしい。すると、赤いナビが何かを取り出した。

「まずい！ネオドリームウイルスを起動させる気だ！」

ネオドリームウイルスは、この組織の最強兵器である。どんなナビも太刀打ちできず、その気になればインターネットの全エリアをつぶすことができる。また、原型となったドリームウイルスは、約50年前、ワールドスリーWWWによって作られたウイルスで、一度はロックマンにデリートされたが、あのお方と呼ばれているネットナビがそのデータの一部を拾い、復元したものらしい。

しばらくして、裏インターネットが崩壊を始めた。そして、赤いナビは、どこかへ一目散に逃げ出した。

「まずい！あつちは！」

しかし、赤いナビはそれをも無視した。

「表のインターネットが、俺を呼んでいる。」

果たして、彼の先には何が待ち受けているのだろう。これからどんな物語が待ち受けているのだろう。その答えは、誰も知る由はない。
(私は知っています、教えません。)

第1話 出会い - 6 (後書き)

次回から物語が大きく動きます。と、その前に次回は、これまでのキャラクターの登場人物です。

キャラクター紹介 1 (前書き)

これまでに登場したキャラクターの紹介です。一部不明な点がありますが、そこはあしからず。

キャラクター紹介 1

たかはらしゅう
高原秀

この小説の主人公。元は日影町と呼ばれる遠い町に住んでいたが、学校で散々ひどいいじめを受けさらには実の父から自分の家の店を告がされることになり、それが嫌で町から逃げ出しドラゴンシティにやってきた。ただし、高原秀は仮の名前で、本名は上原州。温厚で困っている人は放っておけない性格。また、正義感は一匹強い。一人称は「僕」

たかはらあつみ
高原渥美

この小説の準主人公。ドラゴンシティに住む少女。秀の義姉で秀同様、困っている人は放っておけない性格だが、まじめな性格。また、家事が大の得意で秀に家事の手ほどきをしたのも彼女。最近秀に興味を持っている模様。一人称は「私」

高原つかさ

基本的には渥美と同じで、渥美の妹。渥美と違い好奇心旺盛で怖いもの知らず。秀もたまに彼女のせいで、異常に疲れることがある。薬を調合するのが得意で、さまざまな薬を作っている。だが、渥美曰く、信用できるものを作ったことが一回もない。とのこと。一人称は「ボク」

赤いナビ

裏インターネットのある組織に属していたナビ。あるときその組織

を裏切り、終われの身となる。その後、表のインターネットに逃げ込んだ。詳細はまた後ほど。一人称は「俺」

キャラクター紹介 1 (後書き)

秀：それから6年のときが流れた。僕たちは中学校3年生になっていた。ある日、僕の元に届いたなぞのMD。その中には、ネットナビがインストールされていた。だけど、そいつは謎の組織を裏切り、追われているらしい。僕、どうなっちゃうの!?次回ジュニアポリス、始まり。

次回も読んでね!

第2話 始まりー1 (前書き)

いよいよ、本格的に始まります。

第2話 始まりー1

205X年。世界中を網状につなぐネットワーク、通称インターネットは50年前とは比較にならないほど発展した。どのよう発展したかは、説明しても分からないだろう。しかし、そんな時代でもネット犯罪集団や、コンピューター・ウィルスの被害はあった。そんなことはあっても基本的には毎日平和な日々を送っていた。そして、ここはニホンの大動脈のほぼ中央に位置するドラゴンシティ。ドラゴン国際ビル、通称DIB。35階にあるマンションフロアの一室。一人の少年が眠っていた。

PPPPP! PPPPP! PPPPP! PPPPP!

朝、僕の部屋に目覚しの音が鳴り響く。うるさいが、本能が起きると悟っている。僕はスイッチを押し目覚しを止めた。この目覚しはデジタル時計が搭載されており暗くても見える仕組みだ。しかも、電波時計なので、時間のブレが一秒もない。机の上には、ラジオがおいてあり、朝の目覚めにぴったりだ。ラジオをつけると、ちょうど天気予報がやっていた。

「今日は、全国的に晴れのち曇り。ところどころでにわか雨となるでしょう。」

僕は制服に着替え朝食に向かう。僕の通っている学校は、小中学校が同じ校舎にあり、小中通して制服だ。

「おはよー。」

「あ、おはよう。朝ごはんももう少しでできるから待ってて。」

「んー。」

彼女は高原渥美。僕の義姉だ。彼女は成績優秀、スポーツから家事まで万能でシテイでは彼女の右に出るものはいないと言う人もいる。だが、少し真面目すぎるのが玉に瑕だ。多分、いい嫁さんになるな。本来なら、家事は居候の僕がやるべきなんだけど彼女は、自分の仕事だからと譲ってくれない。それはそれでいいんだけどね。

「おっはよー！」

(うるさいのが出てきた。)

彼女は高原つかさ。同じく僕の義理義姉で、渥美姉ちゃんの妹だ。姉とは対照的に天然ボケ少女。たまに、僕は彼女に振り回されることがある。最近、薬の調査にはまっており、渥美姉ちゃん曰く、最近怪しくなってきた。とのこと。また、好奇心旺盛で怖いもの知らずのボク少女だ。

「できたよー。何ボーっとしてるの？」

「ああ、ごめん。」

「「「いただきます！」「」」

渥美はテレビをつけた。テレビではニュースがやっており、もうすぐ開通するドラゴンメトロの話が流れていた。

「昨日、ドラゴン交通局からメトロの試運転が終了したとのコメントがありました。このまま問題が何もなければ、6月初旬には開通すると局長は述べています。全長40km、駅の数は一三個で、開

通する予定です。」

「開通したら早くいけるかな。」

「だといいね。」

一番に僕が朝食を食べ終えた。

「ご馳走様！」

食器を食器洗い乾燥機に入れ洗面台に洗顔に向かう。

洗顔を済ませ僕は学校に向かう。かばん持たなくて大丈夫か？と思う人もいるが心配は無用だ。なぜなら、PETペットと呼ばれる携帯端末に生活に必要なほとんどがインストールされているのだ。PETとは、パーソナル・ターミナルの略称で、電話やメールはもちろん、教科書、ノート、新聞、クレジットカードの機能を兼ね備えた現代には欠かせない必需品となっている。というより、これをもたない生活など想像もつかない。いまどきの時代、このPETは欠かせないのだ。

「んじゃ、行ってきまーす！」

「ちょっと忘れ物！」

「え？」

それを聞いたとたん、背筋に寒気が走った。まさか、あれをやる気じゃ……。

「ほら、あ・ね。」

「いや、だからそれは……」

渥美姉ちゃんは問答無用と言わんばかりに僕にキスをした。少しは自重してもいいものを。

「まったく……。じゃ、行ってきまーす!」

「行ってらっしゃーい!」

僕は逃げる!と言わんばかりにさっさと家を飛び出した。そして、エレベータの脇にあるゴミ捨て場にゴミを捨てる。え?さっさとお前のことを教える?僕は高原秀。今日から中学校3年生。つまり受験生だ。僕はドラゴン学園中等部に通っている。でも、来年はここからさらに北にある竜岡高校に通うつもりだ。あの二人は僕の義姉で、双子なのだ。その割にはまったく似ていない。なぜなら、彼女らは二卵性双生児なので、性格も顔つきも共通点がひとつもない。気がつくとな僕はバスのホームに来ていた。ホームは学生たちで混んでいる。すると、アナウンスが流れた。

「お待ちせしました。まもなく、欄内^{らんない}ニュータウン行きのバスが参ります。ホームドアより下がってお待ちください。」

今日もいつもと変わりなくいつものバスに乗り込む。しかし、退屈で仕方がない。だが良く言えばそれが平和と言うものだ。

しばらくして、僕が通っている学校が見えてきた。

「次は、ドラゴン学園入り口です。」

ピンポン

「次、止まります。」

さあ、今日もがんばろう！

第2話 始まりー1 (後書き)

やっと始められました。そういえば、このサイトがリニューアルしたそうですね。そうそう、感想も遠慮なく送ってください！

第2話 始まりー2

数日後、帰りのバスの中。僕は鬱な気分だった。明日、世界が滅亡しそうな表情が自分でも分かる。

「はあく。最近ついてないな。この間買いに行ったお買い得ネットナビは、全部売り切れで、おとともチンピラに絡まれ、バーゲンセールに行けば、主婦に踏み潰される。いやな毎日だな。JPも、入ってから3年たつけど、まだジョーカーだよ。」

ジュニアポリスの階級は、トランプレベルだ。下からジョーカー、ジャック、クイーン、キング、エースと言った具合だ。そんな僕を渥美が慰めるように言った。

「元気だしなよ。そのうちいい事あるから。」

「昨日もそういつてたけど、それがあつた形跡がない。」

PPP!PPP!

今日の新聞が届いた。僕は新聞を開き、読んでみる。見出しの一部の記事にはこう書かれていた。

謎の連続放火事件。二週間前から無差別に家々を襲う放火が発生している。警察は初期、火の不始末が原因と言われていたが、最近になり、原因が判明した。炎のネットナビによる放火とウイルスが原因と判明。事件があつた家の近くには、不審者が目撃されなかったことから、犯人はこのネットナビを遠隔操作しているものと見て警察と消防は捜査を進めている。

「最近物騒だな。うちは大丈夫なの？」

「この間、見てもらったけど問題ないって。」

「よかった。っていうかこれ、50年前にあつた事件に似てない？」

今から約50年前、僕たちがまだ生まれる前のこと、昔の犯罪組織ワイルドスリWWがデンサンシティで暗躍したとき、レンジを発火させたり地下鉄や信号を暴走させたりなど、危険極まりない事件を起こしたことがある。そして、これらはほとんど光熱斗ひかりねっとの手によって解決した。なんで、こんな昔の事件を知っているかという、昔の事件ファイルを読んだからだ。

ちなみに、ウイルスとはコンピューターウイルスのことで、電子機器に障害を与えるプログラムのこと。これを取り除くために作られたのがネットナビだ。昔活躍したロックマンもネットナビの一種だ。僕が窓から外を見ると、非常に高いビルが近くに見えた。僕たちが住むDIB（ドラゴン国際ビル）だ。すると、アナウンスが流れる。

「次は、辰ノ町です。」

ピンポン

「次、止まります。」

僕たちは、DIBに入っていく。すると、帰りのサラリーマンたちで、ロビーがごった返していた。僕たちは、大型エレベーターに乗り込んだ。10階ごとにしか止まらないのですぐに、目的フロアのスカイロビーまで行ける。僕たちを乗せたエレベーターは30階に

到着した。そこから普通のエレベーターで、35階まで向かう。そして、いつものように帰ってくる。普段は何も入っていない郵便受けだが、今日は一通の封筒が入っていた。なにやら、サラリーマンの封筒みたい紐で縛ってある。別にたいしたものではなさそうなのだが、僕は開けてみることにする。

「あれ？MDミニディスクに手紙だ。いまだき珍しいな。手紙なんて。」

「それ、だれから？」

渥美に言われ、僕は手紙を見渡した。しかし、宛名が書かれていない。とりあえず手紙を読んでみることにする。手紙にはこう書かれていた。

高原秀様 この手紙をもらった君は、このMDをPETにインストールしてください。

しかし、僕は何のことか分からない。

夕食を済ませた僕は、自分の部屋へ向かった。

部屋にはほとんど何も無い。あるものと言えば、ベッド、机、パソコンぐらいだ。さてと、インストールでもしてみるか。

僕はパソコンを起動させ、MDをパソコンに挿入した。そして、パソコンとPETを接続させる。そして、僕はインストール作業を着々と進めていた。そして、インストールが終了した。

「インストール完了！起動！」

すると、P E Tのメインメニューが移った。しかし、すぐに画面が消えてしまった。おかしいな。

「インストールは終わったのに。再起動！」

一度電源を切りもう一度入れた。ディスプレイには、P E T・I P C（伊集院ペットカンパニー）の文字が出た。そして、メインメニューが移ると、ノーマルナビが僕に言っていた。

「メモダイアリーとメモラーのアップグレードが終了しました。パーソナルターミナルのOSは、オペレーティングシステム新しいバージョンになりました。これから最適化を始めます。最適化終了まで30分かかります。」

「それだけ？」

「それだけです。」

それを聞いた僕は、絶望した気分になった。やはり、自分には幸運には縁がないのだ。

「明日、これ送り返そう。」

しかし、警備員が巡回中の深夜。P E Tでは、最適化作業が終わっていた。

「実行用プログラムを受信。ミニディスク内のカスタマイズプログラムを始動します。」

秀本人は気づいていないが、P E Tではカスタマイズプログラムが組み込まれ赤いネットナビが表れた。それはなんと、終われ身の赤

いネットナビだった。

「あいつが高原秀か。」

彼はつぶやいた。秀はどんなことになっていくのだろう。

第2話 始まりー2（後書き）

次回から、物語が大きく動きます。悪を裏切った赤いナビを持った彼はどうなっていくのでしょうか・・・。

第2話 始まりー3 (前書き)

なんか、ロックマンエグゼの第一話みたいになっちゃいました。C
APCOMの皆さん、すみません。

第2話 始まりー3

翌朝、僕は何かの視線を感じた。部屋には僕以外、誰もいないはず。しかし、そんなことなどお構いなしに、僕は眠っている。体内時計は6時25分だ。すると、男の声があった。

「秀、秀。秀！」

誰かが僕を呼んでいる。きっと夢だろう。僕はさらに眠りを深くした。

「おい！高原秀！！！」

その怒号は、マンションフロア全域に響いた。特に僕は危うく耳がつぶれるところだった。

「誰だ！大声出すやつ！朝っぱらから迷惑だぞ！」

「俺だ。」

僕は周りを見渡してみる。しかし、部屋にいるのは僕だけだ。どこにいるんだ？声の主は？

「PETを見てみる。」

しかし、昨日までは誰もいなかったはず。僕は半信半疑でPETを覗いて見る。すると、赤いアーマーをつけ、赤いバンドナを頭につけたナビが目に入った。

「よ、秀。」

しかし、彼が誰なのか僕は検討もつかめなかった。

「君は誰？」

「人に名前を尋ねるときは自分から名乗るのが礼儀だろ！」

「もう知ってるでしょ？さっき大声で僕を呼んで起こしたもん。」

すると、赤いナビは観念したように言った。

「俺の名はファイターマン。」

「ファイターマン？」

「ああ、昔お前が良く通ってた科学館の館長からちよつと手術を受けて、お前専用のネットナビにしてモラルように改良してもらったぞ。つまり、俺はお前専用のネットナビだ。」

「僕専用のネットナビ？それに、館長？じゃあ、あの手紙の送り主は……」

「ああ、館長からだ。よろしくな！秀！」

しかし、そんなことを言われても急に状況を呑めるはずがない。まるで、何かの物語のように、平凡な人の前に不思議な人物が現れ、「この世界が魔物たちによって侵略されようとしています。あなたは選ばれし勇者です。あなたが世界を救ってください」と言われたようなものだ。

「秀？」

僕はボーっとしていたが、ファイターマンの一言で我に返った。突然、何かを思い出したかのように僕が口を開いた。

「君が来て思い出したけど、本人と約束してたんだ。中学校3年になつたら、ネットナビをもらうって。でも、」

「でも、何だ？」

「僕の欲しかったやつとイメージが違うよ。ファイターって強そうな響きがあるけど、名ばかりじゃないの？」

それを聞いたファイターマンは凹んでしまった。

「ごめん、悪かった。」

「キヤーー!!！」

「!!!!!!」

突然、ファイターマンが立ち直った。僕はPETをもち、台所に向かった。そして、リビングに来て見ると、なんとレンジから火が上がっているではないか！

「渥美姉ちゃん!!！」

「秀！レンジが突如火を噴いたの！」

「今度はうちか！」

僕はさっさと行動に移った。風呂場からホースをもって洗面所の水道につける。

「つかさ姉ちゃん。蛇口開いて！」

「分かった！」

つかさ姉ちゃんが、蛇口を開いた。そして、ホースを火に向ける。

水は火に当たり少しずつだが、火が弱くなっている。そして、ついに消えた。

「フー。これで一安心。」

しかし、現実には甘くはなかった。レンジがまた火を噴いたのだ！

「火が消えない！どうして。」

「秀！」

突然ファイターマンが声をかけた。

「俺をレンジにプラグインしろ！俺が原因を調べてやる！」

「君が！」

「早くしろ！」

「分かった！で、どうやるの？」

それを聞いた全員の、足腰が急に弱り全員抜けてしまった。

「PETに着いてる赤いボタンを押すんだよ！そして、ボタンを押す前にこう叫べ！」「プラグイン！ファイターマン！トランスミッション！」「ってな！」

しかし、僕は自分で言うのも何だがアガリ症なので、大声が出せない。この前の、作文の発表でも、一文字も読めずに倒れてしまった思いでもあるのだ。

「でも、恥ずかしいよ……。」

「早くしろ！」

言われた僕は、やけくそな気分になった。

「ああ、もう！プラグイン！ファイターマン！トランスミッション！」

なんとかファイターマンをプラグインすることができた僕。PETのディスプレイを見ると、電腦世界の画面が移っている。画面を見ると、メットール、ガルーなどが、うごめいている。

「原因が分かったぞ！ウイルスだ！」

「やっぱり！新聞であつたとおりだ！」

「だが、こいつらさえ倒せば！」

ファイターマンの活躍により、ウイルスが次々とデリートされていく。しかし、後ろからガルーが走ってくる。

「ファイターマン！後ろだ！」

ファイターマンがそれに反応し、後ろへ距離をとる。

「バルカンジャブ！」

そして、ウイルスは全滅した。

「!?!」

すると、電腦炎の遠くにネットナビが見えた。

しかし、現実のレンジの火は消えていない。

「つかさ姉ちゃん！蛇口を！」

ホースから再び水が出た。そして、火にかけると完全に消えた。そして、もう一度赤いボタンを押し、ファイターマンをプラグアウトさせた。

「すごいよ、ファイターマン！強いのは名ばかりじゃなかったんだ」
「！」

「やっと見直したみたいだな。」

「うん！君さえいれば、怖いものなんて何も無い！よろしくな！フ

「アイターマン！」

「ああ！」

「渥美姉ちゃん。火も消えたし朝ごはん作ってよ。」

「さあ、私の腕のみせどころよ！」

渥美は、腕によりをかけていた。やっと朝飯が食べれる。そう考えた秀であった。しかし、彼はまだ知らなかった。これから、大いなる災難に巻き込まれることを……。

第2話 始まりー3 (後書き)

次回から、学校が初登場します。

第2話 始まりー4

ドサクサの騒ぎでいつものバスが出てしまった。次のバスは10分後で、ギリギリ間に合うが、これからはこうなのかと思う僕は、凹んでしまった。

「さっきまでの元気はどこ行ったんだよ。」

「アメロッパに行っちゃったよ。」

「俺が着いてるぜ!」

「だといけど。」

そして、バスに乗り込む。外は、いつもの光景が流れていく。しばらく行くと、ドラゴン学園が見えてきた。

ピンポン

「次、止まります。」

バスは、学園前で止まった。渥美姉ちゃんとかさ姉ちゃんはすでにいない。彼女らは、冠雷女子高校に通っていて、そこはエレキタウンの隣町にあるのだ。僕は、さっさとバスを降り、校門を通った。皆には知らされていないが、制服には特殊なIoTチップが埋め込まれていて、このチップがセキュリティセンサーと反応すると通してもらえない仕組みだ。また、私服のものが通ろうとすると、セキュリティが作動してしまう。つまり、不審者は通れない仕組みだ。え? 何でこのことを知っているかって? それは、個人の事情と言うもの

だよ。あ！急がないと！

ガラガラ

何とか、ギリギリセーフで教室に飛び込んだ。席に座ったとたん、チャイムが流れた。

キーンコーンカーンコーン

「フー、ギリセーフ。」

「お前、いつもこんな調子か？」

「いや、あの事件がなかったらもう少し早くいけたんだけど。」

「そこ、私語はやめなさい！」

この人は、このクラスの担任、上島幸平だ。担当教科は、社会で公民を担当している。というより、3年生の社会は、公民しかないけど。

「だいたい、あんたは受験生でしょう！もっとその自覚を持ちなさい！」

「は〜い」

僕は面白くない。教員はそんな僕をさておいて、日直に声をかけた。今日の日直は学級委員だったはず。

「日直！」

「起立！」

彼女は井上春名。このクラスの学級委員だ。井上財閥のお嬢様だが、プライドは持つておらず、他人とも友好的に接している。井上グループは、大きいものはロケットのパーツから、小さいものはマイクロチップまで人々の生活や科学に必要な、ありとあらゆるものを作っている会社のグループだ。また、彼女の父は、井上グループの本社長である。ちなみにこの学校の制服を作ったのも、井上制服店である。

「おはようございます。」

「「「おはようございます！！」「」」

クラス全員の声が今日も教室に響く。その後、何の変哲もなくホルムルームと、一時間目の授業が終わった。

授業が終わると、女子は女子で、男子は男子で固まりさまざまな話をしている。僕は、そこから漏れてくる話を聞くのが好きだ。まあ、他人に迷惑してるわけじゃないし。春風が心地よく、僕は大きく伸びをした。

「フア〜。授業終わった後って気分がいいな。」

「授業、かつたるいのか？」

「そんなことないよ。」

「誰と喋ってるの？」

?? だれだろう。

「種山さん!」

彼女は種山春江。学園の優等生で、成績は常に学年トップクラス。だが、思いつきり子供っぽい一面もある。また、将来教員候補、3年連続一位保持者の持ち主でもある。また、非常に目が悪く常にめがねをかけており、はずしたところは誰も見たことがないと言っ。また、後輩の中では彼女を家庭教師に雇いたいと言っ噂も流れている。正直すごいな。

「そんなことないよ。」

心読まれた!?

「で、何だって?」

「誰と話してるのって。」

「僕のネットナビだけど。」

「いいな、私まだネットナビもらってないもん。」

最近ネットナビのアプリケーションソフトの値段が高くなっており、僕らのような年代では、指先にしか、触れられない程度になっている。昔はたくさん普及してたのに。手に入れる方法と言ったら、迷いを捨ったり、誰かからもらっ、もしくはノーマルな美をカスタマイズする程度でしかできない。

「そういえば、今日も発火があったらしいね。」

「うん、うちにも来たよ。」

「だから制服がちよつと焦げてるんだ。」

僕の制服は、前が少し黒こげの状態だ。衣替えの時に直してもらおう。ちなみに、この学園の制服の冬服は、男子は黒が基本で、腕のところから脇をとおり、腰にあたる部分に、たての白い帯がついている。女子は、紺色が基本であり、リボンの部分が白だ。夏は、男子はワイシャツ、女子は、白いセーラー服だ。ファイターマンが口を挟んできた。

「おい、秀。」

突然にことに少々驚いたが僕はとりあえず相槌を打つ。

「な、何？」

「その放火事件だが、一瞬ネットナビの人影を見たんだ。」

「え？じゃあ、そのオペレーターがこの事件の犯人ってわけか？」

「その可能性もありうるな。」

「で、そのナビの特徴は？」

突然、春江さんが口を挟んできた。実は、彼女も僕と同じJPなのだ。ファイターマンが犯人の特徴を話す。そして、それを春江さんがペイントでパソコンに書いていく。学校のノートはパソコンが主

流だ。書いた内容はP E Tに送信し、保存して予習、復習をするのが今の常識だ。たとえば、絵を描くときは、P E Tについているタッチペンでディスプレイに絵を書いていく。色を変えるのも、パレットをタッチするだけで変えることもできる。ちよつど書き終えたようだ。

「こんな感じ？」

「ああ。」

「じゃあ、署のほうへ連絡しておくから。犯人探し手伝ってね。」

「んー。」

僕も一応J Pなのだが、役に立ったことがほとんどない。いつそのこと、脱退しようかな。実は、J Pに入るきっかけを作ったのは、彼女だがそれについてはまた後ほど。

「言い忘れたが、次、移動教室だぞー！」

「「「はい！」「」「」

そろそろ行かないと。さ、二時間目もがんばるぞー！

第2話 始まりー4 (後書き)

次回は、戦いが入ります。

第2話 始まりー5 (前書き)

風邪で投稿が一日遅れました。

第2話 始まりー5

そして、時間は流れ放課後。全員掃除をしていた。昔の雑巾は手で使うタイプだったが、今はモップタイプの雑巾になっている。しかし、基本は昔から変わらない。箒の人がほこりやゴミを集めそれをちりとりで取る。そして、そこを雑巾で拭くスタイルは、昔からまったく変わっていない。僕は廊下で、雑巾がけをしている。

「あら？まだ隅のほう汚いな。」

一方、インターネット・竜岡エリアの外れあたり。先ほどの炎のネットナビが誰かと話をしていた。

「そいつのおかげで計画は台無しです。」

「そいつは、我を裏切った奴と言うのか？」

「はい、そのとおりでございます。」

「今度、会ったらデリートで処刑だ。」

「は！」

学校では一日が終わり全員帰宅していた。中には部活動をやっている人もいるが、僕は帰宅部だ。そして、いつものバスに乗り家に帰る。これが僕の日常だ。しかし、エレキタウンあたりに来たとき、突然崩れた。なんと、煙が上がっている。火事か！？僕は一瞬ためらったが、すぐにボタンを押す。

ピンポン

「次、止まります」

バスのホームでは、たくさんの女子高生がいた。しかし、僕はそんなものなど目にも入らずすぐ火災現場に向かった。大きな電気屋は現在、開店準備中だ。僕は、野次馬の上を跳び越し、火元を見つけた。なんと、展示品のレンジが発火しているではないか！

「やるよ！ファイターマン！プラグイン！ファイターマン！トランスマッシュオン！」

ファイターマンをプラグインし、PETのディスプレイを注目した。やはり、家で起きた時と同じように、電腦炎が上がっている。しかし、不意打ちで火柱が飛んできた。

ここからは、ファイターマンサイドです。

不意打ちで飛んできた火柱を俺はたくみにかわす。すると、春江が書いていたやつと同じやつがいた。

「お前は！」

「もう逃がさないぞ。ファイターマン。」

「お前は、アポロンマン！」

「なぜこんなことをした！」

「問答無用！」

俺は秀にオペレートをするように頼み込む。秀も了承してくれたらしい。

「バトルオペレーション！セット！」

「イン！」

「フレイムアーム！」

「ハッ！バルカンジャブ！」

俺は、自分自身の基本の技で応戦する。ロックマンで言えば、ロックバスターだな。しかし、むこうはほとんどノーダメージだ。

「秀！チップをよこせ！」

「チップ？」

「バトルチップだよ！掛け声と共にチップをさせ！」

「掛け声？」

「バトルチップ！　　（内はチップの名前）スロット・イン！だよ！」

「分かった！バトルチップ！キャノン！スロット・イン！」

秀の掛け声とともに、俺の右腕がキャノンに変形する。そして、キャノンを相手に向ける。

「そりゃ！」

「・・・・・・・・」

なんでだ！？何で効いてないんだ！？

「まさか、裏切り者が人に拾われるとは。お前のような操り人形の攻撃など効かぬ。」

「なんだと！？もっと強力なやつをよこせ！」

「バトルチップ！センシャハウ！スロット・イン！」

「行っけー！」

だが、ほとんど効いていないらしい。このほかに強力なやつはないのか？待てよ？確か、アポロンって・・・

「秀！水系チップをよこせ！」

「あいにく、今ないんだ。」

俺はいかりのあまり、スクリーンから飛び出してしまった。

「お前は普段どうやってチップを仕入れてるんだよ！」

「こつちだって、オーソドックスにしか持ってないんだよ！」

すると、知らない人の声が聞こえてきた。

「君！これを使って！」

「え？いいんですか？」

「早く！」

「バトルチップ！アクアジェット！スロット・イン！」

掛け声とともに俺の体が、水柱に包まれた。そして、そのまま俺はアポロンマンに突進する。炎属性に、水攻撃は2倍のダメージだ！これは効いたぞ！

「うわあああ！……！」

「「やりい……！」」

「ん？なんだ？このチップは。」

みると、チップにはアポロンマンが。火柱を放っているように見える。バトルチップ・フレイムアーチだ。とりあえず、ゲットしておくことにする。

ここから、秀サイドにもどるぞ。

ファイターマンをオペレートし、何とかアポロンマンを倒した僕。そして、アポロンマンを、ファイターマンが入っていたMDに入れ、署に転送する。署とは、警察署のことである。そして、送られたナビは、専用のPETに入れられ、刑務所の別室に保管される。そして、僕たちJPの上司に、今回の事件の報告をする。結局、オペレ

「ターは見つからなかったらしい。」

「さ、帰って晩飯作らないと。」

僕は次回からどうなってしまうんでしょうか。

第2話 始まりー5 (後書き)

次回はこれまでのキャラクター紹介です。

キャラクター紹介 2

たねやまはるえ
種山春江

クラスの優等生で、成績も学年トップクラス。しかし、非常に、目が悪く常に眼鏡を掛けている。外したところは、誰も見たことがない。ジュニアポリスに所属しており、階級はジャック。教員候補、一位保持者だが、将来は、OLになりたいらしい。一人称は、「私」

いのうえはるな
井上春名

春江と同じく、クラスの優等生。井上財閥のお嬢様だが、プライドは持たず他人とは友好的に接している。だが、車酔いが激しく、執事曰く「リムジンで登校した姿が入学以来一度もない」とのこと。また、金髪も特徴で、本人は生まれつき金髪と言っている。彼女の父は、井上グループ本社の社長。一人称は、「私」

ファイターマン

秀のネットナビ。もうひとつの主人公。元は裏インターネットに潜む犯罪組織に入っていたが、ふとしたことで組織を裏切り、逃げ出してきた。しかし、どのようにしてMDに入っていたのかは不明。口調は悪いが、正義感は強い。主な技は、バルカンジャブ・パワーショット・スピニングク。一人称は「俺」

館長

秀が普通っていた科学館の館長。最近、音信不通になっていたが、ある日はファイターマンを秀に送った。

キャラクター紹介 2 (後書き)

秀：ああ〜！もう分かんね〜！

ファイターマン：何がだ？

秀：ここだよ！ここ！ここ分かんねーよ！

ファイターマン：お前、イライラしてんじゃねえのか？お前のダチから、植物園行くか？っていうメールが来てるぞ。

秀：行こうかな。

秀：ファイターマン 次回、ジュニアポリス、植物園のリーフマン

ファイターマン：次回も

秀：読んでね！

第3話 植物園のリーフマン 1

僕たち3年生は、いうまでもなく受験に追われている。今日も、竜岡町にある図書館で勉強中だ。

「 $X=3$ 、 $Y=4$ のとき、 $3 \times 2 \times 4 \times Y$ の値を求めよ」

ぜんぜん、分かんない。でも、解かないと次に進めない。学生本能が悟っている。

PPP!PPP!

「秀!メールだ!」

「あ、うん。」

ファイターマンに言われるがまま、僕はPETのディスプレイを開く。メインメニューには、新着メールありと書いてある。それをタッチし、新着メールを開く。送り主は、東山春香だ。

東山春香は、ひがしやまはるかオールドシティ出身で、かなりの天然ボケだ。その割には、突っ込みは厳しく、やられた人は、数日間立ち直れなくなる。膝まである長い髪が特徴で、昔の言い方で言う、大和撫子やまとなでこだ。信じがたいが、彼女は超能力が使える。クラス全員、はじめはこれを理解せず彼女を嫌っていたが、唯一僕だけはこれを理解し今のところ、僕と橋本さんとJPにしか心を開かない。橋本さんについては、また後ほど。メールの内容は何だろう?

本文、あんた最近、受験勉強とJPに負われて疲れとるやる?せや

から、明日ウチと植物園行かへん？

お前、受験生か？とでも言いたくなるような内容だ。まあ、最近疲れているから植物でも見て心癒すか。

「わかった。どこで待ち合わせする？」

今の時代、メールの書き方は、人の口で言葉を入れて書くのだ。音声認識プログラムが、言葉の一つ一つを認識する。漢字の変換は、人の手で行う。しかし、一昔の人にはこの光景は異様だと思う。

「送信。」

僕は、ファイターマンにメールの送信を任せた。そして、勉強を再開する。

「27×512だから・・・、12824。」

PPP!PPP!

「秀！メールだ！また、春香からだぞ。」

本文、辰ノを9時25分に出発するバスに乗って。

「はい、わかった。送信！」

そして、一時間後。

「今日はこれくらいにして帰るぞ。」

僕は、バスの竜岡のホームに来ていた。そして、ふと見ると大きな学校の校舎が見えた。デンサンドームが10個入りそうなほど敷地が大きい。

「竜岡高校か。」

そう、ここが来年僕たちが通うつもりで竜岡高校だ。もっとも、今は土曜なので、いる人は部活の人たちだ。しばらくすると、バスが滑り込んできた。ドラゴンステーション止まりだ。僕は、バスに乗り込み、辰ノ町を目指す。

「しかし、植物園あの時以来だな。」

「あの時っていつだ？」

「僕が6年生の時。渥美姉ちゃんに誕生日で連れてってもらったんだ。だけど、それっきりJPで忙しくて行く暇がなくなったんだ。」

「たとえばどんな植物があるんだ？」

「説明めんどくさいから、帰ったらネットで調べるよ。」

そして、家に帰り植物園について調べていた。

ドラゴン植物園、住所、ドラゴンシティ・竜岡町・2-64番地。
アクセス ドラゴンバス、高麗の杜から、徒歩5分。

「竜岡高校のひとつ先か。」

「秀〜！晩御飯の買い物行ってきて〜！」

「あ、ああ！」

僕は、DIBショッピングセンターに向かった。そこは、たくさんの店が並んでいるところで、連日にぎわっている。僕は、食品コーナーにやってきた。買い物の主婦と親子連れがたくさんいる。さて、何を買ったかな。

「豚肉、卵、小麦粉、パン粉か。」

「豚カツか？」

「まあ、そうなるけど。」

僕は、それぞれの材料をかごに入れ、レジに向かった。

「あれ？秀君じゃん。」

「江崎さん！」

彼女は、江崎貝賀^{えさきかいが}。美術の授業では、常にトッブクラスで、絵に関しては右に出るものはいないという。また、彼女の描いた絵画はほとんどが、章が入っている。それだけでなく、不思議な力を持ち、彼女の描いた絵は実体化させることもできる。だが、美術の先生からは、問題児扱いされている。僕と同じ、DIBに住んでおり、3階に住む。

「君も買い物？」

「ああ。」

「大変だね。」

「じゃあ、僕はこれで。」

「がんばってね!」

そして、会計を済ませDIBショッピングセンターのスカイロビーまでやってきた。そして、大型エレベーターを待つ。

「今の時間帯は、DIBホテルのチェックインだからちょっと時間かかるな。」

「エレベーターは4つあるのにな。」

チーン

「お、来た。」

エレベーターには、買い物客がたくさん乗っている。こんなことから、ボタン押さなくてもよかったかな。ま、どっちにしろ早く行こう。

「今日は、飯食ったら、早く風呂入って早く寝よう。見たい番組なんて別にないし。」

今日の僕は、とっとと寝ることにする。

第3話 植物園のリフォーム 1 (後書き)

オールドシティのモデルは、京都です。
感想、待ってます。

第3話 植物園のリーマン・2 (前書き)

いろいろあって遅くなりました。まあ、見てください。

第3話 植物園のリーフマン - 2

時計は、八時半を回っていた。PETの電池は満タン。外は、雲ひとつない青空。天気はドラゴンシティ全域で、晴れ。降水確率0%。風は、南東の風後、西の風。外出には、申し分ない天気だ。

「残金、4000ゼニー。大丈夫だな。」

「あの植物園、今中学生は入場料500ゼニーらしいぞ。」

「ま、大丈夫か。」

そして、歯を磨いているとテレビで、アイドルのテレビ中継がやっていた。何でもニホン全国で大ブレイク中の「RIO」らしい。姉たちも、まあ熱狂的なファンなわけで。でも、恥ずかしいことに、僕は「RIO」の話題にはとてもじゃないがついていけない。でも、彼女の顔は昔どこかで見た気がするんだけどな。たしか、4年生ぐらいたったかな？ま、時機に分かるだろ。

「行つてきまーす！」

渥美姉ちゃん達は、テレビに夢中で気づいていない。ま、電話くれるから大丈夫かな。

そして、バス乗り場にやってきたのは、9時15分。

「たしか、例のバスは25分だったな。」

「うん。」

「あれ？高原君じゃん。」

すると、どこからともなく、女子の声が出た。フツと振り向くと、服だけが浮いている。

「誰？」

すると、服がずっこけた。

「だから、服って言うな！神原達子！」

「ああ、神原さん。」

彼女は、神原達子。僕の同級生だが、その存在はほとんど知られていない。なぜなら、彼女は透明人間だからだ。昔は、普通の人間だったが、僕がこっちに来る前、つかさ姉ちゃんが調査した変な薬を飲み、このような透明人間になってしまったのだ。だが、本人はあまり気にしていない模様。だが、一時的には彼女が通学すると、幽霊と間違われ大騒ぎになったことがあるらしい。また、薬が切れるのは、後5年後らしい。だが、生徒手帳にはちゃんと顔写真まである。

「どこかいくの？」

「うん、ちょっと植物園に。君は？」

「あたしは、エレキタウンに行く。」

「そっか。あ、バスが来た。」

僕達二人は同じバスに乗った。しばらくすると、コトブキタウンに到着した。すると、一人の少女が、僕に手を振って来た。

「秀く〜ん！」

「あ、春香さん！」

そう、彼女が東山春香である。街中を歩いたら、ほとんどの人が彼女を見るだろう。しかも、同年代だったら、時が止まったように動かなくなる。そんな彼女でも、前も言った様に超能力使いなのだ。

「前って、前回言うてへんかった？」

「げ、心読まれた！？これは、俗に言うテレパシーってやつか？まあ、それは受け流しておいて。」

「へえ〜高原君、東山ちゃんと遊びに行くんだ。これって俗に言うデートってやつ？」

「茶化すなよ。」

透明人間なので表情はわからないがニヤニヤ笑っているのが声でわかる。そんな3人を無視するかのように、バスは出発した。

（秀君、あんたこの前は大変やったろ。）

突然、話しかけられたことに驚き、僕は春香さんのほうを見た。しかし、口は動いていない。テレパシーで語りかけているようだ。なので、こっちもテレパシーで語りかけることにする。

(この前って、いつだよ。)

(ほら、エレキタウンであったあの発火事件や。秀君、かつこよかつたで。)

(え？何で知ってんだよ。)

(ほら、ウチも千里眼で見えていたさかい。)

(見るなよ！)

大体、千里眼って何だ。超能力使いの感覚はわからないな。

「高原君」

突然、黙っていた神原さんがしゃべった。

「まったく、ビックリさせるなよ」

「なんかお互い、黙り込んでやって。ほんとは、気まずいんじゃないの？」

「そんなんじゃないよ！」

すると、バスの車窓から都会が見えてきた。エレキタウンだ。

「次は、エレキタウン、エレキタウンです。」

「あ、じゃああたし、降りるね。」

ピンポン

「次、止まります。」

そして、エレキタウンで神原さんは降りていった。ちなみに、このバスは総合管理所で自動運転されているが、ドアの開閉だけは、乗務員が行う。いつの時代も、バスを降りるときはボタンを押すのに変わりはないのだ。そして、バスは静かにエレキタウンを離れた。

「あいつ、人間なのか？サーモグラフィでも、反応はあったぞ。」

「透明人間だから、人間じゃないの？」

バスは、高麗の柱を目指してひた走る。しかし、僕は大事なことを聞いてなかった。

「だいたい、何で千里眼なんか見てたんだ？」

「ほれ、ウチも暇やったから、ちょっと何してんねやるなーってやつとついたら、エレキタウンのほうから煙が上がってん。そこを詳しく見たら、あんたがおったんや。」

そんなこと、受験生がすることじゃないだろ。そう思っていると突然、春香さんが僕の手を掴んだ。

「ウチらの力、まだこんなもんやないで。あれやったるか？」

春香さんが言い終わった直後に春香さんは目を閉じた。突然、何かに縛られた気がした。

「ウチと秀君が、心がひとつになったら千里眼とか未来予知使
うとな、秀君のまぶたの裏にも映像が浮かぶねん。あんたも、ウチ
と心を通わせるようにしい。」

「俺達で言うフルシンクロか？」

突然、ファイターマンが口を挟んできた。

「まあ、そつなるけど。」

フルシンクロとは、オペレーターとネットナビの心がひとつになっ
た状態を示す状態である。これを身に着けると、お互いはほぼ無敵
といえる活躍を見せる。また、光熱斗と、ロックマンもこの力を使
い、世界を悪から何回も救つという活躍も見せた。

「あゝ！今ので崩れてもうた！」

「ファイターマン、ちょっと黙っててくれ。」

「ああ。」

僕は、PETの設定モードを開き、音量をミュートに切り替えた。
これで、音は出ないかな。

「じゃ、もっかい行くで。」

「うん。」

春香さんが再び僕の手をとり、目を閉じた。それに、少し遅れ僕も

目を閉じる。

「いくで。」

「うん。」

再び、心が縛られるような感覚に襲われた。しばらくすると、目を閉じているはずなのに映像が浮かんできた。埠頭町、ドラゴンステーション、DIB、コトブキタウン、エレキタウン、ドラゴン学園が浮かんだ。すべて、ドラゴンシティの主な場所だ。

「でや、これでウチの力が分かったやろ？」

「まあ。」

気がつくと、バスは竜岡高校を過ぎて、森林のすぐ脇を通った。そのすぐ隣には、工事中のメトロの線路が見える。

「次は、高麗の杜、高麗の杜です。」

ピンポン

「次、止まります。」

「あ、もうすぐ着くよ。」

「うん。」

久しぶりの植物園。どこがどう変わってるのかな？

第3話 植物園のリーフマン：2（後書き）

今回は、リーフマンが登場します。
あと、感想も待っています。

第3話 植物園のリーフマン 3

僕達は、植物園に入っていった。中は、僕が始めて来た当時とほとんど変わっていない。

園内には、たくさん植物がある。普通にある二ホンの植物、アメリッパの植物など、世界各国の植物がある。中には、食虫植物もあった。

「食虫植物？」

「虫を誘き寄せて食っちゃまって。」

「植物やのに、おそろしいわな……。人食い花がおっても、もっと不思議やないで。」

「いやいや、そんな危険な植物、植物園もおかないよ。植えた時点で従業員も食われるから。」

「でも、妙やで。」

「何が？」

「この植物園、いくつかのエリアに別れとるやろ？どつやって、環境分けてんのかな？って」

「秀！上だ！」

「？」

上を見上げると、不思議な装置が見えた。どうやら、この機械がそのエリアの環境を再現しているらしい。メンテナンスのため、プラグインができるようになっていた。

しばらく歩くと、非常に蒸し暑いところに来た。熱帯エリアだ。

「何で、こんなに暑いん？」

「しょうがないよ。熱帯エリアだもん。」

近くにある木の上を見ると、パイナップルが成っていた。さすがは、熱帯エリアだ。しばらくすると、アナウンスが流れた。

「まもなく、熱帯エリアではスコールが降りますのでご注意ください。
い。」

「スコール？」

「熱帯で降る雨のことだ。」

すると、一瞬肌に詰めたい水滴が落ちてきたと思うと、いきなり強い雨が降ってきた。僕と春香さんは、スコールに当たりながら熱帯エリアの入り口に戻ってきた。

「なんで、こうなんねん！」

「しょうがないでしょ。ネットには、この植物園は環境を再現したってあったもん。」

「にしては、出来すぎとちゃう？」

「ちょっと見てみるわ。プラグイン！ファイターマン！トランスミッション！」

僕は、ファイターマンを植物園の装置にプラグインした

ここから、ファイターマンサイドです。

俺は、植物園装置の電脳世界に来ていた。プログラム達がせわしなく動き回っている。電脳床は、でっかい字でAと書かれていた。どうやらケツペンの気候区分らしい。

「どう？ファイターマン。」

「スコールプログラムが動いてやがる。ま、もうすぐとまるだろ。」

言い忘れたが、スコールは熱帯で短時間に降る大雨のことで、一回降ってもすぐにやむ特徴がある。

「ファイターマン、ほかに何かないか探してみてくれ。」

「ああ、分かった。」

俺は、ワープ床で別のエリアへ向かった。ここはどうやら、植物園の管理システムの電脳らしい。あちこちには、ワープ床があり、それぞれの環境エリアへ向かう仕組みらしい。突然、草吹雪が飛んできた。危ないな。誰だ！？

俺が、草吹雪が跳んできたほうを見ると、緑色のネットナビがいた。

緑色と黄緑で飾られたアーマーを装備している。

「何者だ！」

「僕はリーフマン。この植物園の管理ナビだ！」

「ファイターマン！管理者ってことは、強そうな響きがあるぞ！無理に戦わないほうがいいかも知れない！プラグアウト！」

ここから、秀サイドに戻るぞ。

何とかファイターマンをプラグアウトさせた。気がつくともスコールは止んでいた。

「な、俺の言ったとおりだろ。」

「しかし、リーフマンってどんなナビだろう。」

「秀君！はよいこか。置いてくでー！」

「あ、すぐ行くー！」

こうして僕は、別のエリアへ向かった。

そこは、蒸し暑い熱帯エリアとは対象に非常に乾燥していた。

「肌、荒れてもうた。」

「僕もだ。極端すぎだよ。環境変化が。」

あたりを見渡すと、オリーブやコルクガシなど、乾燥に強い植物が多い。

「ここは、地中海性気候エリアで、冬は暖かく雨に恵まれるけど、夏は乾燥するから乾燥に強い植物が多いって。」

「あんだ、難しいことようしつとるな。」

「そりゃ、作者が高校生・・・いや、なんでもない。ここらへん、次の中間に出るかなって。」

「お前、肌ガツサガサだぞ。」

ファイターマンに言われ、腕を見た。すると・・・。

「えらく荒れたな。」

「ウチら女の子にとっては肌荒れは大問題やで。分かるん？」

「いや。」

「あんだ、こんなことには鈍いんやな。」

「肌荒れ気にするほうじゃないし。そーいや、ファイターマン。今何時だ？」

「12時20分。」

学校で言えば、給食の時間だ。

「お昼にしよう。弁当作ってあるさかい。」

「うん。」

僕たちは、中央広場に戻ってきた。僕たちは、ベンチに二人並んで腰掛け、春香さんが、弁当の包みを開けた。春香さんの弁当箱は切り紙のデザインで、彩られている。弁当は、言うまでもなく和食だった。さすがは、オールドシティ出身だな。

「ちなみに、生まれはアキンドシティで、育ちはオールドシティやで。」

知らないよそんなの。

「ほな、食べよか。」

「いただきます。」

食べようとした途端、蛍の光のBGMが流れてきた。

「なんや？もう閉園かいな？まだお昼やで。」

その曲を聴いた周りの人たちも帰り始めた。

「あ、これ僕のPETの着メロだ。」
ピッ

「はい、高原です。」

ドテッ！

言うまでもなく、周りにいる人々は転んでしまった。

「渥美よ。今、どこにいるの!？」

「ドラゴン植物園だけだ。」

「何で出かけるとき、一声かけなかったの!？」

「言ったけど、気づいてなかったじゃん。」

「まあ、無事ってことで大目に見ておくわ。4時までには帰るのよ。」

「

「はい。」

ピッ

まったく、渥美姉ちゃん、怒ると怖いんだから。

「秀君、紛らわしい着メロ使わんという。」

「ごめん、明日変えるわ。」

「まあ、弁当食べよ。」

「じゃ、改めて……。」

「「いただきまーす!」「

こうして、僕と春香さんは誰かが邪魔したら悪い空気を作っていた。ファイターマンも、口出ししなかったらしい。しかし、僕は知らない

かった。これから大いなる災難に巻き込まれることを・・・。

第3話 植物園のリーフマン 3 (後書き)

今回は、ちょっとだけ登場したリーフマンがメインになります。

第3話 植物園のリーフマン 4

同じころ、植物園環境管理システムの電腦。リーフマンが警備をしていた。

「さて、異常なしと。」

リーフマンが帰ろうとすると、謎のネットナビが現れた。

「！？誰だ！」

「私が誰なのかはどうでもいい。貴様はわれわれの仲間に入ってもらう資格がある。」

「何のつもりだ！」

リーフマンは激しく抵抗した。

「このワクチンプログラムさえインストールできれば、貴様はいやでもわれわれの仲間だ。」

「や、やめろ〜〜！！！」

そして、時間が流れ僕はすでに家に帰っていた。僕は部屋でゲームをしていた。YONTENDO WEの、ハイスピード・レーサーだ。しかも、インターネット接続で世界中のユーザーと対戦もできるすごい機能もついている。といっても、これ熱斗の時代から始まったみたいだけどね。

「僕は、二ホンランキング12位だ。前よりはましかな。さ、セーブして勉強しよう。」

僕は机に向かい勉強を始めた。今日は理科だな。

「まずは生物だ。」

次の一覧の中から昆虫を求めよ。

「えっと、昆虫は頭・胸・腹に分かれていて、胸に足が6本ある奴だから……。こだ。次の一覧の中から、食物連鎖の順番を求めよ。」

PPP! PPP!

「秀! 電話だ!」

僕は、通話ボタンを押して、電話回線を開いた。さつきと、曲が違うという人もいるが、帰った後普通の呼び出しベルに戻したのだ。

「はい、高原です。」

「大変よ! 植物園で管理システムが暴走してるわ!」

「何だっつて! よし! 行こう!」

「ああ!」

この人は、僕たちの上司の水原直子。警察署子供課の課長で、時にはやさしく、時には厳しく僕らを見守っている。また、事件には敏

感で、ネット系の事件は僕らJPに指示をして知らせ送っている。僕は、服を変えPETをホームモードからJPモードに切り替えた。そして、僕は背中にある機械を背負った。これが何かはあとでわかる。これを聞いた渥美姉ちゃんやつかさ姉ちゃんはTPモードに切り替えた。実は、彼女はTPなのだ。TPは、Teen ^{ティーン} police ^{ポリス}の略で、高校生以降のJPはこっちに配備される。

「よし！行こう！」

「「ええ！」」

そして、DIBの屋上に向かい、背中に背負った機械のボタンを押す。すると、飛行機の翼のようなものが飛び出し、エンジンが唸りをあげた。信じがたい話だが実はこれで飛べるのだ。バスを使うと時間がかかってしまう。JPとTPは、時間との戦いなのだ。

「「ハッ！」」

まさか、人類の昔からの夢、空を飛ぶというのがJPとTPに入っ
てかなうなんて誰が思うだろう。

そして、植物園入園口に到着した。

「よし、着いたぞ。」

「行きましょう！」

そして、植物園に入ろうとしたのだが……。

「今は関係者以外立ち入り禁止です！」

そういわれた僕は、PETにインストールされているJP証明書を
見せた。これは、JPバッジの特殊電波が反応しないと出せない仕
組みだ。大人の警察で言えば、警察手帳だ。しかも、JPバッジは、
DNA解析機能がついているので、自分のもの意外はつけることは
できないのだ。要するに、「偽JP現る！」なんてことはない。あ、
解説してる場合じゃないや。

「何なの！？熱帯エリアがかんかん照りになってる！？」

「乾燥帯エリアが土砂降りだ！」

「秀！装置にプラグインだ！」

「プラグイン！ファイターマン！トランスミッション！」

「ファイターマン！管理者のリーフマンを探すんだ！」

「わかった！」

プラグインされた俺は、リーフマンを探すことにする。あの連中の
ことだ。きっと、リーフマンをナビロイドに改造したに違いない。
ナビロイドとは、俺が属していた組織で作っているネットナビのこ
とだ。戦闘能力が以上に高く、戦闘マシンに改造されたネットナビ
といっても過言ではない。まあ、俺もその製作に携わってたわけだ
が、ワクチンプログラムを使えば、普通のネットナビだって改造す
ることができる。ちなみに、そのワクチンを企画したのは、俺だ。
だが、ナビロイドはデリートされても、ナビロイドのままだが、人
間が使い続けると、普通のネットナビに戻るといふ弱点もある。

「はやいとこ、リーフマンを倒さないと大変なことになるな。」

一方、現実世界。

「なにやってんだよ！早くプラグインして！」

「ごめん、ネットナビ持ってないの。」

「ボクも。」

「まったく、どいつもこいつも！ファイターマン、リーフマンはい
たか？」

「いや、まだだ。」

戻って、電腦世界。俺は、あるワープ床の前にいた。

「ここか！？」

ヒュン

ワープしてやってきたエリアには、電腦植物が張り巡らされていた。

「気をつけて！この辺にリーフマンがいるはずだ！」

「！？」

そこにいたのは……。次回をお楽しみに！

第3話 植物園のリーフマン 4 (後書き)

今回は、ファイターマンVSリーフマンです。
あと、感想もどんどん送ってください。

第3話 植物園のリーフマン 5

「お前は、リーフマン!」

「フフフフ……。ここは、関係者以外立ち入り禁止のはずだよ。来たからには、デリートされてもらうよ。」

こいつ、ナビロイドと化してやがる!倒さないとまずいぞ!

「秀!オペレート頼むぜ!」

「バトルオペレーション・セット!」

「イン!」

俺と秀の掛け声でバトルが始まった。

「リーフカッター!」

「バルカンジャブ!」

お互い、ほぼ互角だった。相当強いな、こいつは。

「秀!チップをよこせ!」

「バトルチップ、バンブーソード!スロット・イン!」

秀の掛け声とともに、俺の左手が緑色のワイドソードになった。これが、バンブーソードだ。

「食らえ！」

「白羽取！」

何！？受け止められた！？よし、相手が草なら・・・

（炎系チップだ！）

（了解！）「バトルチップ！フレイムキャノン！スロット・イン！」

ドオオオン！！

「やりに！」

だが・・・そこには、ペラペラのリーフマンがいた。まさか、カワリミか！？

「チツ。裏をかかれたな。」

「コガラシ！」

「！？？」

だが、気づいたときはもう遅かった。

「ぐああああー！！！！」

「ファイターマン！」

くそっ、不意打ちなんて卑怯だぞ！カワリミで裏をかくて攻撃するなんて。なんて頭脳戦だ！

（秀、あえて草に弱いチップをくれ）

「バトルチップ、エレキボルト！スロット・イン！」

「リーフシールド！」

しかし、その攻撃も打ち消されてしまった。しかも、草の盾がこっちに飛んできた。しかし、俺は難なく交わした。つたく、どんなナビだ。

（ファイターマン、このまま攻めても無駄だ。昔のアニメでやっていたように、奴が攻撃した一瞬の隙を狙うんだ！）

（攻撃の隙を突くんだな。わかった！）

しかし、いくら待っても奴は攻撃を仕掛けてこない。

「ファイターマン、わざとはずす攻撃をして、相手を挑発させて。」

「食らえ！バルカンジャブ！」

もちろん、わざとはずしての攻撃だ。

「やってくれたな！リーフブーメラン！」

よし！このときを待っていたぞ！

「バトルチップ・フレイムアーチ！スロット・イン！」

「食らえ！フレイムアーチ！」

「うわあああああああああ……！！！！！」

「やった！」

ついにリーフマンを倒した。俺は、リーフマンの足元に何かがあるのに気がついた。バトルチップのようだ。見ると、リーフシールドと書かれていた。

「とりあえず、チップゲット！秀、プラグアウトだ。」

そして、リーフマンも一緒にプラグアウトさせた。

そして、まずはPETを、スリープモードにさせて、リーフマンを動けなくさせる。そして、ホワイトチップを、PETに挿しリーフシールドをゲットする。あとは、MDに入れて、ナビ刑務所に送ればミッション完了だ。すると、リーフマンが僕に語りかけてきた。

「うう……。僕は今まで何をしてたんだろう。僕がここにいたら、また植物園が悪用されるかもしれない。僕は、正義に生きるよ！」

「わかった。明日、僕の知り合いの誰かに送るよ。」

さて、今日はもう帰るか。ちょうど、バスが到着した。

「早く帰るう。」

僕は早く走ったのが原因で、バスを降りてきた一人の女子とぶつかった。

「いてててて……もう、何だったの？」

僕は、その少女をにらみつけたが、彼女の顔のほうに勝っていた。なぜなら、今まで見た女子の中では、彼女が飛び切り群を抜いてかわい顔だった。

「あ……。」

一言言っと、少女は顔を赤くして逃げてしまった。

「何だあいつ？変なの。」

そして、僕たちはバスに乗り込んだ。

「ねえ、あの子知り合い？」

「いや、知らん人だ。」

そんな僕たちを、無視するようにバスは、辰ノ町へ向けて走って行く。

翌朝。僕は、書いた手紙を今一度確認していた。

拝啓、突然の手紙、失礼します。このMDをPETにインストールしてください。敬具

追伸 なお、このMDは、僕のところに返してください。

「さてと、これで良いかな。」

僕は、封筒をバス乗り場入り口付近にあるポストに入れた。最近、使われてないからオンボロだが、その機能は、健在である。

「誰に送ったんだ？」

「時期にわかるさ。」

さ、今日も学校もJPMもがんばろう！

第3話 植物園のリーフマン 5 (後書き)

次回は第3話の登場人物です。

キャラクター紹介 3

人間

ひがしやまはるか
東山春香

秀のクラスメート。オールドシティ出身で、超能力が扱える。秀が来る前は、この力のせいで回りから差別され嫌われ続けた。拳句の果てには自殺を図ろうとしたところ、秀と出会い説得され秀に心を開き、JPに入団。今では、署内ではエスパーパーリスと呼ばれるほど警察からの信頼も厚いが、天然ボケな性格。口調は、アキンド弁。（現実で言う関西弁）一人称は、「ウチ」

えさきかいが
江崎貝賀

秀の隣クラスの生徒。美術が得意で、非常に手先が器用。彼女の描いた絵は、何回も賞に輝いたことがある。また、不思議な力を持ち、描いた絵を実体化させることもできる。高校生になったらJPにはいる予定。一人称は「ボク」

みずはらなおこ
水原直子

ドラゴン警察署子供課の課長。かつ、秀たちの上司。事件の発生に關しては、人一倍敏感。JPのメンバーを、やさしく厳しく見守っている。一人称は、「私」ちなみに、独身らしい。

ネットナビ

リーフマン

元・植物園の管理ナビ。ナビロイドに改造され、自分を失い暴走した。そして、ファイターマンに倒された後は、誰かのネットナビになっっている。本来の彼は、植物を愛する穏やかな心を持っている。

主な技は、リーフブーメラン、コガラシ、リーフショット。一人称は、「僕」

キャラクター紹介 3 (後書き)

ファイターマン：なあ秀。しってるか？

秀：何が？

ファイターマン：何がって、ドラゴンメトロが開通したんだよ。

秀：へえ〜。じゃあ、早速利用してみよう！

秀：あれ？おかしいぞ？もうすぐ駅なのにスピードが落ちない！？

ファイターマン：列車の暴走か！？

秀・ファイターマン：次回、ジュニアポリス。開通！ドラゴンメト

ロ！

秀：次回も

ファイターマン：読めよな！

第4話 開通！ドラゴンメトロ 1

PPPP！PPPP！

その日の帰宅中、いつもの時間に新聞が届いた。しかし、今日は違う。何が違うかといえば見出しだ。見出しには大きく、明日開通！ドラゴンメトロ！と書いてあった。僕は、詳しく読んでみることにする。

ドラゴンシティ新聞

明日開業！ドラゴンメトロ！

先日、ドラゴン交通局（ドラゴン交通局）の局長から、ドラゴンメトロが明日旅客営業を開始すると発表した。全長は40km、駅数12個。駅は、ドラゴン埠頭、ドラゴンステーション、市役所前、辰ノ町、万博記念公園、コトブキタウン、エレキタウン、総合運動公園、ドラゴン学園前、竜岡、竜岡高校入口、高麗の杜、欄内ニュータウンが設けられていることとなっている。車両は、4両編成、ラッシュ時は2本を連結させ、8両編成で走らせることとなる。一番列車は、ドラゴン埠頭駅を、5時30分に出発する予定になっている。予定では、一周年を迎えるドラゴンアイランドへの、乗り入れ工事も進んでいて、アイランド方面の開業は、来年の予定となっている。

さらに、写真を見ると車両は昔、デンサンシティを走っていたメトロに似ていた。

ドラゴンメトロは、リニアモーターカーで、HSS Tタイプで地下鉄でもある。

「明日から、メトロに乗って通学か。」

所属は変わっても定期は引き続き使えるらしい。

「次は、辰ノ町、辰ノ町です。」

ピンポン

「次、止まります。」

僕が地下道の入口を見るとすでにロープははずされていた。地下道を覗いたら、ドラゴンメトロ開通式の準備の真っ最中だった。とてもじゃないが、町人は入れる雰囲気じゃない。僕は、DIBに入って行った。

そして、自分の部屋に入り、今日も僕は、受験勉強を始めた。今日は、国語だ。

次の空欄に文字を入れ、言葉を完成させなさい。

() () の () () も () ()
() () の () () に念仏
() () () ばんじ () () が () ()
() () を () () のようにする
笑う () () には () () 来たる
() () ふり () () て () () 直せ

ここは、君（読者）が考えてほしい。回答は、感想欄に書いてって別にわかんないわけじゃないけど。

「お前、誰に言ってるんだ？」

「いや、なんでもない。」

さて、次の問題は……。次の漢字の読みを答えよ。

そして、15分後。

「ふー、終わった。今日はここまでにして、インターネットでもやるう。」

僕は、勉強プログラムを閉じ、インターネットを起動させた。ネットニュースを見ると、ここも、明日開通するメトロの話で持ちきりだった。

「もっと違う話題はないかな。」

すると、国会の話題を発見した。

立ちタバコ禁止法

本日、国会議事堂で行われた会議で、子供の目を守るため、全国立ちタバコ禁止法が可決された。以前、歩きタバコ禁止法もあったが、煙が周りの人々に迷惑をかけることで、全国の道路で、禁煙措置が取られた。

立ちタバコであろうが歩きタバコであろうが基本的に変わりはないのだが、まあマシだろうと僕は思った。

「ご飯できたよー！」

「あ、はい！」

さ、飯にしよう。

「「「いただきます!」「」」

渥美姉ちゃんの手料理は相変わらずおいしい。

「はい、これ」

渥美姉ちゃんが僕にあるチップを渡した。見ると、ドラゴンメトロ時刻表と書かれていた。僕は、それをPETにインストールした。

1分後、インストールが完了した。メインメニューには、ドラゴン交通局のエンブレムが映し出されていた。そのエンブレムを押すとメトロの時刻表が映し出された。といっても、明日から使うだろうけど。

「明日、7時30分の電車で通学するわよ。」

「うん、分かった。」

さてと、今日は早くご飯食べて早く寝よう。

第4話 開通！ドラゴンメトロ 1（後書き）

次回は、いきなり事件がおきます。

問題の答えは、感想欄に書いてください。僕が採点します。

第4話 開通！ドラゴンメトロ 2

PPPPP! P P P P P! P P P P P! P P P P P!

翌朝、僕の部屋の目覚ましはいつもより早くなった。現在時刻、A
M 05:00。っていうか、僕がセットしたただけだね。

「お前、何で早起きなんだ？いつもより。」

「なんでって、今日はドラゴンメトロの開通式だもん。」

早めに行かないと、開通セレモニーに間に合わないしな。と、出かける前に音声レコーダーの録音ボタンを押した。

「メトロの開通セレモニーに行ってます。」

今の時代、紙の節約のため変わりにこれを使ってメモを残す。これが今の時代の常識だ。ちなみに、渥美姉ちゃんの起床は、5時45分だ。

僕は、DIBの一階まで降りてきた。入口は、21時〜5時はIDを使わないと出入りできない仕組みだ。

ピッ

スクリーンにPETを読み込ませ、僕はDIBをでた。現在時刻5:15。一番列車が到着するまで後、25分だ。

DM / 辰ノ町駅 D - 4 . 地下道入り口の上には、そう書かれて

いた。地下への階段を下りると、すでにたくさんの人がいた。案内板を見ると、一番列車が後20分で来る事を知らせていた。そして、19分のときが流れた。そして、チャイムが流れたかと思うと、アナウンスが流れた。

「まもなく、1番線に、欄内ニュータウン行きの電車が参ります。」

この駅では、史上初のアナウンスだった。30秒後、電車の音が聞こえてきた。駅は、対向式ホームで、店頭事故を防ぐため、ホームドアが設置されている。改札内のコンコースは、両側に通路が分かれており、ガラス張りの壁からは、ホームと電車の様子が見える。その後、開通セレモニーが盛大に行われた。セレモニーが終わるころは、5時45分を回っていた。さてと、帰るか。

時間は流れ、7時。さあ、通学だ。珍しく3人そろって家を出た。

「秀君ー！」

「縷々ちゃん！」

彼女は、宮城縷々（みやぎるる）。本人は、シーサーアイランドで生まれたが、育ちはドラゴンシティ。なぜか、田舎訛りの口調で会話する。また、甘えん坊な性格は、抜けておらず僕に甘えることが多い。まったく、勘弁してほしいよこっちも。この間なんか、夜這いしたこともあった。でもなぜか、蛙が好きな変わり者である。それにちなみ、ネットナビも蛙の姿をしている。

「秀君、一緒に行くべ。」

「うん。」

こんな風に、口調は田舎訛りである。

そして、一回に降り、DIBを出た。

「この分だと、明日は雨かしん。(雨かな。)」

「かもね。」

そして、四人は地下鉄のコンコースに来ていた。

ピッ、ピッ、ピッ、ピッ。

4人はPETを、改札機にかざし、改札を通った。このようなシステムは、50年ぐらい昔からあったらしい。そして、1番線にやってきた。ホームは、学生でいっぱいだ。次の列車は、8両編成で到着する。ラッシュ時にはありがたいことだ。すると、アナウンスが流れた。

「まもなく、一番線に欄内ニュータウン行きが参ります。ホームドアより内側までお下がりください。」

すると、電車がホームに滑り込んできた。そして、ドアとホームドアが開き、リーマンたちが降りていった。僕たちは、それに続いて乗り込んだ。しかし、この列車に乗ったのが、災難の始まりだったのは、このとき僕たちは、知る由もなかった……。

第4話 開通！ドラゴンメトロ 2（後書き）

要は、乗った瞬間から事件は始まっているということなんです。
感想、待ってます。

第4話 開通！ドラゴンメトロ 3

秀たちが乗っている列車は、学園を目指してひた走っていた。しかし、先頭車両。いかにも怪しそうな人物が運転台を見つめていた。

「頼むぞ、ウイングマン。あのネットナビを持った人物を探させるんだ。」

「そんなこと、言われるまでもない。」

列車は、問題なくコトブキタウン駅を出発した。駅からは、春江さんと春香さんが乗ってきた。

それ以降は、問題なくエレキタウン、ドラゴン学園駅に止まるはずだった。しかし、様子がおかしい。外を見ると、明かりの間隔がどんどん短くなっていた。そして、縷々があることに気づいた。

「秀君！電車のスピードが！！」

「何！？」

次の車両に移る扉の上にある速度計を見ると、どんどん数字が多くなっている。スピードが上がっている証拠だ。

「僕が運転席に行つて様子確かめてくる！」

幸い、僕たちは前から4両目の車両に乗っていたため、問題なく運転席に行くことができる。すると、アナウンスが流れた。

「お客様にお知らせいたします。ただいま列車は、先頭動力車で不具合発生のため、ザ・ザザザ……。乗客諸君、よく聞きたまえ。この列車はわれわれが占領した。現在、ファイターマンと名乗るネットナビのオペレーターが、この列車に乗っている。そのファイターマンをデリートすれば、列車を止めよう。ただし、できないのであれば、列車からは永遠に降りることはできない。」

なんと、列車が謎の組織に乗っ取られてしまったのだ。しかも、降りるのに必要なのはファイターマンの命。デリートなんてさせないぞ！きつと、ファイターマンが属していた組織の連中だな。

「大変だ！すぐ列車を止めないと！」

「ちょっと待って！」

僕は、運転室に行こうとしたが、春香さんが、止めた。

「何？春香さん。」

（口で話したらあかんことがあるから、テレパシーでやり取りしよう）

（ああ。）

（あんな、ファイターマンをもっとるやろ？）

（ああ。）

（ウチらが、秀君を護衛したるさかい、あんなは暴走の原因を突き止めて）

(分かった。まかせとけ)

僕たちは、運転台へ走っていった。他の乗客たちは恐怖で気が狂っているだろうと思ったが、そうでもなかった。むしろ僕たちのために真ん中を空けていた。こりゃ好都合だ！

「はぁ……。はぁ……。運転台へ着いたぞ。」

列車は自動運転なので運転士はいない。車庫へ出入りするときだけ運転士が乗務する。

「よし、やるぞ！プラグイン！ファイターマン！トランスミッション！」

つづけて、春江さんも掛け声を上げた。

「プラグイン！リーフマン！トランスミッション！」

リーフマンに聞き覚えはあるだろうか。そう、あの手紙は春江さんに送ったのだ。そして、リーフマンは春江さんのネットナビになったというわけだ。

俺は、運転台の電腦に来ていた。今度も暴れまくるぜ！

「ファイターマン、暴走の原因は！？」

「今から、突き止めに行くぜ。」

俺は、あたりを見渡すと、後ろにリーフマンがいた。

「まさか、元ナビロイドのお前がいるなんてな。」

「僕は、君に協力するよ。」

「だれも、協力しろとは言っていないがな」

見渡してみると、運転プログラムが何者かに破壊されたような形跡があった。どうやら、犯人はここで暴れ、破壊したらしい。

「ひどい。誰がこんなこと……。」

「この形跡……。間違いない。あいつだ。」

すると突然、鷹みたいなネットナビがこっちに迫ってきた。しかし、俺は難なくかわす。

「あれは……。ウイングマン……！」

「知ってるの!？」

「ああ、俺が作ったナビロイドだ。俺の中では一番の傑作だ。」

「言ってる場合じゃないでしょ!」

「そうだよ!」

「フフフ……。まさか、俺を作った本人が敵になるとはな。飼い犬に手をかまれるとはまさにこのことか。」

お前は、犬じゃなくてネットナビだろ。こんな奴、指一本で片付けてやる。

「バトルオペレーション！セット！」

「イン！」

秀と春江の掛け声でネットバトルは始まった。今度は、2対1だ。こっちは負けるわけがないと思うが、戦いはどうなるかは俺も知らない。

第4話 開通！ドラゴンメトロ 3（後書き）

何か、早々事件が発生しましたね。リーフマンも仲間に加わりました。

第4話 開通！ドラゴンメトロ 4（前書き）

事件はまだ続いています。

第4話 開通！ドラゴンメトロ 4

ドラゴンシティ某所 メトロ管理局 運転指令所

列車に指令を送る司令官たちは、非常に慌ただしかった。だれも、声をかけられる雰囲気じゃない。

「21号列車は、制御不能のまま、停車駅、総合運動公園駅を通過！21号列車、応答せよ。21号列車、応答せよ。」

不通のようだ。一方、秀たちが乗っている21号列車の最後尾。

「管制室！応答願います！」

返事がない。こちらからの連絡も不通らしい。

一方、運転室。

「バトルチップ、カスタムボルト！スロット・イン！」

「バトルチップ、ワイドウェーブ！スロット・イン！」

僕たちは、ファイターマンを操り、ウイングマンと戦っているところだ。しかし、ファイターマンが作ったとあって、相当強くしかもファイターマンも「俺はこんなプログラムは組み込んでいないぞ！」なんていつている。その上、向こうは飛んでいるからこっちは不利だ。

「秀！何か飛ぶ系のチップをよこせ！」

「バトルチップ・ダッシュコンドル！スロット・イン！」

俺は、秀が送ってきたダッシュコンドルを手に取り、しばらく浮遊できるようになった。これで戦闘態勢は大きく変わるはずだ。少なくともそう思っていた。

「バトルチップ・サンダーキャノン！スロット・イン！」

しかし、片手がふさがっているので思うように攻撃があたらない。しかも、撃った弾みで俺はダッシュコンドルから落ちそうになる。しかし、そこにウイングマンが追い討ちをかけるように攻撃してきた。

「ウイングフェザー！」

「うわあああ！」

「ファイターマン！！！」

俺は、ウイングマンの追い討ちを食らい、大ダメージを受けた。

「バトルチップ、リカバリー！スロット・イン！」

「コガラシ！」

俺がリカバリーで体力を回復するかしないかのタイミングで、リーフマンがウイングマンに攻撃を仕掛けていた。

「あいつもやるう。」

そんなリーフマンを秀がやし立てていた。

「また、元ナビロイドの貴様が裏切り者の味方をするとは。」

「もともと、なるつもりだったんだ！」

そんなことを言っているリーフマンだが、厳密に言うところリーフマンは元ドラゴン植物園の管理ナビだ。その後、連中に捕まりナビロイドに改造された。その後、そいつを俺が倒し仲間にしたというわけだ。

「ウイングフェザー！」

「リーフシールド！」

ウイングマンとリーフマンの戦いはまだ続いていた。属性的には、ウイングマンが有利だが、リーフマンも負けていない。

「バトルチップ、フレイムキャノン！スロット・イン！」

俺も、戦いに加わることにした。食らえ！

だが、ウイングマンはまともに食らったのにあまりダメージを受けていない。

（秀、電気チップをよこせ）

「行くぞ！バトルチップ・エレキリール！スロット・イン！」

しかし、攻撃はかわされてしまった。

「こうなったら、逆転の発想で行こう。バトルチップ・ホーミングランチャー！スロット・イン！」

俺の左手がホーミングランチャーに変形した。

「食らえ！」

「うわあああ！」

よし！これはきいたぞ！

「次は僕だ！リーフショット！」

「ウー！」

よし！きいたみたいだ。ウイングマンをよく見ると、葉がついている。これはチャンスだ！

「バトルチップ・フレイムソード！スロット・イン！」

「食らえ！」

「グアアアアアアアアア.....」

ついにウイングマンを倒したぞ！しかし、運転電子機器が、警報音を放った。僕は、運転室に入り、前方を見た。ちょうど、地上に出たところだ。列車はスピードを落とすことなく、竜岡駅を通過した。しかしみると、先行列車が見えているのではないか！しかも、悪いことに今から竜岡高校入口駅を出発するところだ。このままでは、衝突してしまう！

「クソ、どうすれば.....」

一方、運転指令所では・・・。

「このままでは、21号列車は、前方の19号列車に追突します！」

「ポイントを切り替える。19号列車を、信号所待避線に誘導せよ。時間がない！」

竜岡高校入口、高麗の杜間の信号所、ポイントが切り替えられ、列車を誘導させる準備が整っていた。言うまでもなく、高麗の杜駅は、列車を止めるように連絡が入っている。竜岡高校入口から、終点までは単線になっている。なぜかというと、竜岡町からは、利用客が少なくなるのでほとんどの列車は竜岡駅で折り返す。ちなみに、将来複線にできるようにもなっている。終点のニュータウンはまだ発展途上だ。駅間ごとに、信号所も設けられている。

場所は変わって、19号列車車内。車掌に無線が届いた。

「後方の21号列車が、19号列車に接近。これより、19号列車を高麗信号所に誘導する。」

「了解。」

高麗信号所に列車が滑り込んだ。すぐさまポイントが切り替えられた。秀たちが乗る21号列車が高速で通過していった。

「とりあえず、助かった。」

「まだ、助かってへんで！列車を止めるんや！」

「でも、どうやって。」

「手動スイッチに切り替えて！」

「わかった！」

僕は、スイッチを手動に切り替えた。ブレーキが使えるようになる。暴走のときに入ったマスコンを解除し、惰性走行にした。しかし、これでも十分早い。早く止めないと！ブレーキを非常部分に倒し、スピードを落とした。列車はどんどんスピードが落ちていく。これでとまれるはず。

ブレーキ部分からは、火花が散っている。しかし、止めないことには助からないのに変わりはない。このままでは、まずいことに気づき、あるレバーを倒した。このレバーは、空気抵抗増加装置（空力ブレーキ）だ。これで、通常ブレーキの負担を減らすことができる。ドカン！

突然、ブレーキが大きな音を立てた。

「何だ！？」

「ブレーキが壊れた！」

「ええ！？」

僕は、窓を開けて外を見るとブレーキ部分からは火が出ていることに気付いた。あとは、空気ブレーキが頼みの綱だ。

すると、終点が見えてきた。しかも、終点から先は車止めで軌道がない。しかし、スピードは確実に落ちていた。

「お願い、止まってくれ〜！」
僕は、思わず目をつぶった。はたして、僕らの運命やいかに。

第4話 開通！ドラゴンメトロ 4（後書き）

一難さつてまた一難。秀はどうなるんでしょうか。
感想、待ってます。

第4話 開通！ドラゴンメトロ 5（前書き）

事件解決！と思いきや・・・。

第4話 開通！ドラゴンメトロ 5

僕は、恐る恐る目を開けてみた。列車は、車止めギリギリのところ
で止まっていた。列車と、車止めの間には、2〜3センチの隙間し
かない。とりあえずは、助かった・・・。

「まだ助かってないよ!」

「え!?!」

見ると、さっきブレーキから出た火が、車内に引火しているではな
いか!

「ゲ!どうしよう!?!」

列車はとめることはできたが、ドアを開けないことには、助からな
いのに変わりはない。すると、サイレンの音が、どこかから聞こえ
てきたかと思うと、消防車が到着した。

「消防隊員だ!助かるぞ!」

しかし、火は車両の端まで迫っていた。このままでは、焼死してし
まう!すると、炎でよく見えなかったが、一人の隊員がホースを持
ってこっちに来ていた。

「おい!誰がいるか!?!」

「いまーす!」

とりあえず、僕は返事をしてやった。すると、水が勢い良くこつちに飛んできた。すると、みるみる火が消えていった。助かった……。

「これで、遅刻決定だな。」

その後、普通の道路を走るバスで、ドラゴン学園に向かったが、教頭先生に大目玉を食らったのは、言うまでもない。

夕食中、ひとつのニュースが飛び込んできた。

「次です。」

「「「「？」」」」」

3人とも、テレビを注目した。食卓のテーブルは四角いちゃぶ台で、僕から見て渥美姉ちゃんは右側、つかさ姉ちゃんは左側。僕の座る場所は、テレビに向かっている。下の図のとおりだ

テレビ

つかさ 渥美

秀

四角は、ちゃぶ台を表している。まあ、さておきニュースでも見るか。

「今朝、開通したドラゴンメトロは開業初日から、ハプニングの連続で、一番大きかった出来事は列車の暴走事件とのことです。当局は、車両の整備に問題があったといい、説明していますが列車の乗客によると何者かにシステムがのっとられたとのコメントが出ています。」

「はあく。当分メトロに乗れないかも。」

「トラウマは二ヶ月残るって言うからな。」

「まあね。」

「で、通学はどうするの？メトロがないとできないよ。」

「バスも無くなっちゃったし。」

「大丈夫、僕にはスケボーがあるから。」

しばらくして。

「ご馳走様！」

さっき、僕が言っていたスケボーとは、電動スケートボードのことだ。本気を出せば時速100kは、余裕で出る。僕が、中学校1年生の誕生日のころ、渥美姉ちゃんに買ってもらったものだ。しかも電池はソーラータイプで、地球にも優しい。エコの時代が今も生きているのだ。だけど、長いこと使っていないので電池は完全に切れているだろう。明朝早く屋上に持って行って、充電しなくちゃ。

次の日

AM4時55分。

PPPP!PPPP!PPPP!

カチッ

「さて、スケボアの充電にでも行くか。」

僕は、朝早くDIBを出て、屋上に向かった。屋上には大聖堂があり、ここには礼拝者とクリストの信者が訪れてくる。まあ、朝早くだったら礼拝者は来ないな。

東を見ると太陽が昇ってきた。スケボアのソーラーパネルを開き、電池を充電させる。

5時5分。

チーン

充電完了！弱い太陽の光だが、それでも電池は確実に入っている。あとは試運転だ。僕は、スケボアに乗り、アクセルを踏む。アクセルは、右足だ。

「よし！動いた！次はブレーキ！」

ブレーキは左足だ。

「よし！大丈夫！でも、今日はタクシーで行こう。」

そして、部屋に戻りいつものどおりの朝となった。僕は、タクシー会社で電話をしていた。

「はい、DIB正面出入り口前までお願いします。」

ガチャ

「さて、これで大丈夫だな。」

「私たちのもチャーターした？」
「もちろん。じゃ、後でな。」

そして、DIBの一階の正面出入り口を出た。すると、タクシーが2台来た。僕が呼んだやつだ。僕は、先に来たタクシーに乗り、姉ちゃんたちは後に来たタクシーに乗った。

「お客さん、どちらまで？」

「ドラゴン学園まで。」

「かしこまりました。」

そして、数分後。

「着きましたよ。料金は、2000ゼニーです。」

「はい。」
「ピッ」

「ありがとうございました。」

「またご利用ください。」

さてと、今日もがんばるか。

第4話 開通！ドラゴンメトロ 5（後書き）

今回は、今回の新キャラ紹介です。

矛盾さえあつたら、指摘していただいても結構です。

感想、待ってます。

キャラクター紹介 4

人間

みやぎのる
宮城縷々

秀の同級生。一見すると、ロリっ子に見えるがれっきとした中学校3年生。シーサーアイランド出身で、育ちはドラゴンシティ。田舎訛りの口調だが、本人は気づいていない。甘えん坊な性格はまだ抜けておらず、秀に甘えることが多く（その本人は、言うまでもなく迷惑している。）、秀に部屋に夜這いしたこともあった。一人称は「私」

車掌

ドラゴンメトロの列車の車掌。いかなる状況も臨機応変に対応できる。

管制官

ドラゴンメトロの運転管理者。本社の地下にある管制室で列車の動きを監視している。

主任

ドラゴンメトロの運転管理責任者。問題が発生したときは、的確な指示を送る。

ネットナビ

ウイングマン

鷹をモデルにして作られたネットナビ。ファイターマンが製作途中だったが、組織を裏切る直前、作ることを打ち切った。その後、組織の連中により、ファイターマンが思っていたものとは違う固体が完成した。プログラムが書き換えられたためか、ファイターマンも「こんな風にした覚えはない」といつていた。その後、メトロを暴走させファイターマンを探させようとしたが、逆に倒された。その後、誰かのネットナビにされた。主な技は、ウイングショット、タ

イフーリダシス、フェザーカッター。一人称は「俺」

キャラクター紹介 4 (後書き)

ファイターマン そういや、秀。お前の生活って、ほとんど井上グループが関わってるよな。

秀 うん。制服もあの会社で作ったんだ。

ファイターマン お前のPETも、あの会社か？

秀 いや、IPCだよ。

ファイターマン 井上グループって、どんな会社だよ。

春名 それについては、私が説明するわ。

秀 ごめん、時間切れだ。

秀・ファイターマン 次回、ジュニアポリス番外編。井上グループ紹介

秀 次回も

春名 読んでね！

番外編 井上グループ紹介（前書き）

ちよつとだけ登場した井上春名が主役です。

番外編 井上グループ紹介

どうも、井上春名いのうえはるなです。趣味は、ロケットソーダの王冠を集めることとピアノ、バイオリンを演奏する事です。今回は、私のお父様が経営している井上グループについて説明しますね。

井上グループの本社は、DIBの隣にある超高層ビルにあります。お父様はその社長です。ここから、たくさんの企業が出ているんですよ。

まずは、お父様が経営している企業について説明します。お父様は、竜岡高校商業科の卒業生なので、商業関連のお仕事をしています。

例に言えば、井上商事、井上不動産、井上商店、井上フーズ、井上制服店を経営しています。

次に、お母様の弟様は、音楽好きなので、音楽関連の企業を営んでいます。

井上楽器店、井上ミュージックストアを経営しています。

次にお父様のお兄様が経営しているのは、旅行関連です。

井上トラベラーズ、井上旅行用具店を経営しています。

私のお母様は、金銭関連の仕事に当たっていて、井上銀行を営んでいます。この会社の良し悪しで、井上グループが左右されるといっても、過言ではありません。まあ、不況のどん底のときは、倒産寸前だったけど、何とか持ちこたえました。井上グループの、縁の

下の力持ちですね。

以上、井上グループの紹介でした。私のお父様は、十数年先までス
ケジュールが埋まっています、一分たりとも空きはありません。最後
にお父様を見たのは、私が物心ついたときです。あとは、写真だけ
ですね。いつか、私も井上グループの社長になり、どこかを経営す
ることが決まっています。それについては、私も詳しく走らないで
すが……。井上グループは、私の知られていないところもまだあ
ると思います。竜岡に入れば、商業科に入り、金銭関連も勉強しな
ければならないでしょう。これからも、井上グループを、よろしく
お願いします！

世界に羽ばたく、井上グループ。

「カット、OK!」

ここは、DIBの井上グループ本社。カメラマンたちがたくさんい
る。春名さんは井上グループのPVプロモーションビデオを製作していたのだ。

「春名さん、お疲れ様。」

「ありがとうございます、高原君。」

「しかし、君の父さんの会社はすごいよな。ニホン中だけじゃなく、
世界中にも支社を持つなんて。アメロッパ、チヨイナ、アジーナ、
シャーロ、アツフリクとか。」

「大したことないわよ。本気出せば、他の星にも出せるから」

「冗談はよしてよ。」

とまあ、まじめな本人だけど、たまにジョークを言うこともある。
番外編はここまで！

番外編 井上グループ紹介（後書き）

ファイターマン なあ秀、お前何でJPやってるんだ？

秀 何でって、いろんな人に影響されてね。このシテイから犯罪をなくしたい。そして、いつの日か父さんを見返してやりたいんだ。

ファイターマン たしか、お前逃げてここに来たんだってな。

秀 うん。みんなは何でJPに入ったんだろう？

ファイターマン たいていはお前が入れたがな。

秀 まあ、そうなるけどね。

秀・ファイターマン 次回、ジュニアポリス JPたちのきっかけ。

秀 次回も

ファイターマン 読めよな！

第5話 JPたちのきっかけ

ここは、JPたちのオフィス。警察署内の子供科の管轄だ。そこには、中学生たちが数人いた。といっても、ほとんど受験勉強に没頭している状態だ。

「渥美姉ちゃん、ここどうやって解くんだ？」

「そこはね、まずXをYと掛けて、一気に計算するの。」

「あ、そうか。」

僕は、渥美姉ちゃんに教えてもらいながら勉強していた。

「春香ー、この年号なんだっけ？」

「ここは、借金がひどくふくらむ（1929年）世界恐慌と覚えと
き。」

「うん。」

それから3分後。

「よし、ここはOKー！」

「秀、ここにX入れるの忘れてるわよ。」

「あ、うん。すぐ直しとくよ。」

「ここ分かんないんだけどー。」

「そこは、ひどくさむいひ）1936年（二・二六と覚えや。」

「分かったわ。」

そして、7分後。

「春香ー、ここが」

「あんた、考える気ないやろ。もつと自分で考え。」

「冷たいね。私たち、友達でしょ？」

「恵ちゃん、あんた運動神経だけはええけど、他はあかな。」

それを聞いた橋本さんは、グサツつときた。

言い忘れたが、彼女は橋本恵子^{はしもとけいこ}。僕のクラスメートの一人だ。春香さんとは、友達であってライバルでもある。さつき春香さんが言ったように、運動神経がよく、体育の授業でもSをとっているが、他の教科はEランクで相当悪い。また、遅刻の常習犯で毎日ホームルの最中にやってくることが多い。あと、JPでは早足を生かして犯人を追跡するが、報告書を書くのを毎日忘れ水原さんには、たびたびしかられている。

「大きなお世話よ！」

「悪い悪い。」

ちなみに、今現在のJPメンバーは、6人で、男は僕だけだ。ほかの連中はめんどくさいという理由で入っていない。でも今を言えば、

男子は僕をひどく妬んでいる。「あいつはハーレムだな。」とかなんだが言っているが、僕には何のことだか。

「あんたは、女の子に対する免疫が強すぎでしょ。」

「まあ、そうなるけど。」

前に何人が男が入ったこともあったけど、仕事ができすぎるとかなんだかんだですぐ全員辞めてしまった。まったく、僕みたいに根性ある奴いないのかな。

「そういえば、何でみんなはJPに入ったの？」

「「「まあ、いろいろあつてね。」「」」

しかし、そのいろいろが気になるものだ。

「それは、僕が説明するよ。たいていは、僕がきっかけで入ったから。」

「じゃ、説明して。」

「分かった。まずは、JPのマザーコンピューターといわれている春江さんからどうぞ……。」

第5話 JPたちのきっかけ（後書き）

春江はどうしてJPに入ったのでしょうか？
その答えは、次回明らかだ。

第5話 JPたちのきっかけ 春江編

まずは、JPのマザーコンピューターともいえる春江からJPにはいった理由を説明しよう。

その理由は、渥美からさかのぼる。

当時、小学校3年生だった渥美は、毎日まじめにジュニアポリスの任務を遂行していた。当時は、まだメンバーがたくさんおり、渥美はその中では、エースみたいな人材だった。しかし、その日、JPオフィスに爆弾が仕掛けられていた。しかし、誰もそんなことを知らなかった。当時、JPを休んでいた渥美は、インターネットをやっていた。当時は、まだ父や母もおり、幸せな毎日だった。しかし、その幸せも、その事件で壊れてしまった。

渥美は、ノーマルナビを操り、インターネットを散策していた。そこに、怪しげな電腦装置があった。そこには、数字が付いており、どんどん数が減っていった。

「何だろう？これ。」

しかし、そんなこと誰にも分かるわけではなかった。JPたちに写真を持っていったみる。

「これは……！」

これには、直子も驚いていた。

「これは、電腦爆破装置ね。」

「電腦爆破装置？」

「爆弾をどこかに仕掛けて、このスイッチを作動させるとカウントダウンが始まるの。しかも、爆弾は二つあって、どちらもどこにあるのかわからないという最新型の爆破装置よ。」

「そのひとつは？」

「まずは、みんなこの装置を解析して」

「分かりました。」

全員、装置の解析にかかった。しかし……。

「ダメ！これ今までに見たことない仕組みよ！」

「何だつて!？」

「こんなときに、エースがいてくれたら……。」

そのとき、事件は起きた。

ドッカ~~~~ン!!!

なんと、J.Pのオフィスが爆発してしまった。この影響で、J.Pメンバーのほとんどが死亡。幸い、生き残っていたのは、つかさだけだった。そして、後日……。

渥美は、ひとつ学年下の優等生の存在を知る。彼女こそ、種山春江

だった。彼女は、当時から学年では優等生である。

「あ、いたいた。君。」

「なんですか？高原さん。」

「君、ジュニアポリスに入ってみない？」

「イヤですよ。あの事件に巻き込まれるのもう真まじつ平ひらです。」

「でも、君を必要としてる人がいるの。協力して！」

「………。分かりました。」

彼女はしびしび了承した。そして、さらに後日……。

「大変！またあの爆弾だわ！」

「ええ！？」

「君の活躍の見せ場よ！」

突然、渥美は春江に振ってきた。

「はい。」

その後、本物が出された。

「前は、あと少しって言うところまでドカンだったのよね。」

「任せてください。私に言わせれば、これくらいちよちよいのちよいです。」

時間はかかったが、10分後。

「よし！解読完了よ！爆弾は、コトブキタウンの、4・3番地よ！」

「じゃあ、私はコトブキ交番に連絡して、町の住民を避難させるように言っわ！そして、つかさちゃん、あとは爆弾処理科に連絡して。」

「了解！」

そして、一時間後……。

「爆弾は、無事解体されたって。仕掛けた犯人も逮捕されたわよ。」

「春江ちゃんのおかげよ。ありがとう！」

「どういたしまして。私、ここでやってく自信が付きました！」

「っていうわけだって。といっても、これ渥美姉ちゃんから聞いた話だけ。」

「春江ちゃんがJ.Pに入ったのは、渥美先輩の影響なんだね。」

「そっいうことー！」

「次は誰？」

「春香さん。これは、僕がきっかけだな。」

次回は、その話をしよう。

第5話 J Pたちのきっかけ 春江編（後書き）

今回は、春香はなぜJPに入ったのかを解説します。

第5話 JPたちのきっかけ 春香編

「春香ちゃんは何でJPに入ったの？」

「これは、僕の誘いだね。いまから、そのときの話をするよ。」

当時小学校5年生だった僕は、一人のいじめられている少女が気になっていた。その少女の名は、東山春香。オールドシティ出身だ。彼女は、超能力者という理由で、周りからは除け者にされていた。そのときの彼女の顔は、今では、想像も付かないほど暗い顔だった。きっかけがあったのは、ある日のことだった。

ある日の放課後の屋上、そこには今にも飛び降りようとしている春香さんの姿があった。

「春香さん！何やってんだ！」

「来んといて！それ以上、近づいたら、ほんまに飛び降りるで！」

「バカな真似はよせ！」

そのとき、彼女は足を滑らせたが、間一髪僕は助け上げた。

「何でこんなことをしたんだ！」

「あんたには関係ないやろ！」

「死んでどうなるんだ！」

「もう、ウチのことはほつといて！」

それを聞いた僕は、カチンと来た。

「いい加減にしろ！！」

バシッ！！

気が付いたら、彼女の頬が赤く腫れていた。

しばらく、沈黙が続いたが、彼女は重い口を開いた。

「あんた、超能力は信じるほう？」

突然、唐突な事を聞かれた。

「え？信じるけど。」

「良かった……。ウチ、超能力者という理由で、除け者にされるのは知つとる？」

「そりやしってるよ。イヤでも知ってる。でも、何で自殺なんか？」

「ウチ、超能力で嫌われてるんなら、一度死んで普通の人間に生まれ変わりたいねん。」

しかし、僕はそんなことないと思っていた。

「あんだ、今そんなことないと思ったやろ？」

「お、思ってないよ！第一、何で知ってんだよ！僕が思ったこと！」

「ん〜、テレパシーかいな？」

もうどうだっていいや。とりあえず、僕は春香さんを説得することにする。

「でも、君が死んだら悲しむ人はいるはずだ。」

「え？」

「君の両親、担任の先生、いや。君が死ぬなんて、僕が一番悲しいんだよ！大切な人を亡くした悲しみは、この僕が一番知ってるんだ！」

「・・・・・・・・・・」

僕は、日陰町に住んでいたころ、故人の上原州とは友達だった。彼はいじめを受けており当時の僕は、弱気だったためただ指をくわえてみている以外になかった。ある日、彼が家出をしてその後死んだとの報道が流れたときは、僕はショックを受けた。そして、いじめの矛先は僕に向けられた。しかし、4年生になる前のある日、何の前触れもなく両親は海外に転勤し僕は親戚の高原家に預けられた。そして、クラスメートの誘いで、J.P.に入隊しこれを期にこれ以上大切な人を失いたくないという気持ちも込めてJ.P.に入隊した。その悲しみは、僕が1番知っている。

見ると、春香さんの目には、涙がたまっていた。

「う……。うあああ！！！」

突然、春香さんが、僕に抱きつき泣き出した。どうすればいいか分からず、僕は受け止めてやる。

「わあああ！！」

「……。春香さん。泣きたいときは泣いていいよ。」

しばらく、春香さんは泣き止まなかったが、泣きやんだあとはずっきりした顔になっていた。

「春香さん、僕はＪＰに入ってるけど、今君のような人を必要としてるんだ。だから、ＪＰに入ってほしい。そうすれば、みんなを見返せるはずだ。」

「……。うん。秀君、ウチはあんたを信じるで。」

そして、春香さんはＪＰに入隊した。その後、彼女はみんなを見返せる日は意外と早くやってきた。

「それは、エレキタウンにある銀行であつたんだ。」

「それも聞かせてよ。」

「うん。あの日……。」

その日、僕は買い物用の預金を下ろすため、銀行にきていた。

「えっと……。暗証番号か」

ピッ

ピッ

ピッ

ピッ

「確認。えっと、額は……。」

ガシャーン！

「なんだ！？」

「お前ら、動くな！」

「ご、強盗！？」

二人組みの男が入ってきた。銀行強盗だ。渥美たち以外に保護者がいない僕にとっては、銀行強盗は恐怖の対象だった。

「こいつは人質だ！」

「開放して欲しけりゃ、5000万ゼニを出せ！」

「！？」

そこにいたのは、春香さんだった。春香さんが人質にされている！

「いいか！警察なんか連絡するんじゃないぞ。」

「人質の命はないと思え！」

「つてか、警察といえる人間はもういるんですけど。ここに。」

「残念やったな。警察といえる人間はもう突入しとるで」

「何！？そいつはどこだ！」

「それは、教えられへん。」

「だ、誰だ！？」

（今や！秀君！）

（うん！）

僕は、腰につけたJPベルトから、ピストルを取り出した。ピストルもって犯罪だろうと思う人もいるが、JPは特別に専用のピストルを持つことが許可されている。エアガンではなく、本物だ。ちなみに弾は、麻酔弾なので誤って撃つても人は死なない。ちなみに、音は演出である。

「人質を放せ！」

僕は、強盗の腕を向けて銃を発砲した。

「ウー！」

思ったとおりだ。強盗は一瞬ひるみ、その隙を練り春香さんは人質

から逃げ出した。

「てめえ！何者だ！」

「僕たちは！」

僕と春香さんは、顔をあわせて頷いた。そして、PETに付いたボタンを押す。すると、3D映像で、JPバッジが現れた。自らがジュニアポリスであることを証明するものだ。

「ジュニアポリス！」

周りにいる人も驚いていた。僕たちは、当時はまだ5年生だったが、これでも、ちゃんとした警察だ。

「何がジュニアポリスだ！」

ガン！

強盗は、僕らにショットガンを放ってきた。しかし、そのあと自分でも驚くようなことが起こった。
なんと、ショットガンの弾が、曲がって飛んでいった。

「何で!?!」

「ウチの念力や。」

春香さんは、僕に言ったあと、ウィンクした。僕は、それに一瞬見とれてしまった。

「兄貴！こいつら、化け物ですぜ！」

まさか、怖いものがなさそうな強盗もこれを恐れていたなんて。

「馬鹿野郎！そんなのに、ビビんじゃねえ！」

兄貴が弟分に一括していた。すると、頭の中に僕たちがマシンガンで撃たれる映像が浮かんだ。なんだ！？これは。

「秀君、逃げるで。」

「？」

みると、春香さんが、僕の手を握っていた。強盗を見ると、僕らに向けてマシンガンを構えていた。イメージであったとおりだ！

「ほな、行くで！」

「え？え？」

その後、何が起きたのか僕にも分からなかった。気が付くと、犯人の真後ろにいた。

「なにをし……。」

僕は、「なにをしたんだ？」と言おうと思ったが、春香さんが自分の人差し指を、僕の唇の近くにやった。「黙って」とでも言いたいのか？

（静かにしい。犯人に聞かれたらどないすんねん）

今のつて、族に言うテレパシーって奴か？そして、さっきのは、たぶんテレポートだな。

「ほな、捕らえるで！」

「逮捕だ！」

僕たちは、強盗に飛び掛った。そして、銃を奪い、腕に手錠をかけた。

「警察だ！」

すると、本物の大人の警察が銀行に入ってきた。

「君たちが、確保したんだね？」

「はい」

「君は、新人の割にはたいしたことだな。銀行強盗を捕まえるなんて。」

「ウチの超能力が役に立っただんです。」

「なるほど。ここからは、私たちの仕事だ。」

そして、犯人はトラックに乗せられ、刑務所に連れて行かれた。

「君は、超能力で犯人を確保した。君は、エスパーポリスだ！」

「ありがとうございます！」

こうして、春香さんは警察にも正式に認識させられた。

「っていつわけだよ。」

「春香ちゃん。最初はいじめられてたのね。」

「うん。」

「ちょっと長く話しすぎたかな？のど渴いた。」

「水でも飲んだらどうだ？」

突然、黙っていたファイターマンがしゃべった。

「あ、うん。あとで、橋本さんはなんでJ.Pに入ったかを説明するよ。」

第5話 JPたちのきっかけ 春香編（後書き）

恵子はなんでJPに入ったのでしょうか？その答えは、次回明らかに。

第5話 JPたちのきっかけ 恵子編

「はー。水飲んだら、ちよつとさっぱりした。じゃあ、JPのアスリートとも言える橋本さんがなんでJPに入ったのかを教えるよ。」
そして、僕は話し始めた。

それは、僕が春香さんをJPに入れたばかりのころだ。僕はある少女に気に留められていた。彼女こそ橋本恵子だった。彼女は、陸上部の部員（202X年以降、小学校3年生以上の生徒は、部活に入部することが許可されている）だった。彼女の足は、陸上部員の中では群を抜くほど早く、彼女の右に出るものはいないと思っていた。

ある日のこと、警察署前にあるコンビニで、盗難が発生した。

「待てー！」

僕は必死で犯人を追っていた。そのとき僕は、買出しにそこにいたため、すぐ盗難に気が付けた。全く、何で署の前で犯罪を犯すのかなあ。

「逃がさないぞー！」

僕の脳内は犯人を捕まえること、ただそれだけだった。しかし、それが不注意を呼んでしまっていた。

犯人までもう少しというところで、車が飛び出してきた。そして、

僕は車に撥ねられてしまった。おかげで、犯人を取り逃がしたが、刑事課の刑事たちが犯人を捕まえていた。

「秀君。」

「どうしたん？つかさ姉ちゃん。」

「あの事件のことなんだけど、アスリートみたいな人、いないかなーって。」

「思い当たる人が一人いるけど。」

その後、いろいろあつて橋本さんはJ.Pに入った。そんなある日・・。

「大変！また、盗難ですつて！」

「よし！橋本さん！追跡するよ！」

「任せて！この恵子ちゃんより、早く走れる人なんていないから！」

思ったとおり、犯人はまだ遠くに行っていないかった。

「は、早え。」

さすがは、陸上部員のエース。足の速さは半端じゃない。あつという間に犯人を確保してしまった。

そして、取調べは刑事課の刑事が行うことになった。

「やったね！秀君！」

「うわ！橋本さん！抱きつくな！」

その後、彼女はJPに正式に任命された。

「っていうわけだよ。最後の、ちょっと思い出したくないけど。」

「秀君つたら。」

突然、橋本さんが背中から抱き付いて来た。

「だから、やめろってそれは！」

しかも、彼女は自らの体を僕の背中に押し当ててくる。なんか、背中に無茶苦茶柔らかいものが当たってんだけど！

「おい秀、鼻の下！」

ファイターマンに指摘され、僕は手で鼻を覆った。

「そっぴや、お前は何でJPやってんだ？」

「じゃ、聞かせるよ……。」

僕は、自らがJPをやっている理由を語り始めた。

第5話 JPたちのきっかけ 恵子編（後書き）

今回は、主人公がJPに入ったきっかけです。

第5話 JPたちのきっかけ 秀編（前書き）

今回は、主人公の高原秀がJPに入ったきっかけです。

第5話 JPたちのきっかけ 秀編

「そっぴゃ、何でお前はJPやってるんだ？」

「うん、今からそのときの話を聞かせるよ。」

そして、僕は静かに語りだした。

それは、僕がまだドラゴン学園に転校して間もないころだった。その日、僕は怪我をしていて体育を休んでいた。そして、体育が終わり全員、食堂で食事をしていた。そして、食事を終えて教室に戻ってみると、事件が発生していた。なんと、クラスメートの一人の財布が盗まれていたのだ。しかも、見つかったと思ったら、僕の机の中にあつたので、騒ぎが大きくなってしまった。そして、僕は中等部のJPにより、逮捕されてしまった。

「はあー。何でこうなるんだろう。」

僕は、留置所に入れられてしまった。現在、署内では裁判の続きが行われている。有罪になったら、シテイの土地を踏むことは当分できないだろう。でも、僕は自分は無実だと信じ続けていた。すると、聞きなれない話し声が聞こえてきた。

「面会したいのですが。」

僕が、一度も聞いたことのない声だった。しばらくして、一人のメガネ少女が入ってきた。このとき、僕は知らなかったが、彼女こそ種山春江である（春江さんはこのときからメガネをかけていた）。

「大丈夫、私が助けるから。」

「でも、どうやって。」

「ああやって、犯人扱いするのは、証拠を十分に知らない人だけよ。私はあの後、机をちよつと調べたの。そしたら、財布から驚きの証拠が出たわ。」

「証拠？」

「それは、明日のお楽しみよ。まずは、財布が盗まれたのは4時間目が始まったときから、終わったときまでね。その時の話を聞かせて。」

「うん、3時間目が終わったあと、僕は体育の先生に許可を貰ったから、すぐに保健室に行ったんだ。それから、僕はそこを一步も出なかった。だけど、外に僕と同年代の怪しい人影が見えたんだ。」

「ちよつと待って。人影？」

「うん、何かになるかなと思って、写真撮つといたよ。これ。」

僕は、春江さんのPETに写真を転送した。そして、春江さんが写真を開いた。

「これは、当時学校を休んでいた人ね。私、この人が怪しいとらんだ。一発で分かったわ。」

「そろそろ時間です。」

「あ、はい。秀君、私はあなたが無実だと信じてるわ。」

「うん。」

そして、春江さんは帰っていった。大丈夫、僕は無実だ。そう自分に言い聞かせていた。

次の日、僕は裁判にかけられた。傍聴席には、僕のクラスメートのほとんどが来ていた。

「それでは、金銭窃盗事件の審理を始めます。検察側、冒頭弁論をお願いします。」

「公訴事実。被告人、高原秀は5月25日、ドラゴン学園4年C組の教室において、体育の時間中、自らが休んでいるときを練り、高畑光より財布を盗んだ罪に問われます。罪名、金銭窃盗^{きんせんせつとつ}。以上についての審理を願います。」

中略

被告人は、今や絶体絶命の状況だ。全部僕は知らないのに、弁護人と春江さん以外は、僕を完全に犯人扱いしていた。（当時、今のJ Pメンバーは全員別クラスだった。）

「それでは、判決を言い渡します。」

（もうダメだ・・・）

完全に凹へこんだ僕を勇気付けてくれたのは、弁護人の一言だった。

「異議あり!!」

その一言で、法廷が静かになった。

「まだ、証拠は完全に出ていません。よって、今のままでは判決を下すことは不可能です!こっちは、被告と窃盗を打ち消す証拠を持っています。」

「異議を認めます。では、その証拠品を提示してください。」

すると、弁護人がポケットの中から財布を取り出した。

「それは、被害者の財布ですか?」

「そう、これは被告人の机の中から見つかったものです。しかし、これには被告人の指紋は付いていません。杉山すぎやまたかこ高人君の指紋が付いています!」

「異議あり!!」

今度は、検察側が異議を申し立てた。

「しかし、当日本人は休んでいたはずですよ。」

「残念ながら、こちらには大きな証拠があるのですよ。この写真で

す！」

弁護人は、写真を提出した。

「弁護人、その写真は？」

「これは、被告人が撮影した写真です。見てのとおり、人が写っています。尤も、この状態では、誰かまでは特定できません。しかし、被告人の証言では、少なくとも同年代とっていました。」

中略

証言台には、杉山高人が現れた。

「では、財布を盗んで、彼の机に入れたのは間違いないですね。」

「はい。」

「でも、どうしてそんなことを？」

「あいつが、憎かったんです。転校早々、ほかの連中にチャホヤされて俺は面白くなかったんです。だから、あいつを泣かしてやろうと思って。」

だからって、そんなことするか？普通。

バンバン！

裁判長が木管をたたいた。

「主文、高原秀は無罪とする。そして、杉山高人は、1年の謹慎とする。」

こうして、僕の疑いは晴れ、濡れ衣も完全に乾いた。そして、春江さんに呼ばれ僕はJ.Pに入った。ちなみに、僕を逮捕した中学生J.Pは、責任を取るとかで辞めたらしい。

「って言うわけなんだ。」

「大変だったんだね。」

「うん。事件に巻き込まれるのはもう真つ平だ。」

何か、何の関係もないのに事件に巻き込まれ、逮捕されるって言う流れ、昔の某裁判シミュレーションゲームみたいだな。

プルルルル！プルルルルル！

突然、デスクの電話が鳴った。
ガチャ

「はい、子供課です。はい、はい。分かりました！」
ガチャ

「みんな！また事件発生だ！行くぞ！」

「『ええ！（よしきた！）』」

僕は、窓を開け、全員ジェットパックを背負った。

「さあ、行くよ！」

僕たちは、事件現場へ飛び出した。

第5話 JPたちのきっかけ 秀編（後書き）

中略とあるのは、内容が思い浮かばなかったからです。っていうか、財布を摩り替えたぐらいで、裁判にかけられるのでしょうか？あと、感想、待ってます。

今回は、一人しか新キャラが登場しなかったので、キャラクター紹介はなしです。

次回予告

ファイターマン 秀！夏休みだぞ。

秀 そうだね。だけど、僕らJPに休みはないよ。

ファイターマン 犯罪はいつ起きるか分からない世の中だからな。

秀 うん、物騒だね。今回の仕事は、ベイサイドアイランドにあるプールパークの警備員だ。

ファイターマン たしか、あそこは人工島だったな。

秀 うん。また、嫌な事件が起きなきゃいいけど。

秀・ファイターマン 次回、ジュニアポリス！ベイサイドとスプラッシュシューマン！

秀 次回も、

ファイターマン 読めよな！

第6話 ベイサイドとスプラッシュウーマン 1 (前書き)

結構端折って、夏休みパートになりました。

第6話 ベイサイドとスプラッシュウーマン 1

いつの時代も、学校生活には、楽しい行事がある。それは、夏休みだ。もちろん、夏休みが嬉しいのは、僕も例外じゃない。

でも、学園長の話長いな。いつまで続くんだろう。あー、早く終わらないかな。

「あー、立つのも辛いな。」

「毎回こうなのか？」

「うん」

やっとのことで、話が終わり僕たちは、家に帰って行った。

でも、JPには休みはない。犯罪は、いつ起きるか分からない。それほどドラゴンシティは、物騒なのだ。って言うかこれ、全国どこでも同じようなもんだけどね。

PPP!PPP!

「秀！メールだ！」

僕は、新着メールを開いた。メールの内容はこうだ。

本文 7月31日。ベイサイドアイランドのプールパークで警備員を行うこと。開始時間 8時

ベイサイドアイランドとは、埠頭町より南側にある海の上に浮かぶ人工島だ。そこへのアクセスは、埠頭町から出発する連絡定期カーフェリーで行くことができる。そこには、たくさんの企業も進出ししており、スイッチひとつで、様々な形に変わるスタジアムもあり、しかも島内の交通は、路面電車がある。

「お前も大変だな。」

「うん。当日は結構暑くなりそうだ。」

7月31日 6時30分

渥美姉ちゃんの声が、僕の部屋に響き渡った。

「秀〜！起きなさい！」

「ん〜、何だよ。まだ6時半だぜ？」

「何だよじゃない！昨日言わなかった？起こしてくれって。」

「悪い、忘れてた。」

僕は、ベッドから出て、服を着替えリビングに出た。渥美姉ちゃんは、すでに部活の朝練に行く準備していた。渥美姉ちゃんは、ラクロス部に所属しているのだ。

「じゃ、僕は先行ってるよ。」

「朝食どうするの！？」

「コンビニでパンでも買っわ。」

「じゃ、気をつけてね。」

僕は、DIB一階のコンビニでクリームパンを買ってそれを朝食にした。そして、メトロの埠頭町方面のホームに立っていた。いつもは、ニュータウン方面のホームに立つので、違う感覚だった。すると、アナウンスが流れた。

「まもなく、2番線に、ドラゴン埠頭行きが参ります。」

いつもと変わらぬ光景で、電車がホームに滑り込んできた。しかし、今日はいつもと違う気がした。いつもは、1番線から乗り込むので、2番線からはあまり乗らない。しかも、電車の中も違っていた。いつもは、ロングシートだが今はクロスシートになっている。メトロの座席は、早朝、昼間、深夜はクロスシート。ラッシュアワー直前・直後はロングシート。ラッシュアワーの最中は、座席が格納される。いつも見てるのは、格納座席と、ロングシートだから、僕はこの形は初めてだった。

「ま、座ればどんな並び方しよう、座席は座席さ。」

僕は、開いている適当な席に座り、ドラゴン埠頭まで向かった。

列車は、ドラゴン埠頭に到着した。ホームの形は、対向式ホームだ。到着した2番線は、降車専用ホームで、エスカレーター（登りだけ）を上ると、すでに出口専用改札口だ。そして、地上に出ると日差しがまぶしかった。

「夏だなー。」

それを改めて実感した僕であった。

第6話 ベイサイドとスプラッシュウーマン 1 (後書き)

次回は、秀がベイサイドアイランドに上陸します。
感想・一言、待っています。

第6話 ベイサイドとスプラッシュウーマン 2

僕は、海沿いの道路を横切り、ドラゴン港にやってきた。ここからは、ドラゴンシティの沖のほうにある諸島へ向かう定期船が発売している。僕は、ベイサイドアイランド行きチケットを買い、船に乗り込んだ。時計を見ると、すでに7時を回っていた。

「まもなく、ベイサイドアイランド行き、出航いたします。」

僕たちをのせた船は、ベイサイドアイランドへ向けて出港した。東を見ると、太陽はすでに高く登っていた。まだ7時過ぎなのに、ま、気にするほどでもないか。

20分後。船は、ベイサイドアイランドに到着した。

「潮風が気持ちいい。」

「浸ってる場合じゃないと思うぞ。」

「そうだね。」

僕は、路面電車に乗り込んだ。島内のアクセスを担っており、これに乗れば、自分のいきたいところに行くことができる。やはり、ここもドラゴン交通局が経営している。

「次は、プールパーク正門、プールパーク正門です。」

ピンポン

「次、止まります。」

お客は、水着が入ったかばんを持った人が多い。やはり、プールパークに行くからなのだろう。でも、僕は遊びに来てるんじゃない。警備員で来てるんだ。

僕は、入り口の警備員に自らがJPであることを証明し、管理所に入った。

そして、開園30分後、僕はプールの敷地を見回っていた。仕事の内容は、プールを見回りおぼれている人がいないか、いたら助けることだ。ちなみに、僕は服を着ていてちよつと浮いている存在だ。別に地面から浮いてるわけじゃないよ。まあ、いざとなりや、着衣水泳で救助するか。

「はあー、みんな水着だから目のやり場に困るよ。」

「お前、めちやくちや浮いてるな。」

「お前が言うな。渥美姉ちゃんは部活。つかさ姉ちゃんも本人だ。仕事サボって、隣の動物園まで遊びに行くなんて。ハアー、ついてないぜ。」

昼間で見回りしたが、溺れる人は誰一人と出なかった。シティもこんな風に平和だったらいいんだけどね。そんなどうでもいいことを考えて座っていると、突然頬が急に冷たくなった。

「わああああー!!」

ザッポーン!

僕は、突然のことに驚き、反射神経で体が勝手に前に動いた。その弾みで僕はプールに服を着たまま落ちてしまった。

「あー、ひどい目にあつた……。」

僕は言うまでもなく、濡れ鼠になつてしまった。「PET大丈夫か？」と思つてる読者もいるだろうが、心配は要らない。PETは耐ね熱耐寒耐水の3つを兼ね備えているため、シヨートしなくてすむ。

「おい、大丈夫か？」

ファイターマンが何事もなかったかのように僕に語りかける。

「まあ。つて誰だよ。」

「秀君。大変ね。こんな暑いのに。」

「橋本さんか……。もう大変だよ。暑くて暑くてたまんないよ。後ろには、橋本さんがいた。しかも、大胆なことにビキニを着ていた。手には、缶ジュースを持っていた。」

「はい、ジュース。」

「悪いね。じゃ、僕は見回り続けるよ。」

僕は、橋本さんに貰つたジュースを飲みながら見回りを続けた。

しかし、太陽が僕の頭を焦がすように照り付けている。

「暑い……。あ、そうだ。」

僕は首から提げていたタオルを頭に巻き、ターバンの代わりにした。っていうかこれ、アジーナではありふれた光景なんだけどね。僕は見回りをしていると、一人の同年代の少女が駆け寄ってきた。多分、違うクラスの人かな。

「友達が溺れてるんです！助けてあげてください！」

その前に、僕を呼んでる暇があつたらそいつをプールから出してやれよ。と聞いたかつたけど、黙っておくことにする。

「で、どっち!？」

「あつちです！」

僕は彼女についていくことにする。なるほど、一人の少女が溺れそうになつてもがいている。っていうか、君が助けてやって欲しいな。って、語ってる場合じゃない！僕は、そのままプールに飛び込み、溺れかけた少女を助け上げた。

「おーい！大丈夫かー!？」

僕は、溺れかけていた少女に声をかけた。とりあえずとして、あの時渥美姉ちゃんにしてもらったように、口元に手をあてがった。

「大丈夫！息はしてる！」

しかし、この人どこかで見覚えがあるな。

(思い出したぞ！こいつ、竜岡町のバスホームでぶつかってきた人だ。)

そのとき、少女が目を開けた。

「あ、気が付いたのね。」

すると、もう一人の少女がその少女に話しかけていた。どうやら、3人組らしい。

「さっき、助けてくれたのはこの人よ。」

「ほら、正巳。お礼しなさい。」

どうやら、彼女は正巳まひというらしい。僕は、彼女の顔を見ると耳ま
で真っ赤にしていた。その後、あのようなように逃げてしまった。

「あ、正巳!!」

「じゃあね。正巳!!」

「……………さ、仕事仕事。」

僕は見回りを続けた。あれ？そういえば、ターバンどこにいったんだ？

第6話 ベイサイドとスプラッシュウーマン 2 (後書き)

感想・評価・一言待ってます。

第6話 ベイサイドとスプラッシュウーマン 3 (前書き)

父が、DVDコピーのため、パソコンやる暇なかったたので、更新遅れました。

楽しみにしていた皆さん。申し訳ありません。
では、作品をお楽しみください。

第6話 ベイサイドとスプラッシュウーマン 3

僕は、ターバンのことなんか、頭から振り払い監視を続けた。しかし暑い……。僕は、日〓暑いというイメージも振り払い、監視していた。昔から言うじゃない。心頭を滅却すれば日もまた涼しいって。しかし、僕の目が行き届かないところで誰かが何かをしていたのは、このときの僕は知る由もなかった……。

僕は、園内の食堂で食事を取っていた。今日の昼飯は、ざるそばだ。暑いときには冷たいそばがうまいもんだよ。

「秀。今さっき、ナビロイドの気配を感じた。」

「え？ここもやっぱり事件に巻き込まれるとか？」

「分からん。だが、警戒を厳しくして回ったほうがいいかもな。」

「うん。」

昼食を食べ終わり、僕は引き続き巡回を続けた。流れるプールは、ゆったりしていた。明日、また来よう。そう考えた僕であった。すると、異常現象が発生した。ゆったり流れるはずの流れるプールの流れが速くなっていた！これじゃ、渓谷だよ！とりあえず、人を救出しないと！すると、園内放送が流れた。

「本日も、ベイサイドプールパークにお越しいただきありがとうございます。流れるプールのシステムに、原因不明の不具合が発生しました。皆様、直ちに流れるプールからはおあがりいただきますようお願いいたします。」

すると、流れるプールで流れていた人たちは、いつせいにプールから上がっていた。とりあえず、システムを目指そう！僕は、管理室へ向けてダッシュした。

とりあえず、管理室に着いたぞ。僕は一人の管理官にプラグインの許可を取った。すると、ドアから二人の女子が入ってきた。片方は水着。もう片方は私服だ。

「秀君！何が起こってんねん！？」

「春香さん！春江さん！」

「事件があるって聞いたから、飛んできたわ！」

「じゃあ、行くぞ！」

「プラグイン！ファイターマン！トランスミッション！」

「プラグイン！リーフマン！トランスミッション！」

「プラグイン！ウイングマン！トランスミッション！」

俺たちは、プール管理システムの電腦にプラグインされた。あちこち水浸しだ。まあ、プールシステムの電腦だから仕方ないな。

「何かすごい気配を感じる。近くにナビロイドがいるはずだ。」

「ファイターマン！気をつけて進んで！」

「任せておけ！」

俺たちは着々と進んでいくと突然、激流が迫ってきた。何で、電脳に激流があるんだ!?

「気をつけて!その激流は多分、ナビロイドが流したものだ!きつと、僕たちが入ったのを感じたかもしれない!流されないようひたすら耐えるんだ!」

「これくらい、どつってことないぜ!」

「うわああああ!!!」

「リーフマン!」

なんと、激流に耐え切れずリーフマンが流されてしまった。まったく根性ないな。

しばらくすると、激流が終わった。よし!今のうちだ!しばらく進むと、また激流が流れてきた。そして、その激流の正体があった。ゲイラークが集団でワイドショットを放っていた。

「バトルチップ!エレキリール!スロット・イン!」

「食らえ!」

エレキリールは、食らった相手が近くにいると、その相手もダメージを受けるので、一気に倒すにはもってこいだ。ゲイラーク集団は一瞬で全滅した。

「私が召還したゲイラーク集団を倒すとはたいしたものね。裏切り者は見つけたわよ。」

俺は声がしたほうを注目すると、そこには人魚に似たネットナビがいて、手にはトライデントを持っている。こいつが、今回のナビロイドのスプラッシュウーマンだ。

「バトルオペレーション！セット！」

「イン！」

「ラスタートライデント！」

「バルカンジャブ！」

俺はバトルでは女でも手加減しない主義だ。突然飛んできたトライデントをバルカンジャブで打ち消し、腰を落とす。

「バトルチップ！サンダーボール！スロット・イン！」

俺は、サンダーボールで反撃した。スプラッシュウーマンは、水属性だから電気系の攻撃はよく効くぜ。

「よくも、私の顔に泥を塗ってくれたわね。今日はこれくらいにしてあげるわ。」

そっさい、スプラッシュウーマンは逃げ出した。

第6話 ベイサイドとスプラッシュシューマン 4

スプラッシュシューマンは取り逃がしてしまった。でも、プールの暴走は収まっていた。まあ、よしとするか。

「秀、今度はどこで起きるか分からん。十分に警戒しておけ。」

「分かってる。」

そして、仕事を終え、僕は家に帰っていった。

しかし、事件は僕が風呂に入っているときにおきていた。

「く。」

僕は鼻歌を歌いながら髪を洗っていた。

「十分洗えたし、流すか。」

僕は、シャワーの蛇口をひねりお湯を出そうとした。しかし、お湯が出ない。どうなってんだ？

「あれ？」

やっと湯が出た。しかし、次の瞬間……。

「ぶわっ！冷た！」

なんと、お湯が水になっていた。僕は、通信ボタンを押し台所にい

る渥美姉ちゃんと回線をつないだ。

「渥美姉ちゃん。給湯のスイッチ切った？」

「切るわけないでしょ。」

「渥美ちゃん。給湯装置に異常が発生してるんじゃない？私をプラグインして！」

「分かったわ！フェアリー！」

フェアリーとは、渥美姉ちゃんのネットナビである。渥美姉ちゃんによると、最近手に入れたとのこと。

「僕はこっちからファイターマンをプラグインする！行くぞ！」

「よし来た！」

「プラグイン！ファイターマン！トランスミッション！」

「プラグイン！フェアリー！トランスミッション！」

給湯装置にプラグインされた俺は、あることに気が付いた。プログラムたちが倒れていた。

「プログラム君！しっかりして！」

フェアリーは、プログラムを手当てしていた。俺は周りを見渡してみる。すると、給湯制御システムが無残に破壊されていた。きつと、ウィルスの仕業だな。

「ファイターマン！危ない！」

秀の声を聞いた俺は、とっさにバックステップを取った。泡が飛んできた方向を見ると、エビロンがたくさんいた。

「バトルチップ・スプレットガン！スロット・イン！」

俺は、秀が送ったスプレットガンで応戦した。やられたらやり返す。これが俺のやり方だ。すると、エビロンは全滅したが、エビデルは簡単には倒れなかった。

「秀！まだ出てくるぞ！」

すると、ゲイラークが集団で現れた。

「プログラムアドバンス！バトルチップ・スプレットガン！トリプルスロット・イン！プログラムアドバンス発動！」

「うおおおおー！！」

俺の両手が、まばゆく光りだした。これが、プログラムアドバンスの前触れだ。

「ハイパーバースト！」

「いっけー！」

ウイルスたちは、全滅した。どんなもんだい。

「ふふつ。飛んで火にいる夏の虫とは、まさにこのことね。」

「お前は……。」

そこにいたのは、スプラッシュウーマンだった。

第6話 ベイサイドとスプラッシュウーマン 4 (後書き)

年内には、第6話を終わらせようと思っ
ています。

第6話 ベイサイドとスプラッシュウーマン 5

「バトルオペレーション！セット！」

「イン！」

「前は手加減したけど、今回は手加減無しよ！」

「そういわれると、俺も燃えるぜ！バルカンジャブ！」

しかし、俺の攻撃はいとも簡単にかわされた。

「ラスタートライデント！」

攻撃をかわしたスプラッシュウーマンが、奇襲を仕掛けてきた。

「バトルチップ！リーフシールド！スロット・イン！」

俺は、秀が送ってくれた防御系チップのおかげで、なんとか攻撃を免れた。今度はこっちのばんだ。

「バトルチップ！エレキソード！スロット・イン！」

俺は、エレキソードを手にスプラッシュウーマンに突進した。

「ラスタートライデント！」

「うわあああ！」

「ファイターマン！」

敵のカウンター攻撃を食らってしまい、俺は大ダメージを食らってしまった。

「くそ……。どうすればいいんだ？リカバリーチップは今、部屋の箱の中だし……。」

「ヒーリング！」

なんと、フェアリーが体力を回復させていた。

「誰も体力を回復させるなんて言ってないぞ！」

「フフツ。素直じゃないのね。」

「う、うるせえ！」

こいつ、まさかツンデレだったとはな。

「秀、何か言ったか？」

「いや、何も。じゃあ、行くぞ！」

「秀！オペレート頼むぜ！」

「バトルチップ！マークキャノン！スロット・イン！」

さあ、反撃開始だ！

「食らえ！」

マークキャノンは、狙った獲物は逃がさないキャノンだ。

「ラスタートライデント！」

しかし、スプラッシュウーマンの攻撃で打ち消されてしまった。

「何もかも打ち消されてしまうなら……。バトルチップ！ブーメラン！スロット・イン！」

「まだ分からないのかしら。無駄だって言ってるでしょ。ラスタートライデント！」

しかし、ブーメランは弧を描くようにして飛ぶため、どこへ行くか分からない。なので、攻撃も当てにくいのだ。

お、ブーメランが戻ってきたぞ。

「いたっ！」

「よし！今がチャンスだ！」

「バトルチップ！エレキソード！スロット・イン！」

「食らえー！」

「きゃあああああああ……。」

スプラッシュウーマンは倒れた。俺は、一枚のチップに気が付いた。

ラストトライデントだ。どこかで使えるかもな。すると、スプラッシュウーマンが起き上がった。

「あなたには、負けたわ。私は、何のために生まれたの？」

「俺と戦うためだけに作られたが、今は違うな。」

「私、あなたに協力するわ！」

「分かった。僕の知り合いに送るよ。その人と、ちゃんとやっつけてくんだよ。」

「分かったわ！」

まず、スプラッシュウーマンをMDにいれ、ホワイトチップをさす。ラストトライデント・ゲットだ。

「フェックション！」

「秀、湯冷めか？」

「かもね。もう一つ風呂浴びるか。」

こうして、シティの平和はまた守られた。

そして、僕は風呂から上がって、パジャマに着替えていた。

「あー、いい湯だった。」

「キヤーー！」

渥美姉ちゃんの悲鳴だ！

「どうした！？」

「水道が壊れた！」

今日は、水系で散々だ。もう水は、懲り懲りだ！

第6話 ベイサイドとスプラッシュウーマン 5 (後書き)

もうすぐ、2009年も終わりですね。

次回は、第5話と6話の新キャラ紹介です。

キャラクター紹介 5

人間

はしもとけいこ

橋本恵子

アスリートJ-Pの異名を持った少女。名前のとおり、足は相当速く運動神経も抜群。だが、その代償頭を使うのが苦手で、成績は相当悪い。そのため、犯人を追跡すること以外には、活躍が少ない。作中では、語られなかったがデンサンシティ出身。一人称は「私」

たにぐちまひなみ

谷口正巳

秀とは、同年代だが別クラス。非常にシャイな少女で、人の顔を見ただけで赤くなり逃げてしまう。

詳しいことは、また後ほど。一人称は「私」

ネットナビ

フェアリー

渥美のネットナビ。名前のとおり、妖精の姿をしている。背中に生えた羽で、浮遊することも可能。

主な技は、タイフーンダンス、フェアリーフェザー、ヒーリング

スプラッシュウーマン

女性型ネットナビ。ナビロイドとして作られたが、ファイターマンにより返り討ちにあい、秀の知り合いのナビになった。主な技は、ラストトライデント、トライデントショット。

キャラクター紹介 5 (後書き)

ファイターマン 秀、作者から伝言が来てるぞ。

秀 何？

ファイターマン 今年の更新は、ここまでです。皆さん、来年またお会いしましょう。だってよ。

秀 来年？なんだそりゃ？

ファイターマン まあ、作者の次元が、そうだったことになるかな。

(小説内の世界は、204X年になってます。)

秀 だれだ？今の？まあいいや。え？

秀 それでは皆さん

全員 また来年、お会いしましょう！よいお年を！

第7話 盗まれた薬 1 (前書き)

あけましておめでとうございます。作者の城啓裕です。

無事、2010も始まりました。今年も、ジュニアポリスをよろしくお願いします！

第7話 盗まれた薬 1

今日もまた、平穩かつ平和なドラゴンシティ。

「キヤー！」

・・・のはずなわけがない。

「どうした！？つかさ姉ちゃん！」

「薬が……。薬が……。」

部屋を見ると、薬が散乱していた。ちなみに、これらは全部つかさ姉ちゃんが調べたものだ。

「あちゃー。酷いもんだね。それに、すごい臭い……。」

「ほら、マスクマスク！」

「悪いなつかさ姉ちゃん。でも、ここは署内だから不審者は入れないはず……。誰がこんなことを？」

「きっと、スパイじゃない？偽の警察手帳機能を使って、ボクの部屋に入って部屋を荒らしたんだよ。」

僕は、ふと見ると防犯カメラが目に入った。

「あれ見れば、何かわかるんじゃない？あれは、警備課を通して回線がつながってるから。」

「プラグイン！ファイターマン！トランスミッション！」
「プラグイン！エンジェル！トランスミッション！」

エンジェルとは、つかさ姉ちゃんが最近手に入れたネットナビだ。名前のとおり、天使が由来している。

20分後。

「つかさちゃん、データもって来たよ。」

「ありがとう、エンジェル。」

そして、それをMDにダビングした。このMDは便利だな。ナビロイドを入れたり、音楽や映像までダウンロードとかダビングもできるもんだな。

「よし、再生するよ。」

僕は、エンターキーを押し、映像を再生した。つかさ姉ちゃんの、薬部屋を荒らしたのは誰だ？そして、薬を盗んだのは一体……。

第7話 盗まれた薬 1 (後書き)

何か、新年早々中途半端なところで終わっちゃいました。

第7話 盗まれた薬 2

そして、防犯カメラの映像が映った。僕とつかさ姉ちゃんは、ディスプレイを見つめていた。ほかの連中は、パトロール・買出し中だ。僕らは、留守番で暇をしている。

「時間帯は、僕たちが帰ったあとみたいだね。」

20時30分。

「お疲れ様です。」と、僕らは帰っていった。水原さんは、今日の報告書を署長に提出するため、残っている。このあと、同じ状態が続くそうなときは、早送りしていいこと。

21時。

水原さんが、タイムカードを挿し帰って行った。そして、部屋の照明は消えたが、赤外線で見えるようになっていた。

「早送りしよう。」
ピッ

22時。

警備員がやってきた。警備員は物を盗む人じゃないよね。警備員は、周りをしばらくキョロキョロしていたが、異常なしと分かると部屋を出て行った。

「このあとしばらくは、怪しい人影はないね。早送り。」

「ただいまー。」

「「おかえりー。」」

あ、買出しの連中が帰ってきた。

「ちよつとつかさ！何秀にくつついてるのよ！」

「え？」

映像を食いつくように見ていたので、気づかなかったが僕の肩につかさ姉ちゃんが、手をかけていたうえ、体も密着していた。

「実は、つかさ姉ちゃんの薬部屋が何者かに荒らされてたんだ。だから、事件があつた時間帯の防犯カメラの映像を見てたんだ。」

「え！？」

「私は、部屋の捜査に当たるわ。」

「分かった。僕は、引き続き映像をチェックする。」

渥美姉ちゃんは、つかさ姉ちゃんの薬部屋へ向かった。僕と、つかさ姉ちゃんは、引き続き画面を注目した。

「でも、妙だな。つかさ姉ちゃんの部屋って、セキュリティ万全じゃないの？こつちからは、暗証番号を入力しないと開かない仕組みで、あけられたとしても、レーザーセンサーではいることも難しいはず。」

「ハッキングされたんじゃないのか？」

「それも有り得るけど……。ん？」

映像を見ると、いかにも「はい、私は不審者ですよ。」と言いたそうな人が出ていた。その人は、目出し帽をかぶっているため、顔が分からない。そして、その人は、つかさ姉ちゃんの薬部屋へ向かった。

「秀、別のアングルのデータもあるぞ。」

「じゃあ、それを再生してみよう。」

僕は、MDをパソコンから取り出し、新しいデータを記録した。そして、もう一度パソコンに挿入し、映像を再生した。すると、話し声が聞こえてきた。

「ドアには、荒らされた痕跡はないわね。」

僕と、つかさ姉ちゃんは映像を見ていた。すると、不審者はロックシステムにプラグインしていた。

しばらくすると、ロックランプが緑色に変わった。解除の印だ。そして、しばらくしてその不審者は、つかさ姉ちゃんの薬部屋に入っていた。すると、ガラスが割れる音が何回かしたと思うと、薬品の一つを抱えて、逃げるように去っていった。

「ロックシステムにプラグインした際に、レーザーセンサーも止めちゃったってことか。」

一応、映像は見終わったな。これは、証拠として受理しておこう。あれ？薬部屋のほう、ずいぶん静かになったな。捜査は終わったのかな？でも、誰も戻ってこない……。

「ちよつと、部屋行って来る。」

「待って！行くならマスク！」

「あ、うん。」

行ってみると、全員倒れていた。

「大丈夫。この悪臭に気絶してるだけ。」

「無理もないな。換気しないと。」

僕は、換気扇の紐を引き、換気扇を回した。

「やてと。」

僕は、部屋を出てマスクを取った。僕は、昔からマスクの独特な感じがあまり好きになれない。

「う……。」

しかし、マスクを取ってしまったがために、薬の悪臭を吸ってしまった。そして、僕は意識が遠くなった。

第7話 盗まれた薬 3

「う、うーん。今何時？」

「あ、気が付いたのね。」

「うん。」

目を覚ますと、そこはJ.Pの仮眠室だった。とはいえ、僕はおもいつきり寝ちゃった気がする。

「うーん、あのにおいは、硫黄に腐った卵を混ぜたような……言葉に表せん。」

「要はひどいってこと？」

「うん。つかさ姉ちゃんあんな悪臭でよく部屋にいられるね。」

「いろいろな薬品が混ぜっちゃって、ああいう悪臭が出たんだよきつと。それに、利用するときには換気扇を回して、マスクつけてるか」
「ぶ。」

「ふーん。ほかに倒れてた連中は？」

「ほかのベッドにいるよ。」

「そっか。さっきから思ってたけど、なんでつかさ姉ちゃんの薬を狙ったんだろっ？」

つかさ姉ちゃんも、そういえばそうだ。と言いたそうか顔をしていた。

「きつと、ボクの薬はすごい効くから、産業スパイが狙ったんだよ。」

「いや、君が薬を調合してるの知ってるのは、JPMメンバーだけだしそれに、薬のことも喋らないじゃん。誰も。」

「つかさ。お前の部屋の引き出しの中、見てみな。」

突然、黙っていたファイターマンが喋った。

「どづいつことだろう?。」

つかさ姉ちゃんは疑問に思っていたが、マスクを着け自分の部屋に向かった。

ボクは、秀君のファイターマンに言われ、自分の部屋に来ていた。マスクをとっても、別に悪臭はなかった。換気が終わったみたい。それにしても、引き出しを見ろって、なんだろう?。

引き出しを開けてみると、異様な形をした機械が入っていた。

「これは……。」

盗聴器と、小型カメラだ。きつと、これで情報を収集してたんだね。秀君に報告しないと。

「ええ！？盗聴器と小型カメラ！？」

「うん、知らない間につけられたみたい。」

「それにしても、つかさ姉ちゃんの薬で何するんだろっ？」

「さあ。」

「ま、考えてても仕方ないから、インターネットでもやるのかな。そう思い、僕はパソコンをつけ、インターネットを開いた。」

「あれ？中がおかしくなってる。」

画面には、接続エラーとなっている。おかしいな。

「ファイターマン、ちょっと見てきてよ。」

「分かった。」

「ボクも行くよ。」

「よし！行くよー！」

「プラグイン！ファイターマン！トランスミッション！」

「プラグイン！エンジェル！トランスミッション！」

俺とエンジェルは、JPのホームページにきていた。

「とりあえず、ワープホールでインターネットに出るぞ。」

「あーい。」

しかし、インターネットに出てみると、なにやら体に悪そうな煙があたりに立ち込めていた。

「秀!どうなってんだ!?!」

「分からん!とりあえず、ガスマスクを送るよ。」

俺とエンジェルは、ガスマスクを着けエリアを進んでいった。

「ん?」

ふとみると、ネットナビが倒れていた。

「おい!すっかりしろ!」

しかし、返事がない。多分、この煙にやられたのか?

「つかさちゃん!この煙、盗まれた薬と同じ成分だ!」

「ええ!?!」

(どんな薬調合してるんだ。)

そう思った俺だが、とりあえず進むことにした。

第7話 盗まれた薬 3 (後書き)

ジュニアポリスのキャラクターに、声をつけるとしたら、声優は誰が似合うと思いますか？
僕適には。

高原秀 佐藤利奈

高原渥美 豊口めぐみ

高原つかさ 高山みなみ

ほかは、考え中です。この人にこれが似合う！と思った方は、ぜひ感想欄に書いていってください。

第7話 盗まれた薬 4

俺とエンジェルは、深い毒ガスの中を進んでいた。すると、エレキエリアのメインストリートから少し外れた道があった。

「フー、ここはガスにやられてないな。」

安心した俺は、ガスマスクを取った。

「ファイターマン、インターネットとか電脳世界って、空気あるの？」

「いや、考えたこともないな。」

そういえば、どうなのだろうか。すると、プログラムが走ってきた。

「タスケテクダサイ！」

そいつは、えらく慌てていた。

「落ち着け！どうしたんだ！」

「コノ、ドクガスノナカニナカマガトリノコサレテマス！コノバキ
ユームヲツカツテ、ドクガスヲスイトリナガラサガシテクダサイ！」

「そういわれ俺は（一方的に）バキユームを渡された。」

「コノバキユームハ、アノドクガスヲスイトルコトガデキマス。シ

カシ、スイトルリヨウニハゲンカイガアリマス。アンゼンチタイデ
ハイシュツシツツ、ススンデクダサイ。」

「分かった。」

そして、バキュームで毒ガスを吸いながら進んでいく。そのついで
にプログラムを助けながら。バキュームを使うのは、とりあえず俺
の役目で、エンジェルはプログラムの治療をしている。

「ファイターマン、バキュームが満タンだ。」

「分かった。排出しよう。」

とりあえず、道はそれるが安全地帯にはいり、毒ガスを排出した。

「あれ？排出されてないのか？」

「あ、プログラム君だ。」

「イイワスレテマシタガ、バキュームデスイコンダドクガスハ、ア
ンゼンナクウキトナリ、ハイシュツサレマス。」

「だって。」

すると、秀が口を挟んだ。

「ファイターマン、バキュームはもう空っぽだよ。」

「よし！進むぞ！」

引き続き、俺たちは進むことにしたのだが……。

「なんか、進むたびにガスの濃度が濃くなってるのが……。」

「バキュームがいつぱいだ！」

「ハア！？まだ、1メートルと進んでないぞ！」

「きつとナビロイドが近くににいるんだよ。私、見てくる。」

そういい、エンジェルは飛んでいった。

しばらくすると、あわてたようなそぶりで戻ってきた。

「ファイターマン！これ以上危ない目に遭いたくなかったら、すぐにプラグアウトしろって！」

「どつする？秀。」

「ここまで来たからには引き返すわけには行かないよ。ガスマスクをつけて、強行突破だ！」

「よーしー！」

俺は、再びガスマスクをつけ、毒ガスの中を強行突破する。

「んー、マスクつけないよりはましだけど、体力がどんどん減ってきてる。」

「何！？秀！突破したら回復形のチップくれ。」

「分かった。」

しかし、進むたびだんだん息苦しくなってきた。

「どンドンガスが濃くなってきた……。」

「バトルチップ！フウジンラケット！スロット・イン！」

そして、毒ガスを一掃した。まったく、最初からこうすりゃよかった。

「やっと、一掃したぜ……。」

「ファイターマン、おつかね。リカバリアロー！」

すると、エンジェルが俺に矢を放った。すると、肩にちょっと痛みがきたが、すぐに力がわいてきた。言い忘れたが、エンジェルは弓矢で攻撃したり、体力を回復させたりしてくれる。

「これはこれは、裏切り者のファイターマンじゃないか。」

「あれは……。」

そこには、ガスマスクをつけたネットナビがいた。そして、手には毒が入っていきそうな薬の入れ物を持っていた。こいつは、俺が属していた組織の幹部の一体、ポイズンマンだ。ポイズンとは、毒のことである。中学生とか高校生なら、分かるよな。

「秀！」

「やるよ！つかさ姉ちゃん！」

「バトルオペレーション！セット！」

「イン！」

第7話 盗まれた薬 4（後書き）

ちょっと話はそれますが、妃龍 麗さんと僕は同じ高校に通う同級生です。

さて、前の続きですが。キャラクターに声優をつけるならどうなる？主人公たちのネットナビはこうなります。

ファイターマン 山口勝平

フェアリー 野川さくら

エンジェル かないみか

どうですか？

第7話 盗まれた薬 5

「バトルオペレーション！セット！」

「イン！」

毎度おなじみこの掛け声でバトルは始まる。今回は、俺が属していた組織（組織名は言えないが）のポイズンマンが相手だ。

「ポイズンフラスコ！」

それは、エンジェルに向かって飛んでいったが、何とかかわしていた。

「気をつける！奴が繰り出す攻撃に当たったら、一巻の終わりと思え！」

「ええ！？」

「さすがは、元メンバー。だが、ナビロイドワクチンを打たれた私にとっては、お前なぞ敵ではない。」

「ナビロイドワクチン！？」

「だけどやるよ、ファイターマン！やると決めたらとことんやる！それが、僕のモットーだ！」

今決めたモットーじゃないか？と言いたかったが、黙っておくことにした。

「いくぞ！エンジェル！」

「いくよ！つかさ姉ちゃん！」

「「よーし、行くぞー！」」

「フツ、小ざかしい真似を……。」

「バトルチップ！」

「遅い！ポイズンフラスコ！」

しかし、俺は寸でのところで、攻撃をかわした。

「掛け声出さずにチップを送ってくれ。」

「掛け声言わないと、気がすまないの。僕は。」

「今度は私の番だよ！サンシャインアロー！」

しかし、エンジェルの攻撃はかわされてしまった。

「ポイズンガス！」

すると、ポイズンマンが反撃してきた。

「バトルチップ、トップウ！スロット・イン！」

つかさも、負けじと攻撃を仕掛けた。トップウで、突風を起こし攻撃を逆に利用するって言う手か。ん？待てよ。

「やつは、毒に対する免疫は万全だ！だからトップウをやっても無駄だ！」

「でもやってみなきゃ、分かんないよ！」

そして、突風が起こりポイズンガスが戻っていく。

「これで逆ダメージだ！」

しかし、つかさの考えは甘かったらしい。やつは、ノーダメージだ。やっぱりな。

「ポイズンフラスコ！」

「バトルチップ！カーシールド！スロット・イン！」

なるほど、攻撃を衝撃波にして、反撃する作戦か。

「うっ！」

「よし！効いたぞ！行くぞ！」

「フルシンクロ！」

そして、俺と秀は一心同体になった。

「バトルチップ！サイコブレード！スロット・イン！」

「ああああー！！！」

よーし！行くぞー！

ズバツ！

「やった！つて、あれ？」

そこにあっただのは、変わり身だけだった。

「まさか、カワリミか！？」

「ポイズンガス！」

「うわあああ！！！」

フルシンクロは、俺たちの力が最大まで発揮される反面、俺のダメージは秀のダメージにもなる。

「おい、秀！大丈夫か！？」

「う……。僕は平気だ……。今のダメージで、とって置きのチップがあるのを思い出したよ。」

「フツ。人間の操り人形になって以来、たいした事なくなってるな。ここが、貴様の墓場だ！ポイズン」
カチツ

今の効果音は、秀がPETにバトルチップを挿した音だ。今までなかったのは、掛け声でかき消されただけだと思ってほしい。

「グツ！」

「秀！何をしたんだ！？」

「詳細は後！反撃のチャンスだ！バトルチップ！サイコブレード！スロット・イン！」

「でああああ！」

「グッ！」

よし！これは効いたぞ！しかも、属性の関係でダメージは大きい！

「さあ、私もいくよ！サンシャインアロー！」

「ぐああああ！……！」

そして、ポイズンマンは倒れた。すると、聞き覚えがあるなぞの男の声が響いた。

「引け！ポイズンマン！」

「いたかしかあるまい。いいか、われわれは必ず貴様をデリートする。覚えてろ！」

そういい、ポイズンマンは、プラグアウトした。

「逃げられちゃったね。」

「ああ。あ、バトルチップ。」

バトルチップには、ポイズンフラスコと書いてある。

「ホワイトチップ！スロット・イン！」

そして、僕は新しいバトルチップを手に入れた。

「プラグアウト！」

そういい、僕たちはそれぞれのナビをプラグアウトさせた。

「ふー、今日はいろいろありすぎた日だったな。」

「そうだね。」

すると、仮眠室から声がした。

「うーん、今何時？」

「渥美姉ちゃん！」

「なんか、デスクのほう騒がしかったけど、何かあったの？」

「またインターネットにナビロイドが出たよ。」

「でも結局、薬のことはわかんなかったね。」

「うん。まあいいよ。ボクのプロッピーに、薬のデータが保存されて、盗まれた薬のレシピもあるから。それでまた、調合するよ。」

そして、その後はゆっくりと平和な時間ときが過ぎ、一日が終わった。

「なあ秀。何のバトルチップ使ったんだ？」

「カウンターだよ。敵が攻撃する直前に使つと、^{おの}自ずとカウンター状態になるんだ。」

「まもなく、辰ノ町です。」

今日は早く寝よう。今日はいろいろありすぎた一日だったな。

第7話 盗まれた薬 5 (後書き)

次回予告

ファイターマン なあ、秀。RIOって知ってるか？

秀 うん。最近話題のジュニアアイドルだろ？

ファイターマン それが今日ドラゴンシティに来るってよ！

秀 フーン。

ファイターマン フーンって、もっとオーバーに驚け！

秀 僕、そういうほうじゃないし。渥美姉ちゃんは無駄に盛り上がってるし。

秀・ファイターマン 次回、ジュニアポリス。ジュニアアイドル、
RIO^{リオ}登場！

秀 次回も

ファイターマン 読めよな！

秀 感想、待ってるよ！

第8話 ジュニアアイドル RIO登場！ - 1

「待てー！逃がさないぞー！」

僕は、エレキタウンで事件を目撃し、犯人を追っていた。罪名は、食い逃げ。犯人は高原渥美。別に渥美姉ちゃんが犯罪を犯したわけじゃない。追跡の訓練中なのだ。僕と渥美姉ちゃんは、JPではベテランとはいえ、訓練を怠るわけには行かない。要は、訓練をつんでもずっと使えないでいると、いざというときのために対応できないっていうからね。

「待てー！犯人！」

「待てといわれても、犯人は待つてくれないわよー！」

僕は、全速力で犯人役の渥美姉ちゃんを追っていた。

それから数十数後。

「くっそー。見失っちゃまった。」

気がつくくと、僕はドラゴン川の土手に来ていた。ここは、シティの癒しの場所とも言われ、ランニングの人やサッカー・野球クラブもきている。

「渥美はどうすんだ？」

「ま、時期に見つかるだろ。しばらくこの辺でもぶらぶらしよう。」

しばらく、僕は歩いてみると、ベンチに腰掛けている少女に気がついた。彼女は琴を弾いている。

「……………」

僕はその琴の音色に聞き惚れてしまった。しかも、不思議な音色をされていて、僕を呼んでいるようだった。ほかの連中は、その音色はただの音にしか聞こえていないようだった。

僕は何かに引つ張られるように彼女の元へフラフラと引き寄せられてしまっていた。別名、マーメイドの歌声と言っても過言じゃない。フツと我に帰った僕は、気がつくやと彼女のすぐ隣に座ってしまっていた。しかし、何かを悟った僕は、すぐにベンチを立った。

「帰るか。」

「待つて。」

その少女が僕に声をかけてきた。

「私は、普段ここで琴を弾いてるんだけど、ここまで聞き惚れてくれたのは、君が初めてだよ。」

「僕が？」

「最近の人間は、せっかちに動くって言うけど、君は例外みたいだね。続きを聞かせてあげるね。」

しかし、僕は仕事で外出しているのだ。

「ごめん、聞きたいのは山々だけど、そろそろ戻らないと。」

「君も大変なんだね。じゃあね。」

「ああ！」

そして、僕は町へ戻っていった。すると、話し声が聞こえてきた。

「なあ、聞いたか？このドラゴンシティにリオが来たってよ！」

RIOといえは、ニホン中で今、大ブレイク中のアイドルのことだ。まあ、渥美姉ちゃんも熱狂的なファンってわけで。これ、前にも言ったかな？あ、昼飯の時間だ。早いとこ戻ろう。

第8話 ジュニアアイドル RIO登場！ - 2

帰った後、犯人役の渥美姉ちゃんを取り逃がしたことで、僕は水原さんにこっぴどく叱られた。しかも、僕は昼食は抜きになった。

「どうする？秀。」

「コンビニ弁当にしよう。」

僕がコンビニに向かって歩いていった。しかし、コンビニに着くと、たくさん警官と数台のパトカーがいた。警官の一人に見覚えがある刑事がいた。

「高木刑事！どうしたんですか？」

「やあ、秀君。実はさっき、このコンビニで、盗難事件が発生したんだ。今、みんなが捜査に当たっている。」

「……………。こりゃあ、入れる雰囲気じゃないな。ファーストフードに行こう。」

まったく、最近物騒になってきたもんだな。

「はあー。」

僕は、水原さんに説教されたのを思い出すと、ふとため息が出た。

「ん？」

街をよく見ると、あちこちに「RIO」のポスターが張ってあった。

あの、RIOがドラゴンシティにやってくる！

8月5日 AM11:00～PM01:00 前売り券、発売中！

「RIOのライブにでも行って、心を癒すか。そっいや、今日何日だ？」

「8月3日。」

そして、一時間後。

「何とか、前売り券は取れたな。」

「うん。飯も食ったし。かえって仕事せんと。あと、前売り券のことは、ちくるなよ。」

「言われるまでもないぜ。」

そして、僕はオフィスに帰っていった。

「どこ行ってたの!？」

入るなり、水原さんから雷がとんだ。

「外へ頭冷やしに行っていました。」

「さっき、特別な仕事があるって知らせたのに!」

「特別な仕事？」

「あさっては何の日か知ってる？」

「原爆の日？」

僕は、わざとボケた。

「それは明々後日。8月5日よ。」

「あ、RIOのライブですか？」

「そう、その会場の警備員を行うの。あなたは、観客を誘導して。」

「あ、はい！」

そうだった僕だったが、心の中では残念な気分になった。

「水原さん、秀君が何か残念な気分になったみたいです。」

突然、春香さんが口を挟んだ。また、テレパシー使ったな。

「残念？どづいづこと？」

僕は、黙っていようと思ったが、一枚の紙切れを出した。RIOのライブ前売り券だ。

「これは、預からせてもらいます。ゼニーは後で返すから。」

「はい。」

チケットは、没収されてしまった。もったいねー。

「じゃあ、あさつてはよろしくね。」

「くくくくはい!」「くくくく」

「。。。あ、はい!」

「返事に間が空いたけど。。。まあいいわ。今日は解散!」

そして、全員帰っていった。しかし、僕はトボトボした気分だった。

電車に乗っていても、その気分は晴れなかった。

「秀、そんながっかりした顔で、警備員やつても、お客さんも暗い気分になるわよ。」

「でも。。。前売り券が。。。」

「警備しながらでも、歌声は聞こえるでしょ。」

「まあ、そうだけど。。。」

そして、僕たちはいつものように家に帰ってきた。

「そうだ、RIOのDVD見る?」

「うん。」

渥美姉ちゃんが、デッキにDVDをセットすると、RIOのライブ

が始まった。

「いつ見てもサイコー！ね！秀。」

「え？あ、うん。」

前にも行ったとおり、僕はRIOの話題にはついていけない。でも、DVDを見ているうちに、僕は自分の悲しみを忘れてしまった。あさっては、がんばるぞ！

第8話 ジュニアアイドル RIO登場！ - 2 (後書き)

感想、待ってます。

あと、矛盾があったら指摘しても結構です。

第8話 ジュニアアイドル RIO登場！ - 3

8月5日。午前9時30分。

いつものようにラジオ体操と朝食を追い、僕たちはドラゴンホールへ向かった。ホールといっても、穴のホールじゃないよ。集会場とか劇場のほうのホールだからね。

「お客さん、いっぱいだね。」

「うん、RIOのライブだもん。」

そして、お客さんが入ってきた。

「はい、一列に並んで、押さないで。」

「順番守ってね。」

しばらくして、全員が席に収まると、すでにRIOコールが響いていた。

「さすが、ニホン大ブレイクのアイドルだな。」

しかし、ある人の一声でこの騒ぎが収まった。

「申し訳ございません。RIOは過労で倒れ、緊急入院しました。よって、今日のライブは中止とします。RIOが回復したら改めてライブの告知を行います。」

「……………中止だつて。」

僕は中に入ってみると、ステージには一人の男性がいた。この人は、RIOのマネージャーだ。

「来て損した。帰ろう。」

「うん……………」

全員、残念そうな顔で帰っていった。

僕は、日ごろの疲れを癒すため、またドラゴン川沿いに来ていた。

「やっぱり河川は気分がいいな。日ごろの喧騒を忘れさせてくれるよ。」

「本当は、中止になって残念なんだろう？」

「まあ、それもあるけど。」

すると、茂みから一人の少女が出てきた。

「あれ？君はこの前の……………。私を、どこかに匿って！」

「え？」

「私、帰りたくないの。」

僕は、その人に見覚えがあった。ポスターであったRIOだった。間違いない。

「もしかして君、RIO?」

「そうだよ、吉山リオ。」

「過労で倒れたんじゃないの?」

「それは、みんなを撒くための嘘だよ。」

「でも、何でライブなんてやりたくなかったわけ?」

するとリオは空を見上げていった。

「マネージャーさんは、私を金儲けの道具にしてるの。活動のギャラのほとんどは、マネージャーさんに取られてるわ。」

「……………」

「おねがい、私を人目のつかないところに連れてって……………」

「でも、そのままいくとRIOってばれない?」

「大丈夫。」

そして、リオはかばんから伊達眼鏡をだした。そして、髪を縛り、服を上から来た。

しばらくすると、リオは完全に変装していた。RIOの面影はどこにもない。しかし、その姿は一昨日見た少女そのものだった。

「これ、町を歩くときに使ってるんだ。こつすれば、誰も100パ
ー気づかないから。」

「……………本当だ。隠れるといえば、いいところがあるけど。」

僕は、取って置き場所を知っていた。

僕とリオは、警察署内の子供課に来ていた。

「水原さん、この人。家出したらしくてここに一日泊めてほしいっ
て言うんです。」

「だめですか？」

「んー。ダメとは言わないけど私も昔、秀君と同じくらいの年に、
何回も家出したことがあったわ。だから、いいわよ。」

「ありがとうございます。」

「じゃあ、僕はタウンのパトロールに行ってきます。」

僕は、パトロールに出かけた。今日も異常がなければいいんだけど。

僕はタウンのパトロールをしていた。一昨日事件があったコンビニ
はすでに落ち着いており、普通にお客さんがいる。僕は、アンパン
とパック牛乳を買った。警察には、このセットはつき物だよ。あ、
つき物はJPバッジか。でも、周りからは薄給とささやかれるけど、
渥美姉ちゃんのおいしいご飯が食べられるから気にしない！

「今日も異常なしと。」

すると、一人の男性が走ってきた。

「あ、RIOのマネージャーさん。どうしたんですか？」

「君、この辺でRIOを見なかったか？」

「見てません。」

「そうか、RIO!どこだ!?!リオ!」

帰ってリオに報告しないと。そして、警察署へ戻っていった。

「リオ!ちょっと話があるから屋上に来て。」

「え?何なの?」

僕は、リオを連れ署の屋上に向かった。

「実は、今この辺に君のマネージャーさんが現れた。君を連れ戻しに来たみたい。」

「え?戻るなんていやだよ……。」

「僕だって、好きでJPやってるんじゃないんだ。でも、何でさっきは過労って嘘ついてやすんだの?」

そして、リオは静かに語りだした。

「私の家には、病気のお母さんがいるの。お父さんとはうまくやっていけなくて離婚して、お母さんと家を出たんだ。だけど、ある日お母さんが病気で倒れたの。でも、うちは貧乏だから入院のお金は稼げなかった。ある日、分かれたはずのお父さんから小包が来たの。それが、この琴だよ。そして、この琴を使い、お琴アイドル・RIOとして、活躍を始めたんだ。でも、回りからの期待がプレッシャーに変わって、演奏や歌もうまういかなかったの。だから、今はもうやめようと思ってる。」

「……………。気持ちは分かんないまでもないよ。僕の昔の友達に」

「そっちは立ち入り禁止です！」

「うるさい！どけ！」

「「「？」」」」

バン！

「「「！」」」」

そこにきていたのは、リオのマネージャーだった。もう僕はお終いかも…………。

「貴様！こんなところにリオを匿っていたとはな！」

「リオには手を出すな！」

ゴン！

しかし、僕はレンガで頭を強く殴られた。そして、そのまま気を失

ってしまった。

第8話 ジュニアアイドル RIO登場！ - 3 (後書き)

何か、変な終わり方になっちゃいました。

さて、この間の続きですが、キャラクターに声優をつけるとどうなる！？

種山春江 神代 知衣

東山春香 野中 藍

橋本恵子 石川 綾乃

どうですか？この人にはこれだ！ってのがあったら、感想欄か、メッセージで送ってください。

第8話 ジュニアアイドル RIO登場！ - 4

それは、一瞬の出来事だった。僕はレンガで殴られたかと思うと、言うまでもないが頭を激しい激痛が襲った。そして、そのまま意識が遠くなった。

その光景を垣間見た俺は（つーかPETについてる小型カメラで見てるがな）言葉を失った。実体化して反撃といきたいが、秀はコピーロイドも持っていない。しかし、JPに支給されるコピーロイドは階級がジャック以上にならないと配備されない。店で売ってるやつは相当な値段で秀たちにとっては、指先でしか触れる程度ではない。

「おい！秀！しっかりしろ！秀！」

すると、マネージャーは秀に手を伸ばした。俺は、秀の手を借りパUNCHで撃退したのだが、簡単につかまれた。しかも、動けないようにされ、しかも空いた手で、PETに手を伸ばした。

「やめろ！電源を切るな！」

「黙れ！」

俺の声は聞こえていないらしく、そいつは電源を切っちまった。ブチッ

そこで、俺の意識も途切れた。つまり、俺たちネットナビとPETは、一心同体なのだ。

私は、見てしまった。助けてもらった恩人を、マネージャーさんが

殴り気絶させてしまったところを。その矛先は、私にも向けられた。

「さあ、帰るぞ！ 侘びをして、ライブをはじめるんだ！ お前がいないと、私は飯が食えないんだよ！」

「嫌だつて言ってるでしょ！」

そう言い、私は逃げ出した。

それから、一時間後。

「うーん、今何時？」

あれ？ おかしいな。普段ならファイターマンが、「何時何分だぜ。」つて教えてくれるはずなのに。

まさかと思い、PETをみると、電源が落ちていた。そして、僕はスイッチをいれ、電源を入れた。電源を入れると、ディスプレイにIPC（伊集院^{いじゅういん}ペットカンパニー）の文字とロゴが写った。つてか、PETはほとんどIPC社が作ったただけだね。

「おい、電源を切るんじゃない！」

「落ち着け！ もう電源は入ってるぞ！」

その一声で、ファイターマンは落ち着いた。

「で、今何時？」

「13時10分だぜ。」

「……………帰って寝よう。」

僕は、メトロに乗り辰ノ町へ帰っていった。

「ただいまー。」

「どこブラブラしてたの!？」

「ごめん、ゲーセンに行ってた。」

そして、僕は部屋に行こうとしたとき、つかさ姉ちゃんに呼び止められた。

「秀君!その頭、どうしたの!？」

「……………実は、RIOにそっくりな女の子と話したら、マネージャーさんにRIOに手を出したって、誤解されて思いつきり殴られた。」

「ほんと、あきれるわね。人違いなのに。RIOはあくまで病院にいるんだから。部屋に来て。」

渥美姉ちゃんに言われるがまま、僕は姉ちゃんたちの部屋に入った。姉ちゃんたちの部屋に入る機会なんて、ほとんどない。

渥美姉ちゃんは、救急箱を持ってきていた。

「ちょっと頭見せて。」

僕は頭を差し出した。

「その傷、素手で殴られた傷じゃないわね。」

「うん、レンガで殴られ気絶させられた。」

「まずは、消毒しないと。」

渥美姉ちゃんは、消毒液を傷口に吹き付けた。でも、すごい痛い。

「いてっ!」

「男の子なんだから、これぐらい痛がらないの。」

(子供の怪我を治療する母親か。)

それでも、頭に絆創膏が貼られ、治療はすぐに終わった。

「宿題でもやって昼寝するかな。」

「お昼ご飯まだでしょ?」

「あ、そうだった。」

「今日は素麺よ!」

「やった!」

そして、にぎやかな昼飯も終わった。さて、宿題でもやるかな。でも、また傷口がズキズキする。

それから、20分後。

「今日はこれくらいにして、昼寝しよう。」

そっぴい、ベッドに寝転んだとたん……。

PPPPPP!

「ん？電話だ。」

ピッ

「はい。」

「君、さっきの続きだけど。」

「うん。」

「さっき言いかけてたことは何？」

なんと、RIOこと吉山リオ本人から電話が来ていた。

「あのとき、言いかけてたことは、僕の昔の友達に今は故人の上原州って言う人がいたんだ。その人は、ひどいいじめを受けていて、唯一の友達が僕だったんだ。だけど、ある日を境に彼は忽然と姿を消しちゃった。家庭の事情で家を出ちゃったみたいなんだ。」

僕は、高原秀と上原州はあくまで、他人のように振舞っていた。

「多分、ニホンには彼と同じような人がたくさんいる。君もその一

人かもしれない。自分の活動のギャラを（ギャラって何だっけ？）とられて周りからのプレッシャーに押されて活動に疑問を持っている。違う？」

「全部あつてるけど・・・。」

「活躍しなくなかったなら、無理して活躍しなくてもいいよ。死んだ母さんも行つてた。「無理に物事を行うと悪化する」って。」

「勇気のことばをありがとう。」

「どういたしまして。」

「あ、そうだ。マネージャーさん逮捕されたって。人に怪我をさせた罪で。」

「そりゃ、当然だろうね。で、帰るのはいつ？」

「あさつてのNHSRで。13時発の、みらい224号で帰る予定だよ。明日、午後1時にライブを行うことにしたから、来てね。」

「うん。そうだ、見送るときいいもの渡すよ。」

「期待してるよ。あ、すぐ行くー！ごめん、電話切らないと。」

ブツッ

電話は切れてしまった。

「秀、渡すものって何だ？」

「言ったら面白くないよ。あー頭がズキズキする。寝よう。」

そして、PETをスリープモードにして、ベッドに寝転んだ。そして、眠りについた。頭痛い……。

第8話 ジュニアアイドル RIO登場！ - 4 (後書き)

キャラクターに声優をつけるとどうなる!?

リーフマン くまいともこ

ウイングマン 伊藤健太郎

スプラッシュウーマン ゆかな

ほかに、このキャラクターにはこれだ!と思う人がいたら、感想欄に書いてください。

第8話 ジュニアアイドル・RIO登場！ - 5

そして、8月6日。午後12時25分。一昨日と同じドラゴンホールでライブが始まった。しかも、リオは僕のために最先端席をとってくれていた。JP達には夏風邪と説明している。

ライブが始まる30分前にもかかわらず、会場は満席だった。二ホン全国で大ブレイクしてるから無理もないか。

5分前になり、会場にはRIOコールが響き渡った。

そして、開始時間になった。そこまでRIOコールは止まなかった。そして、プシュー！と蒸気が出たと思うと、RIOが登場した。

「みんな！こんにちはー！」

「イエー！」

「今日はこのライブに来てくれてありがとうー！じゃあ、一曲目、行くよー！」

「ワー！」

そして、2時間に渡りライブが行われた。それまで、フィーバーがさめることはなかった。

そして、翌日RIOが帰ることになった。僕は、ドラゴンステーションのNHSRホームで、リオを見送ることにした。

「はい、これ。」

「これは？」

「僕の財産の一部。これを入院費に使って。」

「こんなにいいの？」

「うん。」

僕の小遣いは、渥美姉ちゃんから毎月500ゼニーもらっている。ほとんど使わず貯めていたため、結構なお金になっている。ちなみにゲームは、渥美姉ちゃんが買ってきたものをたまにやっている。ちなみに、お金はJ.Pの給料でもらったり、J.Pのミッションを終えた後依頼主から報酬としてもらって稼いでいる。そして、姉ちゃん達の祖父から年金の一部を仕送られ、それを家計にしている。

「ありがとう。君のことは忘れないよ。」

「うん。僕も君を忘れない。」

すると、ホームにアナウンスが流れた。

「お待ちせいたしました。まもなく、5番線から、みらい224号。デンサンシティ行きが発車します。ドアが閉まります。ご注意ください。お見送りの方は、ホームドアの内側までお下がりください。」

「じゃあね。」

「うん。」

そして、列車のドアが閉まった。そして、静かに駅を離れていった。

「渡したのってあれか？」

「うん。小遣いの一部を使って、入院費に宛てたんだ。」

「リオのお袋、直るといいな。」

「うん。」

そして、僕は空を見上げた。

「お袋……か。」

そういえば、実家の母さんは元気だろうか。僕が死んだと思っているかもしれない。でも、連絡をするわけにもいかない。

「さ、帰ろう。」

僕はブツブツいい、ホームを離れていった。ちなみにNHSSRは、3種類の列車があり、速達タイプのきぼう、急行タイプのみらい、各駅停車のひびきがある。さて、帰ったら宿題済ませないと。

第8話 ジュニアアイドル・RIO登場！ - 5 (後書き)

ファイターマン 秀、昨日はすごかったな。

秀 うん。あの声援は今も僕の耳に焼きついてるよ。

ファイターマン 昨日のテレビ見たか？

秀 うん。100年前の惨劇だろ？

ファイターマン 言うまでもなさそうだな。

秀・ファイターマン 次回、ジュニアポリス。番外編、100年前の惨劇。

ファイターマン 次回も

秀 読んでね！

番外編 100年前の惨劇(前書き)

実際に起こった出来事を、ロックマンエグゼの世界のようになっています。

番外編 100年前の惨劇

8月6日、午前8時。高原家・リビング

僕たちは、朝食を終えテレビを見ていた。さて、今日は何の日でしょうか？そう、原爆の日である。え？誰も聞いてない？あ、そう。そろそろ時候かな。約100年前の同日、アトミックシティに原爆が投下されたのだ。テレビにはアトミックシティの映像が映っている。無論、生中継だ。

「行ってみたいな、アトミックシティ」

「秀の受験が終わって高校生になったらね。」

「うん。」

アトミックシティの平和記念公園がテレビに映っている。その向こうには原爆ドームが見える。モデルの場所は読者の君ならもう分かるよね。君たちの世界の町の名前はどんなものがあるかは知らないけど……。

「黙祷！」

すると、アトミックシティの住民全員が黙祷をしていた。時計を見ると8時15分だった。そう、この時間帯が時候なのだ。戦争を知らない人々でもこの黙祷は変わらないのだ。すると、映像が変わった。しかし、映像は相当ぼやけていて、白黒だった。それもそのはず、この映像は100年前に撮られたものであるから無理もない。映像に映っているのは、当時のアトミックシティだ。

「今からおよそ100年前、このアトミックシティは太平洋戦争の真っ最中でした。毎日のようにアメリッパ空軍のB-29がやってきて空から爆弾を落としていました。全国の人々は戦争に借り出され、子供たちは国民学校で戦争の訓練。国民学校とは今の小学校のことです。」

また映像が変わり、100年前の全国が表れている。ナレーションでもあるように、人々が汽車で戦争に赴く映像や子供たちの訓練の映像も流れている。あの時代に生まれてなくてよかつたなと思う。まあ、映像に映っている人々は今は全員故人だけだね。

「そして、194X年。同日の8月6日、午前8時15分。原子爆弾が投下されました。」
ドカーン！

「！！！！」

テレビを見ていた僕たちも相当驚いた。こんな光景は、見たこともない。歴史のテキストファイルでしか見たことがない原爆の映像が、テレビに映っていた。(白黒なので分かんないけど。)

「そして、町は一瞬で廃墟になり人々は死に、生き残った人も当時の医学では治療不可能だった病気にさらされ、次々と死んでいきました。それから、3日後のサキナガシティにも原子爆弾が投下されました。そこも、アトミックシティと同じ被害をこうむり、ニホン軍は最後の一人になるまで戦うとっていました。これ以上犠牲者を出したくないという意見の元、ポツダム宣言を受け入れ8月15日。ニホンは降伏し、戦争が終わりました。」

大昔、こんな惨劇があつたなんて・・・。当時を知らない僕にとつてもその時代に行つた気分だつた。

番外編 100年前の惨劇（後書き）

ファイターマン そういや、前に新しいやつが出てたな。

秀 うん。みんな、次回はこれまでのキャラクター紹介だよ。乾燥、
じゃなかった。感想や評価も待ってるからね。

キャラクター紹介 - 6

人間

よしやま

吉山リオ

ニホンを代表するジュニアアイドル。芸名・RIO。歌が大好きで、病気の母親のために活躍しているが、ギャラの一部はマネージャーの食費にされている。また、周りからの期待がプレッシャーに変わっており、活動に疑問を抱いている。デンサンシティに帰った後は、しばらくの休止を、事務所に要求したらしい。一人称は「私」

ネットナビ

エンジェル

つかさのネットナビ。その名のとおり、天使の姿をしている。手持ちの弓矢で攻撃したり、仲間の体力を回復させたりしてくれる。一人称は「私」主な技は、サンシャインアロー。リカバリーアロー。ポイズンマン

ファイターマンが属していた組織の幹部のネットナビ。名前のおおりに、毒で攻撃する。オペレーターは彼の毒性を強めるために、つかさの薬部屋から薬を盗み出し、毒性を強めた。しかし、ファイターマンにとっては相手ではなかったらしい。

キャラクター紹介 - 6 (後書き)

ファイターマン おい、秀！おきろ！

秀 ー、まだ5時じゃないか。

ファイターマン もう6時だぞ！

秀 ー。

秀 渥美姉ちゃん。今何時？

渥美 7時。

秀 どれが正しいんだ！？ってか、時の流れって止まんないね。
渥美 そういえばそうね。

秀・ファイターマン 次回、ジュニアポリス。時の狂い。

秀 次回も

渥美 読んでね！

第9話 時の狂い 1

時は、永遠にとまることはない。人はみな、時の流れに身を任せている。時の流れを先に行ったり、逆に向かうことは不可能なのだ。でも、時計は止まる。それでも時の流れは止まらないものだ。

「秀一！起きなさい！」

「んー、後五分・・・。」

「後五分って、10分前にも言ったでしょ！今日は補修でしょ！」

「んー、今何時？」

そうつぶやき、目覚まし時計を見た。目覚ましは、デジタルの数字も写っていない。故障か？

「ファイターマン、今何時だ？」

「8時。」

「なんてこった！遅刻だ！」

僕は、瞬時に制服に着替え、リビングに向かった。そして、トーストを銜えて、家を出た。なんか、漫画みたいな展開だな。

「遅い！」

スカイロビーに着たが、なかなかエレベーターが来ない。僕は、非

常階段で下りることにした。

「でも、遅い。こうなったら。」

僕は、かばんからジェットパックを出し、背負った。

「無限のかなたへさあ行くぞ！」

「なんか、昔の映画みたいだな。」

そして、JPバイザーを掛け、スイッチを押した。

非常階段からジェットパックを背にしたまま飛び出した。しかし、24階から飛んだので、地面からは相当高い。ここで、エネルギーが切れれば最悪だ。ちなみに、エネルギーは電気であり、コンセントから充電する。

「これで、早くいけばいいんだけど。」

文字通り、学校には10分で着いた。どれだけ早いのかは、聞かないでほしい。ダッシュで校門をとり、靴を履き替え自分の教室へ向かった。

「セーフ！」

「アウトだよ！」

「え？」

時計を見ると、10時になっていた。どうなってるの!？

「さつきから何なんだよ。時計があちこち狂ってるよ。」

「それは、私が聞きたいね。」

「ファイターマン、今何時だ？」

「8時20分。つか、時計の流れ、全部めちゃくちゃになってないか？」

「うーん。僕の目覚まし時計は、故障かな？」

そして、補修が終わった。僕は、ドラゴン学園前駅に来ていた。時計は、11時25分を指していた。鉄道の時計はずれることはない。僕は、117に電話をかけた

「まもなく、午前11時25分。30秒をお知らせします。」

そんな無機質な音声がPETから聞こえてきた。

「まもなく、1番線にドラゴンステーション行きが参ります。ホームドアより内側までお下がりください。」

そして、ホームに滑り込んできた電車に乗り込んだ。

しかし……。辰ノについたとき時計を見ると、1時調度になっていた。

「どうなってるんだ!？」

僕は時報にリダイヤルした。

「まもなく、午前11時58分をお知らせします。」

僕はすぐさま家に帰った。

「もう！一体全体どうなってるんだ!？」

「秀！さっきニュースで見たけど、二ホン中で時間が狂ってるらしいわ!」

「ええ!？」

渥美姉ちゃんは、録画していたニュースの一部始終を見せてくれた。

「二ホン中で、時計が狂っている件ですが、これは今朝から始まっていることが専門家の調べで分かりました。インターネットから時計の電腦に何者かが侵入し、すべて狂わせており、二ホン中で混乱が発生しています。警察は、現在無事な時計を調べ、犯人の追跡と逮捕に当たっています。」

「ここだけじゃなかったんだ!」

衝撃的なことが起こっていた。

「タイムマン……。」

「え?」

「タイムマン……。そいつの仕業だ。」

タイムマシンって、誰だろっ？

第9話 時の狂い 2

その日の夜、僕はファイターマンに聞いてみた。

「ファイターマン。タイムマンって誰？」

「俺が属してた組織の幹部の一人だ。時を操る力がある。そして、その力は現実世界の時計を狂わせちゃうんだ。」

「そいつが……。」

「言っておくが、俺はあいつと戦うのはごめんだ。やつは、あのお方の右腕だ。」

「あのお方？」

「俺が属してた組織のボス。とだけ、言っておこう。」

僕は、これ以上ファイターマンに質問しないほうがいいと悟った。

「もう寝よう。」

次の日。

時計はやっぱり壊れていた。

「昨日、店に持ってったけどあそこじゃ直せないみたい。たしか、冠来ニュータウンに時計専門店があったはずだから、そこで直してもらおう。」

僕は、冠来ニュータウンに向かった。そういえば、シティの北部に行くのは図書館以来だったな。（わかんない人は、第三話を見てね！）

僕は、地下鉄に乗り冠来ニュータウンへ向かった。

それからしばらくして。

「まもなく、竜岡町です。」

そろそろかな、と思ったら急に外が明るくなった。そして、スピードが落ち始めた。外には石垣が見えている。そして、竜岡駅に止まった。そう、ここからは地上を走るのだ。ここに来たのは、あの時以来だったな。（第4話を読んでみてね！）

そして、竜岡高校入口駅に着いた。そこから、補修を終えたかと思われる学生が乗り込んできた。右側を見ると、竜岡高校の校舎と敷地が見えた。相当広いな。

「無駄にでかすぎだろ。」

「まあ、そう言うなって。あの学校、たくさんの学科があるから。」

「そのとおりだよ。」

僕が後ろを見ると、一人の男子生徒が話しかけてきた。

「竜岡高校は、あんなに広いのには理由があるんだ。普通科はもちろん、特進科、書道科、商業科、農業科、工業科まであるからね。」

「な、なんか何でもありって感じがしますね。」

「そ、なんでもありってわけさ。」

「まもなく、高麗の杜です。」

「あ、僕はもう降りるよ。」

「さよなら。」

そういい、男子生徒は降りていった。しかし、僕は別に心配していることがあった。

「時間の流れ、大丈夫かな。」

そして、列車は冠来ニュータウンに到着した。ここがメトロの終点だ。ちなみに、竜岡高校前から、終点までは複線化の工事が急ピッチで進行中だ。

駅の時計を見ると、6時を指していた。やっぱり、時の流れが狂っているからかな。そして、僕は時計屋を探した。

そして、僕はひとつの商店を見つけた。看板には「谷口時計・売ります、買います、修理します。」と書いてある。おそらく、キャッチコピーだろう

「あー、すみません。」

「ワン！」

ポメラニアンが出てきた。おそらく、この家のペットだろう。

「どうかした？」

一人の男性が現れた。この谷口時計の店主だろう。

「この時計なんですけど……。」

「ふむう……。しばらく預かるう。君は、店の中の時計でも見ていなさい。」

「はい。」

僕は、時計の修理が済むまで店の中を見ていることにした。

第9話 時の狂い 2 (後書き)

キャラクターに声優をつけるとどうなる!?

訂正

スプラッシュウーマン 林原めぐみ

あの人は、似合いませんね。

第9話 時の狂い 3

僕は、店内を見渡したみた。店内には当然だが、たくさんの時計がある。置時計、腕時計はもちろん、掛け時計・今時では珍しい振り子時計もあつた。しかし、PETに時計機能がついているため、最近時計は珍しくなっている。でも、駅や学校内、会社の中では今も健在だ。もちろん、ドラゴンステーション前広場にあるからくり時計もちゃんと動く。ちなみに、エレキタウンには時計塔がありちよつどの時間になると、その時間の数だけ鐘がなる仕組みだ。ちなみに、クリスマスシーズンは、ベルの音になる。しかし、電池が入ってないためか、全部とまっている。

「ワン！」

「ダメでしょ！チャップ！」

すると、一人の少女が出てきた。あの子・・・、間違いない。谷口正巳だ！

「あれ？正巳さん！」

「あ・・・。あの時は、ありがとうございました。」

「おや、知り合いかい？」

「まあ、そんなところです。」

僕は、正巳さんに連れられ店奥の茶の間で話をしていた。

「秀さんは、JPに所属していらっしやるんですね。」

「ああ。この町は犯罪が多いから犯罪を撲滅させたいと思ってね。それに、困ってる人は放って置けなくてね。」

「私も困ってる人は放っておけないんですが……。この性格で声をかける勇気もないんです。」

「無理しなくていいよ。そういう性格は、ゆっくり直せばいい。」

「はい。分かりました。」

そついい、正巳さんは笑顔を見せた。男なら、それを見たら誰でも彼女に心を奪われそうな感じだった。しかし、僕の心はその程度ではゆがむことはない。

「時計直ったよー！」

「あ、はい！」

そして、僕は時計を受け取った。

「あのー、お代は……。」

「結構だよ。あの時、娘を助けたお礼さ。」

「どうもありがとうございました。さ、帰ろう。」

欄内ニュータウンは、小高い丘に沿って作られている。そのため、坂や階段が多い。

「多分、ここの連中は足腰強いかな。」

「かもな。野球部だったらいい練習場になりそうだな。」

「ははは。」

僕は苦笑いする以外ほかはなかった。

駅に着くと、案の定時計はやっぱり狂っていた。7時半を指していた。

「ファイターマン、何時？今？」

「五時13分。」

「え？まだ、外明るいじゃないか。」

「は？何言ってるんだ？」

「ファイターマン、テレフォンアクセスを。」

「どこにかけるんだ？」

「117。」

しばらくすると、PETから無機質な音が聞こえてきた。

「まもなく、午前11時45分20秒をお知らせします。」

ピピ。

「ファイターマン、君の体内時計もタイムマンにやられたんじゃない？」

「かもな。」

ピッ

改札をとおり、ホームに来た。ホームのデジタル時計を見ると、その時計は正常だった。

「とりあえず、あそこで待ち伏せしよう。」

「やりたくないが、背に腹は変えられないな。」

「プラグイン！ファイターマン！トランスミッション！」

僕は、時計にプラグインした。

第9話 時の狂い 3 (後書き)

キャラクターに声優をつけるとどうなる!?

水原直子 氷上恭子

谷口正巳 能登麻美子

訂正

ウイングマン 高木渉

皆さんはどう思いますか?このキャラクターには、これだ!とおもったら、感想科メッセージで送ってください。たくさんの応募、待っています!

第9話 時の狂い 4

俺は、駅にある時計にプラグインされた。その時計は、幸いまだタイムマンにはやられていなかった。

「で、これからどうするんだ？」

「ここで、タイムマンを待ち伏せするんだ。」

「あいつとは戦いたくないがな……。」

何回も言うが、俺はタイムマンには良い思い出なんかまるでない。どんな内容かは聞かないでほしい。

一時間経過したが……。

「ぜんぜんこないな。」

「うん。いつそのこと、次の電車で帰ろうかな。」

「ちょっと待て。何か近づいている気配を感じた。」

「え？」

僕は電光掲示板を見上げた。しかし、電車はまだ二つ手前の駅にいる。

「電車、まだ来ないみたいだよ。」

「いや。この気配……あいつか。」

そして、僕は恐ろしいことに気が付いた。

「ファイターマン！時計が！」

「は？早すぎてなんていつてるか分からん！」

「僕は普通の速さで話してるよ！」

時計を見ると、なんと！時計が早く流れているじゃないか！まさか、ファイターマンが言ってたタイムマンの仕業か！？

「プラグアウト！」

僕は、プラグインボタンを押しファイターマンをPETに戻した。

「秀！何があつたんだ！？」

「時計を見て！」

時計は早く動き、2時のところで止まった。

「よし！もう一回！プラグイン！ファイターマン！トランスミッシ
ョン！」

俺は、時計の中にプラグインされた。そこには、紫色のネットナビ
がいた。こいつが、タイムマンだ。

「見つけたぞ！裏切り者のファイターマン！お前が裏切ったせいで、

あのお方は相当怒っているぞ！」

「んなこた、知ったこっちゃねえ。」

「お前は組織に戻るんだ！」

「……………すこし、時間をくれ。」

「分かった。3分待ってあげよう。」

そして、秀に向かい合った。

「秀……………」

「ファイターマン。僕は、君と同じ気持ちだ。」

「ああ。」

そして、俺はタイムマンに近づいた。

「やっと戻る気みたいだね。」

「ああ。」

俺は秀を裏切り、組織に戻ることにした。

と見せかけ、おれはタイムマンの腹に掌底てのひらをぶち込んだ。

「「これが俺（僕）の答えだ！」」

「どうぞやら、戻る気はないみたいだね。なら、倒して決着をつけようじゃないか！」

「秀！」

「バトルオペレーション！セット！」
「イン！」

第9話 時の狂い 5 (前書き)

パソコンが故障して投稿が遅れました。

第9話 時の狂い 5

そして、俺とタイムマンとの戦いが始まった。

「5分で決着をつけるからね。」

「へっ！言ってくれるじゃないか！パワーショット！」

（でも、今回の敵は結構余裕みたいだな。ファイターマンもいやな奴って言うてたし・・・。）

攻撃は、あっけなく交わされた。しかし、奴は幹部だから無理もない。

「それなら、バルカンジャブ！」

これも、簡単に交わされた。

「まるで瞬間移動してるみたいだ。」

その瞬間、タイムマンが俺の背後に来た。

「クロックニードル！」

「ぐああああ！」

俺の体に、体が切れるような激痛が襲った。

「ファイターマン！大丈夫か！？」

「う……。俺はまだやれる。」

「おとなしくデリートされたほうが身のためじゃないのかい？」

「一度決めた道は、曲げずに突き進む！それが俺のポリシーだ！」

（今作ったような気がするけど……）

「それなら、僕もそれに答えるまでだ！バトルチップ！メガキヤノン！スロット・イン！」

「まったく、そんな高いチップを。あ、この間ウイルスバスターでゲットしたやつか。」

「食らえ！」

しかし、攻撃は簡単に交わされた。

「無駄だよ。そんなことで攻撃は当てられないね。さあ、今度は僕の番だ！クロックニードル！」

「バリア！スロット・イン！」

秀が送ってくれたバリアで何とか攻撃を防いだ。

「続けていくよ！バトルチップ！カウントボム！スロット・イン！」

カウントボムは、時限爆弾をセットし3秒立つと爆発する。

しかし、一瞬で破壊されていた。思い出したぞ！タイムマンは時間

を操れるんだった！

「さあ、お前の先行だ。」

「いくぞ！クロックニードル！」

（秀、あれを。）

（わかった。）

「バトルチップ！オジゾウサン！スロット・イン！」

オジゾウサンは、壊してはいけない地蔵をおき、壊すと罰当たりとして敵全員がダメージを受ける。そして、タイムマンがクロックニードルで、地蔵を攻撃した。

タイムマンは間抜けなことに地蔵を攻撃した。

ドカーン！

当然、罰当たりとしてダメージを受けた。

「うわー！」

俺が近くに来ると、タイムマンは倒れていた。

「……………様……………。申し訳ありません。」

すると、あのお方の声が響いた。

「引け！タイムマン！」

「ファイターマン！今日のところはこれで勘弁してあげるよ。でも、次はこうは行かないからね。」

「そういい、タイムマンはプラグアウトした。」

「うまく聞き取れなかったけど、倒れたときにタイムマンがつぶやいてたあのお方の名前は？」

「フツ。時期にわかるさ。」

いつになっても、ファイターマンは教えてくれない。あの組織のことを。しかし、わかっているのは一番上があのお方と呼ばれるネットナビ。その下に、幹部のポイズンマンとタイムマン。そして、戦闘員のヒールナビ。そして、ナビロイドとウイルス。せいぜいこれだけだ。

「あー、今日は一時間早く寝よう。」

「秀、あと2週間で休みが終わるが、宿題は？」

「あ……。忘れてた！」

天災は忘れたところにやってくるとは、まさにこのことだよ……。

その夜、ニュースで見たがニホン全国の時計は、正常に戻ったらしい。

「結局、犯人は見つからなかったんですって。」

「フーン。」

「秀、宿題。」

僕は、部屋に戻り宿題を進めた。多分、明日寝不足だな。

第9話 時の狂い 5（後書き）

秀 感想待ってるよ！

ファイターマン 送られない場合は、最悪更新やめるかもな。

次回予告

秀 夏だなー！

ファイターマン 夏といえばキャンプか？

秀 それもあるね。僕たちJPは、山の中へキャンプに出かけた。けど、そこでは、思いもよらぬ事件が！

秀・ファイターマン 次回、JPキャンプ。

ファイターマン 秀！また事件だ！

秀 よし！出撃！

第10話 J P キャンプ 1

夏休みも残すところ12日になった。僕は2日間、徹夜でやったので宿題はもう終わっていた。そういえば、ほぼ毎日任務ばかりで遊んでなかったな。そう思っていた矢先、春香さんから電話が入っていた。内容はJ P たちで、キャンプに行こうというものだ。

出発前日、僕は、リュックの中を見て持ち物の最終確認をした。

「僕の持ち物は、米・炭・飯盒だ。」

「いつの時代だよ。飯盒って。」

「炭火で炊いたご飯もうまいもんだよ。特におこげは最高だよ。」

「俺も渥美の飯食いたいぜ。はぁー。」

「ごめん、空しい気分になんか。」

プログラムは飯を食わないって言うけど、空気はどうやって取り入れてるんだろう。っていうか、P E T の中とか、電脳世界って空気あるのか？そんなどうでもいいことを考えていた。

「ほかは、渥美姉ちゃんは肉。つかさ姉ちゃんは野菜。テントは春香さん。か。」

「鉄板は向こうで貸してくれるらしいぞ。」

「うん。後は蚊対策だ。どこでもノーマットがあれば大丈夫だな。」

「一応、虫刺され持ってったらどうだ？」

「それは、谷口さんの分担だよ。」

実は、谷口さんはあの事件の翌日、ジュニアポリスに入団したのだ。といっても、まだ訓練所で練習中だけど。詳しいことは前話を見てね！

コンコン

「秀、入るわよ。」

「あ、うん！」

ガチャ

「道具は用意できた？」

「バツチリ！」

「秀、今日は明日に備えて早く寝なさい。」

「うん。」

そして、朝に出発するため今日は早く眠りにつくのであった。

翌朝、ドラゴンステーション・中央改札。そこは、たくさんの人でごった返している。しかし、ほとんどシティの郊外に遊びに行く人ばかりだ。僕のようなグループはここだけだった。

「だけど、休みの終わりにどこか出かけるなんてちょっと異色だな。」

「何言ってるねん。ウチら、任務ばかりで遊ぶ暇なかったやろ。」

「そうだけどさ……。」

「せっかくやから、最後まで大きい思い出でもつくるか。」

「そうよ、楽しまないと損よ!」

「うん……。」

そして、メンバーは全員そろい（7人しかいないが。人間の男は僕だけ。）改札をとり、ホームへ向かった。

「まもなく、快速フジシティ行きが参ります。危険ですから黄色い線までお下がりください。」

電車がホームに滑り込んできた。車内は最近見なくなったボックスシートだ。途中の駅で降りて、そこからはキャンプ地行きのバスで行く。そういうスケジュールだ。

しばらくして、電車が発車した。どんなキャンプになるだろうか。その答えは、僕もわからない。

第10話 JPKキャンプ 2

列車は麓駅ふもとに到着した。ここからは、バスでキャンプ地へ向かう。バスで1時間はかかる。

「そついやバス乗るの、久しぶりだな。」

「そつね。メトロができて、シティの幹といえるバスが廃止になったから。」

「せやな。」

できて廃止になったというより、メトロに運行を譲ったといいほうが妥当じゃないだろうか？そんなどうでもいいことを考えているうちに、バスは山道に入ってしまった。

それからしばらくバスは、川沿いの道路を走っていた。道路は、がけ崩れを防ぐためのシェルターで覆われていた。

「無駄にゼニー使ってない？」

「そついうなって。これのおかげで道路が守られてるんだし。」

「これができる前は、がけ崩れがあった時は大変だったのよ。土砂を撤去するのに一週間もかかったんですつて。」

なるほど、下の川を見ているとたくさんズリ山がある。今までの土砂崩れでできたものらしい。(よくわかんないけど)ちなみに、キューシュー地方ではボタ山というらしい。

そして、さらに走りバスはキャンプビレッジに到着した。

その後、場所を見つけ僕たちは自分たちの仕事にかかった。

高原家3人は、テントを張る。

春江さんは釜を作るための石を集める。

正巳さんと春香さんは食料を運んでいる。

橋本さんは水を汲んできた。

そして、昼食はバーベキューにした。

「えつと……。」

「つかさ、肉ばかり刺しちゃダメよ。野菜と肉をバランスよく刺さないと。」

「うん。」

僕は魚を釣ることにした。行く途中で見たパーソナルネットでは、ここは釣りの穴場らしい。糸は、あらかじめ持っていたもの、さおはその辺に落ちていた木の枝、針は誰かが持っていた針金から使った。えさは、渥美姉ちゃんが持っていた煉り餌を使うことにした。

「この釣り場は鮎狙いだぞ。」

「よーし。」

それから30分後。鮎は6匹釣れたがどうしても僕の分だけ連れな
い。

「なんか、仕組まれてるみたいだ。お、引いてるぞ！」

しかし、つれたはいいが、長靴だった。

「誰がこんなもの。」

しかし、中の水を出すとなんと、鮎が入っていた。

「おー、こりゃラッキーだ。」

これで、全員分そろった。

そして、みんなでバーベキューや焼き魚を食べた。鮎は素焼きにした。鮎って塩をかけなくても意外とおいしいな。

しばらくして

「ooooooooooooご馳走様ー！！！！！！！！」

「さー、泳ごうー！」

そついい、全員服を脱いだ。全員、下に水着を着ていた。たしなみはちゃんと心得てるみたいだね。って、何考えてるんだ僕は。まあ、僕も海パンを履いてきたわけだけど。僕はそのまま眠った。

「秀ー。」

誰かが呼んでいたが僕は無視した。

「渥美先輩。完全に寝ちゃってます。」

「秀を起こすには、これ。」

すると、上半身が熱い空気に包まれた。

「そして、うづ。」

「あー!!」

僕は、渥美姉ちゃんにわき腹をつつかれた。恥ずかしいことに僕はここが弱い。

「ほな、秀君。行こか。」

「僕はもうちよっと寝てるよ。」

「いやや言っんなら・・・。」

春香さんが、僕をにらみつけてきた。

「何も考えずにウチの目を見い。」

しかも、にらまれているうちに僕は何も考えられなくなってきた。待てよ、これって催眠術か？

その光景を垣間見ていた俺は、秀の目の色が変わっているのに気がついた。

「ほれ、きい。」

春香の言葉にひきつけられるように秀はフラフラと春香の元へ歩いていった。

「秀！」

叫んでみたが、秀は何も聞いていなかった。

「それなら……。」

俺は全身に力を入れた。そして、秀の横の頭をめがけて攻撃した。

「痛っ！」

ザボン！

第10話 JPKキャンブ 2 (後書き)

感想・キャラクターの声優。奮ってご応募ください！

第10話 JPKキャンブ・3 (前書き)

いろいろ推敲したので、遅れました。

第10話 JPKキャンプ - 3

「いてえー。もう、何だっただ？石に頭ぶつけちゃったよ。」

何が起こったのか僕にもわからない。突然、何も考えられなくなっ
たと思つたら、ぼんやりすることしか思い出せずしかも今は石に頭
をぶつけ、頭が痛い。

「秀さん、大丈夫ですか？」

「あ、うん。」

僕は正巳さんに連れられテントに戻った。

「秀さん、怪我はたいしたことないですけど一応、治療しときます
ね。」

「うん。」

結局、泳ぐのは中止になった。っていうか、泳ぐと僕ろくな目にあ
ってないな。

そして、近くにあったスポーツ施設に行った。キャンプ地でスポー
ツといえば、テニス。これは、お決まりみたいなもんかな。また、
審判は僕だ。また、どちらかが1セットとつたら勝ちだ。

「ほな、いくでー！」

「よーい……。」

ピー！

初戦は、春香さんと恵子さんだ。

「秀、試合では初戦が大事だって聞いたがそうなのか？」

「うーん、例外もあるんじゃない？」

「ああ！」

ピー！

春香 恵子

0 15

「よーい」

ピー！

パコーン

パコーン

パコーン

ピー！

春香 恵子

0 30

中略

そして、恵子さんが1セットとって、恵子さんの勝ちだ。

第二試合は渥美姉ちゃんとかさ姉ちゃん。

「お姉ちゃん相手でも手加減しないよ！」

「私も妹相手でも手加減しないからね！」

こっちから見たら二人とも姉なんだけどな。

「よーい。」

ピー！

結果は、渥美姉ちゃんがかつた。でも、ひどい言い方だがつかさ姉ちゃんはボロ負けだ。

3回戦は正巳さんと春江さんだ。

「よーい。」

ピー！

結果、春江さんの勝ちだ。

そして、セミアイナルとなった。

セミアイナルは橋本さんと渥美姉ちゃんだ。

「先輩相手でも手加減しませんよ！」

「私も後輩相手でも手加減しないわよ！」

ピー！

結果、橋本さんが勝った。次は、僕と春江さんだ。審判は渥美姉ちやんに交代だ。

「なんでこうなるの？」

「しょうがないだろ。人数の関係だよ。」

ピー！

結果、僕が勝った。決戦は、僕と橋本さんだ。

「決勝戦の前に10分の休憩に入ります。」

そのころ、川の上流では……。怪しげな集団がダムのところに入った。

「やつが下流にいるのは間違いないな？」

「ああ。オペレーターごと流してやろう。」

「発破！」

ボン！

同じころ、僕たちのいるところでは……。

「じゃあ、行くぞー！」

結果、橋本さんの勝ちだ。

「この後どうする？」

「あっちの遊歩道に行ってみよう。」

「それいいね。」

そのとたん、警報音が聞こえてきた

ウー！ウー！ウー！

「何だ！？」

「ダムが放水したのよ！」

「とりあえず、逃げよう！」

僕たちは、キャンプ場の入り口まで戻ってきた。

しばらくすると、放水された水が流れてきた。

「何だ！？この放水尋常じゃないぞ！」

「きっと、ダムで何かあったんだわ！行きましょう！」

「くくくくくくよし！」「くくくくくく」

ダムでは・・・。

「間抜け！ダムを放水したら普通、警報がなるだろ！」

「そりゃそうか・・・。」

「これを聞いたらあのお方はなんと言う！」

組織の中には後先考えず、行動するものもいるらしい。そして、僕たちはどうなるのか・・・。

第10話 JPKキャンブ 4 (前書き)

遅れてすみません。では、どうぞ！

第10話 JPキャンプ 4

僕たちJPは、ダムの異常放水の原因を調べるため、ジェットパツクを背負って上流を目指していた。ジュニアポリスは、すでに二ホロン中央警察公認済みで、全国どこでも活躍できる。といつても、活躍の場はほとんどドラゴンシティだけだね。って、語ってる場合じゃないや。

「早いとこダムに行つて、放水を止めないと！」

僕たちはダムを目指して飛んでいた。すると、下のほうから悲鳴が聞こえてきた。

「助けてー！」

みると、一人の女の子が川にかかる橋の橋げたにつかまっていた。しかも、その子が捕まっている橋げたは、今にも流されそうだ。

「渥美姉ちゃん。ロープの端を持って。僕があの子を助ける。」

「気をつけてね。」

僕は、自分の腰にロープを結びつけた。そして、ゆっくりと下降する。

「大丈夫。今助けるから。」

「ホント？」

そして、僕はその少女を何とか救出した。

「大丈夫ですか？」

「なんとかね……。」

「いえ、秀さんじゃなくて、その子に。」

なんで子供にも敬語なんだろう。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん。ありがとうございます。」

その子は、結構育ちがよさそうだった。僕と違って、両親からは愛情に恵まれたのかな。

「私のお父さんは、ダム管理者なんです。だから、ダムを止めてください！」

その途端、急に頭と体中に激痛が襲った。

「……………秀（君！（さん！））……………」

「ごめん、父さんって言葉を聞くと、なぜか傷跡が疼くんだ……。何でかは聞かないで……。」

そう、僕は実家にいたころ、父さんからは虐待同然の扱いを受けていた。その体や心の傷はまだ完全には癒されていない。しかし、父親を見返す日はまだ遠い。このことは、渥美姉ちゃんやつかさ姉ちゃん以外には一切秘密だ。また、悟られてもいけない。あの超能力エスパー少女にも。

「は……、早く行こう！」

「くくくくうん（ええ！（行くで（はい！）））」

そして、僕はダムへ向けて飛び出した。

僕はダムに到着した。ダムには穴が開き、水が異常にあふれている。

「爆破されたみたいだ。」

「ひどい……。だれがこんなこと……。」

「きっと、ファイターマンを裏切った組織の仕業だろう。」

「とにかく、内水門を閉めることが先決だ。このダムは、二重構造になってて普段は、外側の水門を閉めて内側を空けておくことが多いし、緊急事態には内側がしまるって言うけど、何で閉めてないんだ？」

「きっと、管理人達がやられたのよ。」

「早いとこ助けて放水を止めなくちゃ。」

そして、ダム管理室に入った。管理人たちがあちこちで倒れている。

「これは……。殴られて気絶したんじゃない。殴られたような傷跡もないし。なんか、ガス臭いな。」

「きつと、催眠ガスで眠らされたのよ。」

「気いつけえ。不意打ちが来るかもしれへんわ。」

「わかってる。」

でも、そういうやつに限って一番危ないんだよね。

「何か言った？いたっ！」

「春香さん！」

顔を上げると、目の前に作業員らしき人物がいた。おそらく、団員だろう。胸には、何かのエンブレムマークが付いている。おそらく、団員のシンボルマークだろう。それに、顔を目だし帽で覆っている。しかも、手には猟銃を持っている。

「貴様！何者だ！」

しかし、その団員は問答無用で発砲してきた。

「説得が通じる相手じゃなさそうだ。」

僕は一発発砲し、相手を眠らせた。

「つかさ姉ちゃんと正巳さんは、ダムの水門を閉めて！」

「わかった！」

「わかりました。」

僕たちは、作業員たちと応戦していた。

「くそつ、どれだけいるんだよ！」

作業員は倒しても次々と現れる。ファイターマンが言った。

「少なくとも1000人はいるな。」

「くそつ、1000人!?」「くそつ」

それまで体力と銃弾が持つか、それが心配だった。

第10話 JPKキャンプ 4 (後書き)

多分、また推敲で遅れると思います。
そこは、了承してください。

第10話 JPKキャンプ 5

ファイターマン曰く、この団員は1000人いるらしい。しかし、この連中はその下級のようだ。でも、意外と強い。しかも、倒しても次々と現れる。

「それまで銃弾と体力が持つか……。」

「ハア……、ハア……、ハア……。」

みると、渥美姉ちゃんがばてている様子だった。

「渥美姉ちゃんは無理せず休んで。」

「うん……。」

「こうなったら……。」

僕は、電磁警防を片手に、敵に突撃した。危ないと思っている読者もいるが、僕は下着の上に防弾チョッキを二枚重ねて着ているため、マシンガンを食らっても痛くも痒くもない。

「はあああああー!!」

しかし、無謀だった。向こうは数が多い。こっちは、大ダメージを受けた。でも、数人は倒せた。

「う……。」

「秀！これを使って！」

渥美姉ちゃんが、かばんの中から何かを取り出した。それはなんと、コピーロイド・JPCカスタムだった。コピーロイドは、約50年前、ネットナビを実体化させるロボットとして、昔のアニメのロボットをモデルにして作られたロボットだ。プラグインすると、姿かたち・能力・性格まで完全にコピーされ、ネットナビが実体化するといっても過言じゃない。このJPCカスタムはJPに登録されているネットナビなら、誰でも使える。

「プラグイン！ファイターマン！トランスミッション！」

すると、コピーロイドが光り、ファイターマンが目の前に現れた。

「ファイターマンが……。」

「実体化してる……。」

「さあ、俺の番だ！久々に暴れてやるぜ！」

この間、電腦世界で暴れたばっかなのにね。なんて言いつつも、ファイターマンは敵に突進した。

「食らえ！バルカンジャブ！」

団員たちは次々と倒れていった。さすがはファイターマン。元団員だな。

「まだくるぞ！チップをくれ！」

「わかった！バトルチップ！スプレットガン！スロット・イン！」

「発射！」

よし！やりい！団員はたぶん全滅だな。すると、急に水の流れる音がしなくなった。あの二人、成功したんだ！すると、団員の一人が持っている無線機から音がした。

「ちっ、本部から帰還命令か。」

倒れていた団員たちが起き上がり、逃げ出した。

「待て！逃がすか！」

しかし、やつらはヘリコプターを用意して逃げ出した。

「くそっ。逃げられたか。」

「でも、やつらの手がかりをひとつつかめた。」

「ドサクサなキャンプになっちゃったな。戻ろう。」

日はとつぷり暮れていた。

キャンプ地はほとんど荒れていたが、僕らのテントは無事だった。

「ここが無事なのは不幸中の幸いな。」

「ああ。とりあえず、夕飯にしようぜ。」

「『『『『『賛成ー！』』』』』」

一仕事したあとの夕飯はまた格別だった。そして、夕食後報告書の水原さんに転送する。ちなみに、夕飯はカレーだ。その後は、キャンプファイアーで盛り上がった。夏の終わりということも忘れて。

「さーで、寝るとするか。でも、僕はどうしよう？」

その後、しばらく僕が誰と寝るかで揉めていた。

結局、僕は高原家3人で寝ることになった。

で、どうなるかというと、寝袋で寝ることになり右から渥美姉ちゃん・僕・つかさ姉ちゃんといった具合だ。ちなみに、ここは山の中で、電気も電源もないのでP E Tは充電できない。そこが厄介なんだよね。帰ったらすぐ充電しないと。

夜

「あー、もう。何でテントの中まで蚊が入ってくるねん。」

「あつちのテントは、ベープ使ってるから蚊はいないよ。」

そして、春香さんはテントに入っただけだった。

「あー、蚊がおれへんわ。ここやったら、寝れそうやな。」

翌朝

「ちょっと。何だこれ。」

朝になり、目を開けると渥美姉ちゃんが僕の上に乗っていた。しかも、横を見ると、いつの間に春香さんが。僕の腕は春香さんの体の下にあつた。でも、よく見ると腕の場所が・・・！春香さんの胸の下敷きになつてる。あつちはあつちで、何考えてるんだ。

「よーい！起きろ！」

「んー？何や？」

「何考えてるんだ！僕の腕を抱き枕にして。」

「腕はいやなん？」

（そういう意味じゃねえよ。）

「それやったら・・・。」

突然、春香さんが僕を転がし、渥美姉ちゃんを落とした。そして、何を考えたか僕に抱きついてきた。

「だから、それは自重しろ！」

「んー、何？」

渥美姉ちゃんが目を覚ましてしまった。まずいよ、この状況見られたら・・・。

「春香ちゃん！何やってるの！？」

「んー、何でつか？」

その隙を練り、僕は川へ向かった。
そして、川で顔を洗うことにする。

「んー、自然の水はいいなあ。」

「水道水はカルキを使ってるからな。」

「うん。自然のミネラルウォーターだな。」

「それ、ただの天然水じゃないか。」

「秀くーん。」

見ると、つかさ姉ちゃんが手を振っていた。

「朝ごはんだよー！」

「あーい！」

そして、僕たちは朝食を食べ終わり、ドラゴンシティに帰っていった。もちろん、けんかしている渥美姉ちゃんやつかさ姉ちゃんも。それにしても、大変なキャンプだったな。出かける先でも危険はいっぱいあっていうことを肝に銘じた僕であった。

第10話 JPKキャンブ 5（後書き）

次回予告

秀 あー、だりーな！。

ファイターマン 何だ？夏休み病か？

秀 みたいなもんだな。

ファイターマン それより、お前のクラスに教育自習生が来たらしいぞ。

秀 そうだね。だけど、その先生は・・・。

秀・ファイターマン 次回、ジュニアポリス！スパイ教育自習生

ファイターマン 秀！また事件だ！

秀 よし！出撃！

第11話 スパイ教育自習生 1

夏休みが終わり、また今日から学校に通うことになった僕たち。だけれど、ほとんど全員いやそうな顔をしているのは、言うまでもない。もちろん、僕もその一人だけだ。

「あー、学校やだなー。昨日まで休みだったのに、今日から学校かー。」

「文句言っても無くならないわよ。」

「ごもつともだけどさ……。」

「まもなく、エレキタウン、エレキタウンです。降り口は左側です。電車とホームの間が開いているところがありますので、足元にご注意ください。」

そして、渥美姉ちゃんたち女子高生は降りていった。

「じゃあ、あとでね、秀。」

「うん。」

そして、電車は学校へ向けてひた走る。

「まもなく、ドラゴン学園前、ドラゴン学園前です。降り口は右側です。」

小学生も中学生もみんな、車両右側のドアに集まった。そして、電車は駅に滑り込んだ。そして、車両のドアとホームドアが開き、生徒たちは降りていった。

「秀、何ポーっとしてんだ！おいてかれるぞ！」

「あ、待ってー！」

ドアが閉まるすんでのところで降りることができた。

「危険ですので、駆け込み乗降車はおやめください。」

「すみません。」

そして、改札をとおり1番出口から地上に出ると、学校は目と鼻の先だ。

校舎に入り、教室へ向かった。

「お前、こんな毎日で退屈しないのかよ。」

「それ、今学期初日に言う言葉か？」

僕は自分のデスクに付いた。しかし、今日もいい天気だな。そして、上島先生が来た。

「起立！」

「礼！」

「「「「「「「「「「「「おはようございますー」「「「「「「「「「「」

「おはようございます。」

「着席！」

「では、今日から2学期です。今まで以上に心を気を引き締めてください。9時から、始業式です。体育館シューズに履き替えてください。」

「夏休み、どっかいったか？」

「結局いろいろあって、どこも行ってなかったな。」

「ねえ、縷々ちゃんは？」

「部活の合宿以外どこも行っていないや。」

そんな話し声が聞こえてくる。

キーン、コーン、カーン、コーン

あ、9時だ。そろそろ始業式だな。

「では、出席番号順に男子前、女子後ろに並べ。」

ちなみに僕の、出席番号は21番だ。え？聞いてない？あ、そう。

そして、体育館に来た。でも、寝不足できつい……。実は昨日、立てこもり事件が発生し、エレキタウンの雑居ビルに犯人が人質を

取り立てこもったのだ。犯人の要求は、現金4000万ゼニーと逃走用の車だ。僕たちと警官たちは必死に説得を試みたがまったく耳を貸さない。それどころか、こつちに威嚇発砲してくる始末だ。最終的には僕たちが強行突破で犯人を取り押さえたわけだけど。そうになったのが、深夜3時過ぎだった。だから、非常に眠く僕の目の下には隈ができています。しかも、それ以降は仮眠程度で3時間しか寝ていない。でも僕はまだ寝たりない。

「〜であるからして……。」

校長先生も何か言っているが僕はそれどころじゃない。だんだん眠気が頭の中を支配し、話が終わるころには、眠気と話を聞くの比率が9：1になっている。

「ありがとうございます。それでは、夏休みの間にやってきた転校生を3人紹介します。それから、教育自習生の方も着ています。」

ああもう、どうだっていいじゃん。転校生とか教育自習生がどうとか。僕は眠いんだ。もうダメだ……。目の前が霞がかってきた。

バシッ！

「いてっ！」

少し眠気が吹き飛んだ。何で頬が痛くなってるんだ？

「お前、半分以上寝てたぞ。」

「悪いな。ファイターマン。」

「ん？あいつは……。」

俺は、ステージに現れた教育自習生の一人に見覚えがある人物がいたことに気がついた。確かあいつは……。

「秀、あいつには用心しておけ。」

「ファイターマン、知ってるの？」

「知ってるの何も、あいつはザンザークで活躍してるスパイだ。」

「ザンザーク？」

「ぼろが出ちまったな。」

いったい、そいつが来てから僕はどうなるんだろうか……。そして、ザンザークの詳しいことは、僕はまだ知らない……。

第11話 スパイ教育自習生 2

そして、始業式が終わり教室に戻ってきた。でも、眠気がまだ抜けない。

「先生が戻ってくるまで寝よう。」

そして、僕はそのまま眠ってしまった。

「秀、秀。秀！起きろ！」

「んー、よく寝た。」

「よく寝たじゃないぞ！」

僕は顔を上げると、みんな清掃に行っていた。

「まずい！」

僕はすぐに自分のデスクを運び、自分の分担場所へ向かった。

ドラゴン学園、中等部・北校舎・非常階段下。

教育自習生の教師が非常階段の下でどこかと通信をしている。

「潜伏成功しました。」

「ご苦労。お前に期待しているぞ。過去何回もスパイとして活躍し、

正体を暴かれる前に情報を持ってくる。では、ファイターマンのオペレーターの正体を暴け。へまをやらかすんじゃないぞ。」

「了解」

そして、一日が終わった。みんな自習生と話をしている。今日の昼食を作るのは僕だ。今日はもう帰ろう。

僕たちは、メトロに乗って帰宅途中だ。別に過去にタイムスリップするわけじゃないよ。

現在、時間帯は昼なので座席はクロスシートだ。

「ファイターマン、あいつがスパイってどういうこと?」

「多分、お前の情報収集だな。」

「なんでだろう?」

「俺を持つてるからじゃないのか?」

「お前は裏切り者だったからな。お前のせいだ」

「それ以上は言つな。」

「ごめん。」

そして、自宅に帰ってきた。

「ただいまー。って、誰もいないか。」

壁にかけてある家の電話を見ると、留守電が一件入っていた。とりあえず、再生してみよう。

「ポチツとな。」

ピー

「一件目ノメッセージデス。9月1日。午前11時35分。」

「渥美です。今日、部活で帰り遅くなるから。ご飯は、外で食べていって。あ、おやつはいつもの棚の中だから。」

メッセージ八以上デス。モウイチド再生スルバイ八、再生ボタンヲ押シテクダサイ。終了スル場合八、ソノママ受話器ヲ戻シテクダサイ。」

ガチャ

「どうすんだ？秀。」

「とりあえず、ご飯食べに行こう。」

そして、DIBのショッピングフロアにきた。ここは、たくさんの店がそろっており、連日たくさんの人にぎわっている。簡単に言えばななぼーとの横幅を取って、それを上に重ねたようなものだ。

「どうもさ、さっきから誰かに後ろつけられてる気がすんだよ。」

「お前のその顔で、女が引かれたんじゃないかねえのか？顔が子供みたいだから。」

「やかましい！」

いい忘れてたが、僕は童顔だ。だけど、僕はこれがコンプレックスなのだ。どうやってたら大人びに見えるかな。常にそれを考えている。って、背が低くちゃ意味ないか。

そして、僕は食事を追え自分の部屋に戻るところだ。

（やっぱり、誰かが後ろをつけてる。）

「えーい！」

僕は、JP秘密兵器のひとつ、煙球を投げた。空気を吸ってから衝撃が走ると煙が出る仕組みだ。

そして、煙が出た。しかも、煙がセンサーにかかりスプリンクラーが動き出した。

「わー！」

周りにも迷惑かけちゃったかな。でも、自己防衛上仕方ないんだ。

「もー、何すんの！？」

「あ、江崎さん。悪い、ストーカーかと思った。」

「ストーカーなんかしてません！ただ、あんたの後ろを歩いてただけです！」

（世間ではそれをストーカーっていうんだけどね。）

「悪い悪い。じゃ。」

そして、エレベーターに乗り込んだ。

なんか、面倒なことになっちゃったな。スパイまで現れて。僕、これからどうなっちゃうの!?

第11話 スパイ教育自習生 2 (後書き)

ななぽーとのモデルは・・・、いうまでもありませんね。

第11話 スパイ教育自習生 3

翌日は、晴天に恵まれた。

「今日はサボりたいなー。」

「秀、学校もJ.P.もサボっちゃだめよ。」

「はい。あ、そうだ。昨日、教育自習生の先生が来たんだ。」

「どんな先生？」

「まあ、普通の先生かな。」

「渥美、そいつは多分スパイだな。」

「なんで？」

突然、ファイターマンが口を挟んだ。

「そいつは、俺が属してた組織であちこちに赴いてスパイとして働いてやがる。そして、情報が取られ、破産した輩も少なくないな。」

「秀、用心しなきゃダメよ。あなたの情報は誰にも渡しちゃダメ。」

「言われなくてもわかってる。」

そして、いつものように学校へ向かった。

昼休み。僕は、図書室で本を読むのが好きだ。だから、昼休みはいつも図書室にいる。

「お前、ここ好きだな。」

「うん。本にはいろいろな物語が眠ってるんだ。ページをめくると、予想もしなかった答えが返ってくる。それが、本の面白いところだ。」

「でも、お前の本棚は漫画ばっかだけだな。」

「……………」

中には、勉強本や問題集もあるんだけどね。でも最近では電子本の発行が多く、PETからダウンロードするだけで本を読める。つまり、本屋に行く手間が省けるが、紙の本も健在だ。ちなみに、教科書も電子本だ。あれ？これ前も言ったかな？

バチッ

すると、突然部屋の電気が消えた。でも、外からの明かりがあるので、不便はないけど…………。

「停電か？」

「秀、俺をプラグインしろ。」

「わかった。」

電気のスイッチのひとつに、プラグイン端子がついている。

「プラグイン！ファイターマン！トランスミッション！」

電気の電脳世界にきた俺は、ひとつのワープゾーンに気がついた。

「ここ、学校の照明システムにつながってるみたいだ。」

「行ってみて。」

そして、学園エリアの照明の電脳に来た。

「秀！ウイルスだ！」

「バトルオペレーション！セット！」

「イン！」

「食らえ！バルカンジャブ！」

ウイルスは、メットール、ゲイラーク、ビリー、ボムコーンなどだ。バルカンジャブで、ウイルスのほとんどが倒れた。

ズガン！

「ファイターマン！後ろ！」

俺は、その攻撃をかわした。後ろには、キャタックがいる。

「パワーショット！」

その一撃でキヤタックを倒した。ザコばっかだな。

「まだいるぞ！」

「バトルチップ！キラーセンサー！スロット・イン！」

「いっけー！」

ウイルスは全滅した。

「あ、電気がついた。」

「秀、このウイルスたち、どうやら誰かが時限式に仕掛けたやつらしい。」

「誰かって誰？」

「さあな。」

キーンコーンカーンコーン

「あ、そろそろ五時間目だ。」

「お前の苦手な英語だな。」

「うん……。」

僕は、さっさと教室に戻った。でも、あのウイルス、誰が仕掛けたんだらう？

第11話 スパイ教育自習生 4

そして、学校が終わりほとんどが帰宅した。もちろん、僕もだ。やっとこの堅苦しい場から出られると思うと、結構安心する。

「さー、帰ろう。」

「帰ったら勉強があるがな。」

「現実見せないでくれ。」

そして、メトロの駅に来た。

「まもなく1番線に、ドラゴンステーション行きが参ります。ホームドアの内側までお下がりください。」

そして、僕たちは列車に乗り込んだ。

一方そのころ、学校では……。

「あの高原秀とか言うやつ、意外とやるようです。」

「裏切り者を持っているならやつもまとめて始末したら報酬を倍にしてやる。」

「了解。」

ドラゴン警察署

「ドラゴン学園でウイルス発生！」

「水原、ただちにJ Pの隊員たちに出動要請を。」

「了解しました。」

そして、直子は一軒一軒に電話をかけた。

「直ちに出勤して。」

「了解！」「了解！」「了解！」

「あとは……。」

秀に何回も電話をしたがまるで通じない。

「一体全体どうなってるの？」

一方、そのころ、秀はメトロで寝ていた。

「おい、秀！おきる！」

「あれ？寝過ごしちゃったか。」

目を覚ますと、列車は市役所前を過ぎたところだった。

「やべ、どつしよづ。」

「次は終点、ドラゴンステーションです。N N R、N H S Rはお乗換えです。」

結局、定期分はいいとして辰ノからドラゴンステーションの運賃を払うことになった。

「とりあえず、ステーションまで来たから駅でも見ていこう。」

そして、地上に出たとたん電話がかかってきた。

「秀君、やっとつながったわ。学校帰りで疲れてるとこ悪いけど、至急出勤して。場所はドラゴン学園よ！」

「了解！」

そして、かばんからスケボーを取り出した。

「バッテリー、問題なし！さあ、行くぞ！」

「あれ？ジェットパックは使わないのか？」

「あれ、調子が悪いから近日修理に出さないといけないんだ。だから、使用を控えないと。」

そして、トップスピードで学校へ戻った。

車や歩行者を避けながら学校へ、向かっている。ちなみに、時速100キロは出ている。なぜ、こんなオンボロスケボーでこんなに出せるかというと、この間新しいパーツを買って組み込んだからだ。

そして、学校に到着した。

「別に何もおきてなさそうだけど……。」

「秀！強い反応があるぞ。ナビロイド再来かもしれないな。」

「じゃなきゃいいけど。よしーいいこうー！」

そして、僕は校舎に入っていった。ほかの人たちは、もう到着しているのかな。

みると、全員くらい顔をしている。何かあったのかな。

「みんな、どうしたん！？」

「ナビたちが……。」

「デリートされてもった。」

「ボクだけじゃないよ。」

「私たち全員……。」

「バックアップは？」

全員がうなづいた。どうやら、措置はとったらしい。

「今度は僕が行く！プラグイン！ファイターマン！トランスミッシ
ョン！」

「おいでなすったな。」

「これは……。」

みると、システムがひどく破壊されていた。

「これ、ウイルスじゃできるレベルじゃないね。」

「ああ。ネットナビの仕業だな。」

「ファイターマン！後ろだ！」

「！？」

うしろから、刀を持ったナビが攻撃してきた。伊集院家のブルースじゃないな。

「誰だ！お前は！」

「私は、ブレードマン。貴様をデリートする。」

「私たちは、こいつにやられたの。」

「こいつらに！？」

「あいつらなど、ザコにすぎん。」

「やってやるうじゃないの！秀！」

「バトルオペレーション！セット！」

「イン！」

第11話 スパイ教育自習生 4 (後書き)

久々にナビロイドが登場しました。
感想、待ってます。

第11話 スパイ教育自習生 5

「いくぜ！パワーショット！」

「フン！」

攻撃は刀で打ち消された。しかし、俺は動じない。まずは、様子見。これくらい戦いで常識だ。

「ショックウェーブ！」

ブレードマンが刀で地面をたたき、衝撃波を起こした。

「それなら、バトルチップ！ダブルクラック！スロット・イン！」

俺の目の前に、穴が出現した。この穴で、ショックウェーブを無効にするわけか。

「まだまだ！バトルチップ！カンケツセン！スロット・イン！」

手に持ったボールを穴に落とした。

すると、大きな音がしてお湯が噴出した。ふきた

「これで、大ダメージだ！」

しかし、そう考えた俺が甘かった。なんと！向こうはバリアで防いでいた！

「なんでだ!？」

「何回もナビロイドが倒されたとき、向こうも手を打ったんだよ。バトルチップの能力をインストールしてみたい。これでいくぞ!バトルチップ!ジェラシー!スロット・イン!」

俺の中で、相手に対する嫉妬心が生まれた。そして、その妬みの心が上空に暗雲を生み出した。そして、向こうに雷を落とす。

「うわああ!」

「よし!ジェラシーで大ダメージだ!続けていくよ!バトルチップ!ロングブレード!スロット・イン!」

ソードにはソードを!ロングブレードで切りかかったが、はじき返された。

「まだまだ!」

キン、キン、キン、キン

「ダメだ、きりがねえ!」

「バトルチップ!シラハドリ!スロット・イン!これで、ソード系の攻撃をすべて無効にして、反撃する!」

「てい!続けていくぜ!スピッキク!」

「グッ!」

「止めだ！プログラムアドバンス！バトルチップ！ハイキャノン！
トリプルスロットイン！プログラムアドバンス発動！」
「ギガキャノン！Ver2！^{バージョン}いっけー！」

しかし、敵の姿は消えていた。

「何！？」

「エスケープで逃げちゃったみたい。その後、爆風にまぎれてブラ
グアウトしちゃったみたいだよ。」

「見て！あれ！」

見ると、教育自習生の先生の一人が走っていくのが見えた。しかし、
パトカーが校門から進入してきた。

「行くぞー！」

（（（（（ココリ）））））

そして、全員で玄関に下りていった。玄関は渡り廊下の一階にある。
ドラゴン学園では、どこの設備に行くとしても、嫌でも正面玄関を
通らなければいけない。（自転車置き場を除いて。）しかも、渡り
廊下の一階には、事務室と職員室がある。全員、玄関に到着した。
容疑者の前は警官たち。後ろは僕らJP・前門の虎、後門の狼とは
このことだな。

「追い詰めたぞー！」

「チツ。」

「後ろには僕らがいるぞ！」

しかし、容疑者は僕らに対抗して、懐ふくろからナイフを出した。

あーあ、いいのかな。僕らJPの秘密兵器でボコボコにされるのがオチなのに。

しかし、かまわず向こうはナイフで切りかかってきた。

僕は、かばんから電磁警防を取り出す。

「さあ、行くぞ！」

まずは、煙球を投げ相手の目をくらませる。

「えーい！」

つかさ姉ちゃんはブーメランで攻撃した。

「はあ！」

渥美姉ちゃんはヨーヨーで攻撃した。JPでのヨーヨーは遠心力により、刃が出るようになっていて、これで相手を攻撃できる。そして、戻るときには刃も戻るので、手を怪我する心配はない。ちなみに、JPでは正当な理由を除き、犯罪者以外に怪我をさせたらアイテムは1年没収となり、出勤もかからなくなる。JPでの謹慎は相当厳しい。減給だけじゃすまないな。

攻撃で容疑者はすっかり戦意喪失していた。そして、僕はとどめにピストルで犯人を撃つ。前にも言ったように、ピストルは麻酔弾である。

容疑者、いや犯人はすっかり眠ってしまった。撃たれた瞬間に麻醉薬が回り、撃たれた人は睡魔に襲われたときと同じ感覚に陥る。

そして護送車に乗せられ、犯人は連行された。

「これで解決すりゃいいんだけど。」

「やつらはまた手を打ってくるさ。」

「こつちも数手先を読んで、準備してりゃOKだ。将棋みたいだね。」

「意味、違わない？」

「とりあえず、報告をして今日は帰ろう。」

そして、全員帰っていった。ザンザーク。新しい敵が現れたようだ。僕、どうなっちゃおうの!?

第11話 スパイ教育自習生 5 (後書き)

今回は、思いついていないのでキャラクターの詳細と行きます。

キャラクター詳細 高原秀（前書き）

とりあえずとして、キャラクター紹介です。

キャラクター詳細 高原秀

たかはしひさしゅう
高原秀

誕生日 5月24日（ふたご座）

身長 139cm

体重 30kg

年齢（14話現在） 15歳

性別 男

一人称 僕

二人称 君 お前

所属 ドラゴン学園中学校3年生 （副）ジュニアポリス・ジョーカー

性格 基本的には他人を思いやり、困っている人は放っておけない。だが、心の奥底では誰にもいえない秘密や悲しみを持っている。いじめの経験があるため、他人にやさしくできる。その一方、繊細で泣き虫な一面もある。

秘密 読者の皆知っていると思うが、高原秀は本名ではない。本名は上原州で、高原秀は正体を隠すための名前である。（世間では上原州は死んだとされている。）

略歴

かつて、対洋市日影町に住んでいた少年。しかし、学校ではひどいいじめを受け実の父からは、虐待同然の扱いを受けていた。そして、その生活に耐え切れず家を出て渥美たちと出会う。行くあてをなくした彼は、彼女の元に居候として住み込むことに。そして、仮名として高原秀を名乗り、渥美との協力で、上原州の死亡工作を作った。周りには、上原州とは友達だったと説明している。また、ある事件をきっかけに、（表面上は）友を亡くしたため、これ以上大切な人を失いたくないという思いで、ジュニアポリスJPに入隊した。（実際は、いつの

日か父親を見返すため。ある日、何の前触れもなくファイターマンが秀の元に転がり込んできた。しかし、彼が裏切り者としての追われ身だったので、そしてその組織が全国指名手配の身だったので、共に戦うことに。

解説

ドラゴンシティに来てしばらくは、身を隠すため不登校期間は渥美に家事の手ほどきをしてもらった。そのため、料理や家事もうまく家庭科の成績は上の上。運動神経もよいが筆記の教科は、下の上くらい。女手二つで育てられたので、たまにガーリッシュな一面も見える。しかし、本人としては、男らしくなりたいと思っている。また、童顔で背が低いことがコンプレックスで、小学生に間違われることを嫌う。JPでは、ジョーカーランクだが、ネットバトルの腕はよく、ファイターマンからも信頼されている。たまに、衝突してけんかすることもあるが、基本的には仲がよい。

キャラクター詳細 高原秀（後書き）

次回が決まったら連絡します。

キャラクター詳細 ファイターマン

ファイターマン

誕生日 不明

身長一（人間で言えば） 165cm

体重 不明

ナビエンブレム 拳こぶこ

一人称 俺

二人称 お前

性格 好戦的で荒っぽい。だが、ダメージを受けた秀を気遣うなど、意外とやさしい一面も。

秘密 かつて、ザンザークを裏切ったことで、追われ身となっている。

略歴

約25年前、熱斗（当時37歳）はジュニア（息子の来斗らんとのナビ）の更なる強さの可能性を求めて、戦闘能力、防御能力、敏捷能力の強化として3体のネットナビが作られた。彼はその中の一体。3体の内2体はその力を十分に発揮したものの、彼だけはあまりの強さのため、制御ギブスが付けられた。しかし、まったく手に負えずその結果、ギブスを破壊した拳句熱斗に見放されてしまった。そして、その強さをザンザークに目を付けられ成り行きで入隊した。しかし、6年前のある日、ザンザークのやり方に疑問を感じた彼は、ネオドリームウィルスの鍵を奪って、組織を裏切り逃走する。そして6年後、秀と出会いともに組織を壊滅させるべく、協力することになる。

解説

秀が持つネットナビ。好戦的で、売られた喧嘩は買う主義。また、放浪していたころの強さは、今では完全に制御できている。性格も

口調も悪いが、ダメージを受けた秀を気遣うなどやさしい一面もある。秀とはよく喧嘩をするが、基本的には息のあったコンビ。だが、彼にはまだ秀も本人も知らない力がみなぎっている。また、頭にバングナを常につけており、これがないと戦う気が失せるらしい。

主な技

バルカンジャンプ

ファイターマンの基本技。近くににいる敵に連続で攻撃する。

パワーショット

気力をためて攻撃する。遠くにいる敵を倒すときに便利。

スピニングキック

囲まれたときに、回し蹴りを食らわせる。

キャラクター紹介 高原渥美

たかはら あつみ
高原渥美

誕生日 1月23日（みずがめ座）

身長 172cm

体重 秘密

年齢（14話現在） 15歳

性別 女

一人称 私

二人称 あなた

所属 冠来女子高校1年生（福）ティーンポリス・クイーンランク
性格 普段は温厚でやさしいが、怒ると怖い。その一方で傷つき凹むとなかなか立ち直れない。

秘密 表では温厚だが、実は秀が大好きで彼を溺愛している。（その本人は、迷惑している。）

略歴

秀が来る少し前までは、両親、妹のつかさ、兄の高貴の5人で暮らしていた。しかし、ある日父親は冒険家として旅に出たことで悲劇は始まった。父が数ヶ月も帰ってこないので母は愛想を尽かし、出て行ってしまった上、渥美たちが3年生のころ兄の高貴も事故で死んでしまった。親戚もない彼女とつかさは、途方にくれていた。そのご、ジュニアポリスの存在を知り、入団。その後、家事を覚え毎日迅速にこなしていた。そして、4年生になって数カ月後のある日、上原州（後の高原秀）と出会う。行く当てのなかった彼を義理の弟として家に住まわすことにする。そして、秀に家事や料理などの手ほどきをした。そして、ドラゴン学園中学校を経て、冠来女子高等学校に入学した。

解説

高原家の長女。ラクロス部の部員として、高原家の主婦代理として

がんばっている一方、ティーンポリスとしても活躍する。印象的にはかわいい女子高生だが、男子からのアプローチは軽くあしらっている。ちなみに、ドラゴン学園にいたころは、他人のふりをしていて苗字が同じ理由は偶然とっていた。また、他人には隠しているが、血のつながらない弟の秀を溺愛している。事情を知るものによればそのせいで秀をスポイルしてしまったらしい。

キャラクター紹介 高原渥美（後書き）

やっと次回が決まりました。

次回予告

ファイターマン そういや、お前の学校はそろそろ体育祭だな。

秀 うん。事件おきなきやいいけど。

ファイターマン お前の周りは事件ばっかだからな。

秀 それじゃあ、僕が事件起こしてるみたいじゃないか。

秀・ファイターマン（爆）

秀・ファイターマン 次回、ジュニアポリス。ドラゴン学園体育祭。

ファイターマン 秀！また事件だ！

秀 よし！出撃！

第12話 ドラゴン学園体育祭（前書き）

いろいろあってずいぶん遅れました。すみません。

第12話 ドラゴン学園体育祭

秋が来た。秋は二ホンの4つの四季の中でも一番すごしやすい気候だ。でも、残暑は残っているものの基本的にはすごしやすい。風呂でちょっとしたぼせちゃった僕は、ベランダに出て涼んでいた。

「あー、涼しいな。ファイターマン、今の気温何度？」

「24度だ。」

道理で涼しいわけだ。

「秀、あんまり涼んでると風邪引くわよ。」

「うん。」

僕は部屋に戻った。ここで風邪引いちゃ割に合わないな。なんでかというと、明日は体育大会だ。絶対負けらんないな。僕は、PETに充電ケーブルを接続した。そして、スリープモードにして寝る。

そして、翌朝。

「おい！起きろ！」

「うーん……。。」

誰かがうるさくわめいている。布団から出たくないよ……。。

「ほら、起きなさい！」

渥美姉ちゃんが強引に布団をはがした。

「うーん……。あれ？山積みのご馳走は？」

「何寝ぼけてるの？起きて朝ごはん食べなさい。」

「んー。」

それにしても、あの夢はなんだったんだろう？そんなことを思いつつ、僕は朝食を食べた。そして、弁当をもらい、ビルを出てメトロに乗った。

そして、ドラゴン学園に到着した。言うまでもないが入り口はいつもと違う。脇にかけてある看板に、ドラゴン学園体育祭と書かれている。

「よし、今日はがんばるぞ。」

そう意気込んだ僕だったが……。

「何をだ？」

嫌に水をさされるような言葉だな。僕は、運動場に行き、自分のクラスの場所へ向かった。さ、がんばるぞ！って、何をがんばるの？

第12話 ドラゴン学園体育祭―2（前書き）

遅れてすみません！

第12話 ドラゴン学園体育祭12

パン！ボンボンボン！

花火が上がった。いよいよ、僕らの登場だ。

「選手、入場」

そして、吹奏楽部員により聖者の行進が演奏された。もつと他に無いかよ。まあそれはいいとして今日は事件おきなきやいいな。僕の周りは事件ばかりだ。って、これじゃ僕が事件起こしてるみたいじゃないか。(笑)

いや、笑ってる場合じゃないな。ちゃんと行進しないと。

そして、行進が終わり選手宣誓だ。大丈夫かな、本人は。って、僕が心配するほどじゃないか。

「それでは、競技を開始します。まずは、1年生による200メートル走です。」

ちなみに、今グラウンドにいる連中は中学生の連中ばかりだ。小学生たちは、先週済ませたばかりだ。あと、修学旅行も5月の半ばですでに済んでいる。ちなみに、行き先はデンサンシティだ。熱斗さんとか来斗らいとさんに会えなかったのは残念だったけど、いい場所だったな。

「何ボケーっしてしてんだ？」

「あ、ごめん。考え事してた。」

「続いては、3年生による300メートル走です。」

いよいよ僕らの番だ。ちなみに、中学では徒競走は学年ごとに50メートル長くなる。聞いた話では、竜岡では、1年で400メートル走るらしい。

「秀、次お前だぞ。」

「あ、うん。」

僕はスタート位置に付いた。

「よーい。」
「パーン！」

昔は、銃声に怯む人がいたらしいが今はそんなにたいしたことは無い。ましてや、僕らJPは銃声に驚いてる暇なんて無いんだ。僕は、追跡訓練を思い出し、思いっきり走った。その結果、1位でゴールした。

「お前、意外とやるもんだな。」

「意外って何だよ。」

まあ1位取ったからいいか。でも、JPやってりゃ当然の結果かな。

第12話 ドラゴン学園体育祭―3 (前書き)

秀 こんなときだけど、元氣出してこー！

全員 おー！

秀 ファイターマン？

ファイターマン おー。

秀 テンションひくっ。ま、いいか。

第12話 ドラゴン学園体育祭―3

「ふう、久々に思いつきり走ったら疲れたな。」

「お前、いつもJ.Pで走ってんじゃねえのか？」

「ま、そうだけどさ。」

僕らは、控え場所に戻っていた。でも、事件はどんな状況でも平等にやってくるもんなんだよね。

ブルルルル！

「秀！水原から指令の電話だ。」

僕は通話ボタンを押した。

「私よ。」

なんか、昔のドラマのやり取りみたいだな。いや、大昔か。

「さつき、シティの銀行に強盗が押し入って現金5000万ゼニが盗難されたわ。直ちにそっちに向かって。」

「こっちは今それどころじゃないんですよ。中学校最後の体育大会なんですから。」

「あ、ちょっと待って。」

突然、保留音が流れた。ちなみに、通話中にPETの緑ボタンを押

すと保留モードになる。
そして、通話が再開された。

「さつき、本部から「この件は大人の仕事だから」ってあったから、
出勤はキャンセルね。」

「了解。」

プチッ

フー、出勤かからなくてよかった。

「続いては3年生によるムカデ競争です。」

僕ら3年生の呼び出しがかかった。ムカデ競争はチームワークが大
事だ。1人でもずれたら命取りになる。あ、命取りって言うのは転
んで敗北率が高くなるってことだからね。

「よいい。」

パーン！（ピストルの音）

中略

「ふー、疲れた。」

僕は、ひょうたんから茶を出して飲んだ。ちなみに、これは本物じ
やなくてひょうたんそっくりに作られた水筒だ。だけど、本物にそ
っくりだ。

「ひょうたん持ってくるって・・・、いつの時代だよ。」

となりの男子生徒が話しかけてきた。

「これ、ひょうたんそっくりに作られた水筒なんだ。」

「だけど、そっくりだな。」

「でしょ?」

「高かったろ?それ。」

「いや、百均で買った。」

「高原も苦労してるんだな。両親はいなくて親戚の家に住んでるんだもんな。」

「まあね。」

僕はそんな他愛もない話をしていた。そのときPETがなった。

「はい、秀です。」

「秀?私だけど。」

「あれ?渥美姉ちゃん。どした?」

なんと、渥美姉ちゃんから電話だった。

「あんだ、弁当忘れてったでしょ。」

「あ。いけね。」

「すぐ、届けに行くけどこっちだって暇じゃないのよ。」

「わりいわりい。」

渥美姉ちゃんがじきじきに弁当を届けるらしい。こりゃ、騒ぎになりそうだな。

第12話 ドラゴン学園体育祭―4（前書き）

ずいぶん遅くなっちゃいました。

僕も3年生でいろいろ忙しいので。

しょうもないいいわけでした。

第12話 ドラゴン学園体育祭Ⅰ4

体育大会の午前の部が終わり、僕らは休憩を取っていた。

「午後の部まで時間があるな。参ったな。弁当忘れるなんて。」

「俺は飯食わなくてもなんともないぜ。」

「お前はPETの充電だけで済むもんな。」

ネットナビたちはプログラムなのでご飯は食べない。彼らはPETのエネルギーで生きている。逆に僕ら人間は、何かを食べないと生きられない。そう考えると人間って不便だな。でも、ネットナビはただ人間の指示に従うだけ。人間でよかったなとも思う。

「こう言っちゃなんだけどよ、俺人間に生まれ変わりたいぜ。」

「そうか……。」

すると、遠くから声が聞こえてきた。

「おい、あの制服は……。」

「冠雷女子高校の制服じゃないか？」

「マジかよ、あのお嬢様学校の!？」

そう、冠雷女子高校はシティでは名門といわれているお嬢様学校だ。この辺でも1、2位を争う名門学校で、ライバルは龍岡高校。そこ

以外はほとんど相手にしていないらしい。隣のシテイにも大きな高校があるが、まったく歯が立ってないらしい。ちなみに、竜岡高校はこの辺では一番大きいマンモス高校だ。でも、渥美姉ちゃんだと面倒なことになりかねないんだよね。何でかというところ……。あ、来た。

「ほら、お弁当忘れてたわよ。もう、昔からそっかしいんだから……。」

「悪いな。」

「お前、姉貴に頭が上がってねーよーだな。」

「うるさい！ま、そうだけどさ……。」

「おい、あいつら見てみるよ。二人とも。」

「「え？」」

なんか、やな視線を感じると思ったら……。ほとんどの男子生徒が殺気を放っていた。いかにも僕を殺そうという感じで……。僕は逃げる。当然、連中も追ってくる。僕は校舎の角を曲がり、木の上に隠れた。幸い、その木は茂りが多かったので、連中は気づいていないかのようにスルーしていくすると、うまいタイミングでPETがなった。

「私よ。さっきの銀行強盗の件だけど、銀行のサーバーにウイルスが仕組まれたようだよ。その影響で、銀行のデータが流出よ！」

「要は、ウイルスをデリーとしろってことですね？」

「そう。急いで！」

プツッ

言うなり電話が切れた。でも、逃げるための口実は出来た。

「行こう！」

「ええ！」

とりあえず、エレキタウンに行かないと。でも、運動会が行われる以上、学校を離れることは出来ない。なんとかファイターマンとフェアリーをインターネット経由で銀行のサーバーに行かすことは出来ないだろうか。現にそれは不可能ではない。でも、プラグインできる場所はどこだろうか。まずは、それを見つけないと話にならない。恥ずかしい話、学校でプラグインしたことなんて1回もない。

「秀！学校からだどブラックボードからプラグインできるぞ！」

「え？そうなの？」

「まったく、知つとこうぜ。これくらい。」

「わりいわりい。とりあえず校舎に潜入だ。」

僕たちは校舎の中に突入した。

「懐かしいわね。」

「1年前までいたからね。」

僕たちはロックがかかってない教室に入った。ブラックボードはプ

ラグインを受け付けているようだ。いつでも来いといわんばかりに。

「ラグイン！（ファイターマン！（フェアリー！（トランス
ミッションー！」「」

第12話 ドラゴン学園体育祭―4（後書き）

また亀更新になっちゃおうと思います。

第12話 ドラゴン学園体育祭―5

俺とフェアリーは学校の電腦にプラグインされた。そういや、学校の電腦に来たのは2学期が始まって以来だな。

「久しぶりね、ここに来るの。」

「ファイターマン、エレキエリアに行つて銀行のサーバーに向かつて。」

「OK!」

俺とフェアリーは、インターネットに入り、エレキエリアを目指すことにした。

向かっている途中、少し息切れした。

「はぁ・・・、はぁ・・・。」

すると、フェアリーが心配そうに俺の顔を覗き込んだ。余計な心配しなくていいのに。

「大丈夫、なんともないぜ。」

「だといいけど。」

そして、俺たちはエレキエリアに到着した。銀行のサーバーはワイプホールにBANKと書いてあるのですぐにわかった。

俺とフェアリーは銀行のサーバーに入った。思ったとおりだ。ウイルスがうじゃうじゃいやがった。

ファイターマンとフェアリーは何とか無事に着いたようだ。「画面を見るとサーバーにウイルスがうじゃうじゃいる。気持ち悪いが今はそんなことを言ってる場合じゃない。」

「やるよ！ファイターマン！」

「おう！」

「いくよ！フェアリー！」

「いつでもどうぞ！」

「バトルオペレーション！セット！」

「イン！」

「バルカンジャブ！」

まず、手始めに近くにいたビリーを攻撃した。口ほどにもないな。

「来たよ！」

秀に言われて、見るとたくさんウイルスが群れを成して襲ってきた。

「タイフーンダンス！」

「こっちだって。バトルチップ！ワイドウインド！スロット・イン！」

俺の腕がワイドウインドの装置になった。そこから、つむじ風がおきウイルスを一掃した。

「バトルチップ！スプレットガン！スロット・イン！」

フェアリーもウイルスに応戦していた。様子をよく見ると、ほとんど弱いやつばかりだった。

「秀！」

「バトルチップ！ブラックホール！スロット・イン！」

上空にブラックホールが発生した。ウイルスたちはそこに吸い込まれてデリートされた。

「よっし！」

「まだくるぞ！」

見るとまだウイルスが湧いてきた。

「どうなってんだ。」

「秀！ウイルスコアを探すぞ！」

「ウイルスコア？」

「ウイルスの発生装置みたいなものだ。それを破壊しないとウイルスは無限に沸き続けるぞ！」

「わかった！フェアリー、後は頼んだよ。」

「任せて！」

「行こう！ファイターマン！」

「ああ！」

俺たちはウイルスコアを探すことにした。しかし、サーバーは結構広い。中にはセキュリティがかかっているものがある。ウイルスの侵入を防ぐためらしい。

「ファイターマン！無効に何か怪しい物体が！」

「こいつが、ウイルスコアだ。一発で壊すぞ！」

「プログラムアドバンス！バトルチップ！ソード、ワイドソード！ロングソード！スロット・イン！プログラムアドバンス発動！」

プログラムアドバンスとは、特定のチップを特定の順番でスロット・インすることで、強力な1枚のチップになるというものだ。うまく使えば強力な武器になる。

「ドリームソード！でああああ！」

それをウイルスにヒットさせる。ウイルスコアは破壊された。すると、フェアリーから連絡があった。

「ファイターマン！こっちもウイルスを全滅させたわ！」

「く苦労。」

「やったね！渥美姉ちゃん！」

「うん！」

僕と渥美姉ちゃんはハイタッチした。

「見つけたぞ！」

「！！！？？」

見ると、さっきの野郎どもだ。さっきよりも殺気を放ってる。って、ダジャレ言ってる場合じゃないな。その後、僕がどうなったかは言うまでもない。

ただ、唯一言えることは僕らのクラスが優勝したこと、銀行を襲った犯人が捕まったこと。そして僕は、全治3週間の怪我を負ったことだ。

第12話 ドラゴン学園体育祭―5（後書き）

次回から、亀更新になっちゃうと思います。

ワイドウインドは、本来ならワイドウエーブにする予定だったので、時期が時期なので・・・。

キャラクター紹介 フェアリー（前書き）

次回は、執筆中に決まりました。

キャラクター紹介 フェアリー

フェアリー

誕生日 不明

身長（人間で言えば） 160センチ

体重 0キロ（飛ぶのに支障をきたさないためらしい）

ナビエンブレム 妖精の羽

一人称 わたし

二人称 あなた

性格 誰にでも優しい性格。その笑顔はどんなナビや人間の心も開いてしまう。

秘密 彼女の正体は電腦フェアリー。それを知るものは誰もいない。

略歴

もともとはインターネットのどこかにあるフェアリーエリアに住む住民だった。だがある日、ネット開拓民に襲われ、撃退しようとしたものの科学力の違いでまるで歯が立たなかった。その後、開拓民に追われた彼女はエリアを捨て、放浪した後渥美の下に転がり込んだ。（実際はファイターマンがインターネットを散歩しているときに、連れてきた。）

解説

渥美のネットナビ。もともと戦闘は得意ではないが、自己防衛のため技はある程度使える。タッグバトルでは、ヒール形の技をよく使う。また、当然空を飛ぶこともできる。

主な技

タイフーンダンス

自らの体を回転させ、竜巻を発生させる。周辺の敵を攻撃するのに使う。

フェアリーフェザー

自らの羽をカッターのように硬くさせその羽で攻撃する。

ヒーリング

仲間や自分の体力を回復させる。

キャラクター紹介 フェアリー（後書き）

次回予告

ファイターマン そういや、お前の生活って電気に頼ってるよな、ほとんど。

秀 うん。

ファイターマン その電気がどうやって作られてるか知ってるか？

秀 ソーラーパネル。

ファイターマン じゃあ、電気がなかったら想像つくか？

秀 うーん、つかないなあ……。

ファイターマン 秀！今度のナビロイドはやっかいだ！

秀 え？！

秀・ファイターマン 次回、ジュニアポリス。失われた電気。ジェミニマン登場！

ファイターマン 秀！また事件だ！

秀 よし、出撃！

第13話 失われた電気 ジェミニマン登場！（前編）―1

今の時代は電気で支えられている。もし、電気がなかったら想像つくだろうか。

昔の電力エネルギーといったら、火力発電、風力発電、水力発電、太陽光発電、そして原子力発電があった。

しかし、どの発電方法にも問題はあった。火力発電は燃料を輸入しないと発電できないし（少しだが、作ることもできた）、地球温暖化の原因にもなっていた。水力発電は、無駄なダム建設が問題になったことも。風力発電と太陽光発電は、風や太陽の光がないと発電できない。

原子力発電はわずかな量で莫大な電気を作り出し、かつ地球温暖化を抑える発電方法ということで発明された当時は期待されていた。ところが、今から約40年前に起こった大地震の影響で、原発事故が発生。環境維持システムで溜め込んだ地震が襲ったような巨大地震だった。しかもそのときは、環境維持システムの定期点検の日だったのだ。二度と同じ過ちを繰り返さないという当時の政府の方針として、原子力発電を廃止にすることにした。

だが、その影響は非常に大きかった。人々は、電気を節約して生活していたが、それでも供給より需要が多く、二ホンに莫大な電力不足をもたらした。そのころはもう酷いものだ。火力発電所をフル稼働させたままではいいが、地球温暖化が促進され、日本の環境はどんどん悪くなっていき、公害が社会問題となった。

20年前、そんな中に光がさすように新しいソーラーパネルが発明された。

それは、わずかな光でも、莫大なエネルギー（1枚がたたみ1畳の大きさながら、10枚で原発1機分と同じ電力）をまかなえるというとんでもないソーラーパネルだった。

予算はかかったが、このテラソーラーパネルの量産により、二ホン

にまた平穏な日々が戻り今に至る。

「よし、科学のレポート完成だ。」

「ずいぶんと長ったらしいレポートだな。」

「うん、ネットで調べたものを少しアレンジして入力したらこうな
った。」

「そうか……。お前、寝ないと明日寝不足だぞ。」

「うん。おやすみ。」

「ああ。」

僕はP E Tをスリープモードにして、充電器にさし、枕もとのスイッチを押して電気を消した。あ、レポートであった環境維持システムって分かる？世界中の環境は、世界中にある環境維持システムによって管理されている。これにより、平穏な環境を保つことができるんだ。つまり、自然災害が起きないようになっている。科学は自然に勝ったといっても過言じゃないかな。これがフリーズするなら、どうなるかわかるよね？じゃ、寝るか。ちなみに、あの原発の周辺は、放射能除去が完了し、再び住民が住めるようになっていて、また平穏な生活に戻っている。原発の跡地は、テラソーラーパネルが設置されており、電気を供給している。

翌朝

「ん、ん〜。」

今日もいつものように目を覚ます。ん？今朝はなんかおかしいな。

いつものように、枕元にあるスイッチを押したが、電気がつかない。今日は曇りかな？そとをみたら、快晴だった。もし、電気が供給されなくてもDIBの屋上にはソーラーパネルがある。それが、予備電源になっている。なのに、何でそれが作動しないんだろう？不審に思いながらも僕はいつものように肩にフォルダを取り付け、そこにPETを差し入れる。そして、リビングに来た。

「うーん、困ったわね・・・。」

「どうした？渥美姉ちゃん。」

「あ、秀。それがね、クッキングヒーターに熱がこもらないの。プラグインしても異常はなかったのに。」

「えー、これじゃ朝飯抜きか!？」

とりあえず、冷蔵庫を開けてみた。が・・・、もわーんとした空気が出てきた。それどころか、食い物傷んでないか？

「うーん、俺4時ぐらいからどういっわけか寝た気がしないんだ。」

「どういっこと?」

「バッテリーを見る。」

画面の右上には、現在のバッテリー要領が映し出されている。これは、PETが携帯電話だったころの名残だとか。バッテリー残量が2メモリしかない。満タンのときは3メモリになっている。十分に充電できてないってことか？

「二人とも！リビングの電気もつかないよ！」

「「！！！？？」」

つかさ姉ちゃんがリビングの照明のスイッチを押しながら言う。これは、1つの原因しか考えられない。

「「「停電（ね）（だね）（）。」」

「でも、そうは言っても、今はテラソーラーパネルがあるから停電なんて考えられないはずだけど。」

そう、昔は停電なんていうこともあったが、今ではテラソーラーパネルによって、停電なんて考えられないのだ。

「じゃあ、誰かが電気を奪ってるとか？」

「でも、何のために？」

「とりあえず、ラジオつけてみる。」

僕が持つてるラジオは電池式で、電気がなくても充電ができる。災害とかに役に立つかもね。

ザー――

「ん？周波数が合わないな。」

僕はダイヤルを回して周波数を合わせようとした。まわしていると声が聞こえてきた。

「・・・現在、ドラゴンシティ周辺で大規模停電が発生しています。この影響でドラゴンメトロは、全線運転を見合わせ、交通局タクシ―も、需要が追いつかない状況になっています。」

「だって。」

「今日はドラゴンバスで行くか。」

ドラゴンバスとはシティの自治体が経営しているバス会社だ。交通局のバスが廃止になった後は、その跡地を、自治体が引き継ぎ、メトロが止まらないタウンの、沿線住民の足になっている。ちなみに、このバスの専用道路は、救急車が走る道路もかねている。そのため、バス停には待避線がある。バスはここで、救急車の通過を待ち、出発する。ちなみに、バスが走ってくる方向から見ると、右側の道路がバスが止まる場所。救急車も基本的にはここを通過して通過するが、バスが止まっているときは、左側を通過して通過する。ま、それはいいとして早く行くか。

しかし、停電になっていてエレベーターも動かない。すると、電気がついた。しばらくして、DIBのオーナーからアナウンスが流れた。

「おはようございます。ただいま予備電源操作になりました。では、今日もよい1日を！」

そして、1階に到着したが、僕は確認のためメトロステーションに向かうことに。ステーションのメインの明かりは全部ついていなかったが、非常灯だけが点灯していた。列車案内も当然写らない。

僕はホームへ戻り、DIBと井上コンツェルンの本社ビルを見上げた。あれを階段で昇るなんて到底考えられない。僕はこつちにきてもう6年近くたつ。その間、僕は階段を利用したことなんてまったくといっていいほどない。あー。まいいや。とりあえず学校行くか。ちなみに、定期はDBトランコンバスでも使える。

第13話 失われた電気 ジェミニマン登場！（前編）―1（後書き）

今回の東日本大震災を引つ張った内容だと思います。被災地の皆さん、すみません。

第13話 失われた電気 ジェミニマン登場！（前編） - 2

僕はバスに乗り、学校へ向かっていた。下に見える町は普段はにぎやかなのに今日の停電で沈黙の町と言われるくらい気味が悪く、静かだった。でも、停電でなぜバスは走れるかというと、ソーラーパネルを使ったエコカーだからだ。といっても、テラソーラーパネルじゃない。一昔の、メガソーラーパネルだ。テラだと電力をもてあますので、一昔のメガというわけだ。といっても、今の車はみんなソーラーパネルの電気ですべて走っている。

バスは学園前に到着した。そして、生徒たちを下ろしていく。

校内は当然だが電気がついていない。もっとも、太陽の光が差し込んでるから電灯は意味ないけどね。僕は、教室に入った。

「はあー。」

何で停電が起きたんだろう。いまどき停電なんて考えられないのに。

「なあ、高原。今朝のニュース見たか？」

「ああ、停電のやつか？」

「俺もさ、クッキングヒーターが作動しないから、母ちゃんは朝飯、パンだけだったんだよ。」

「お前もか……。」

「そつちもか？」

「ああ。」

ガラガラガラ

「やべ、先公だ。」

そういうと、僕と話をしていた男子生徒は席に着いた。彼は杉元健二だ。自称、高原秀のライバルだとか。確かに、彼は僕に運動では勝ってるけど、勉強では勝ててない。

ホームルームが終わった。ブラックボードや、デスクのノートパソコンは、非常電源でかろうじて作動している。このため、授業に支障はない。でも、電気がないって不便だな。

「秀、終わったら発電所に行ってみたらどうだ？」

「いいね。確か発電所は……。埠頭町からバスが出てたっけ。」

「帰りによってみるか？」

「うん。」

キーンコーンカーンコーン

学校が終わり生徒たちは全員家に帰っていく。いったん帰って準備するか。でも、DIBの階段を登るとなると、相当気が引ける。すると、渥美から電話がかかってきた。

「あ、渥美姉ちゃん。どうした？」

「秀、発電所に行くつもりでしょ？いったん家に戻ってきて。」

「ああ。でも、階段登るの気がひけるよ。」

「男の子は弱音吐かないの。」

「はい。」

僕は満員のバスに乗り、辰ノ町に帰ってきた。

そして、バスを降りDIBを見上げた。

「これ登るのー？」

仕方なく僕は階段を登ることにした。もともと、中の階段は使えないので非常階段で登ることに。ちなみに非常電源も一時間が限界だつて言つてたから非常階段しかない。

僕は階段を上り続けた。だが、高原家は35階だ。歩くのは結構骨が折れるし、考えただけでも足が棒になりそうだ。あ、意味は分かるよね？

「お前、誰に言つてんだ？」

「それ、前にも聞かれた気がするけど。」

登つても登つても35階に着かない。一瞬、この階段は天国に続いてるんじゃないか？つて錯覚した。そんなわけねーよな。それより、今何階だろう？

「えーつと……。」

僕は、踊り場に到達し扉を開けた。扉の内側には22Fと書かれていた。

「あと一息だ……。とりあえず、ジュース買つところ。」

「停電だから意味ねーぞ。」

「あ。」

そつだ。たしか、シティ全体は停電していたんだ。だから、ジュースも冷えていないし自販機も動かない。つてことは……。嫌なことが頭をよぎった。

「水道も出ない……と。」

「そついうことになるな。」

「さらりと言わないでよ。」

ネットナビにとっては問題ないが、僕らにとってはちや水のことは大問題だ。あ、停電はネットナビにも問題はあるんだ。

「電池は大丈夫？」

「もう1メモリしかないぞ。」

「そつか。」

やれやれ、電池が切れたらそれこそ大変だぞ。

「よし、あと一息だ。」

僕は階段を上り始めた。

第13話 失われた電気 ジェミニマン登場！（前編） - 3

僕は、DIBの非常階段を登っていった。踊り場から下を除いてみた。が……。

「み……、見なきゃ良かった……。」

あまりの高さに僕は頭がくらくらした。喉からからなのに。僕は、そんな思いを頭から振り払い、35階を目指した。

やっとこさ35階に到着した。

「しかし、電気使えないってのは不便だね。」

「ああ。PETも充電できねえな。」

高原家に帰ってきた。

「はあ……。はあ……。ただいま……。」

「あらおかえり……。」

渥美姉ちゃんは声がいつもより小さかった。階段を登るとき疲れたのか。それとも、喉の渇きのせいかな。

「秀、はい。」

渥美姉ちゃんが水の入ったペットボトルを渡した。

「渥美姉ちゃんは大丈夫？」

「うん。さっき飲んだから。そうだ、あなたに渡したいものがあるの。きつと、サポートできるはずよ。」

手渡されたのは大して大きくない箱だった。僕はそれを見た後渥美姉ちゃんを見た。あけていいわよ。と言わんばかりの顔をしていた。そのとおりに僕は開けてみた。中には、見たことない服が入っていた。いかにも、軽い素材でできていそうだ。

「何だこれ？」

「これは、よくわかんないけど、あなたの知り合いから送られてきたものよ。」

箱を良く見ると、そこには井上コンツェルンの社章が書かれていた。まさかと思い、送り主を見るとそこには、井上春奈と名前が書かれていた。多分、図つたな。僕の話盗み聞きしてたかも。ま、僕は男だから細かいことは気にしなくてもいいか。

PPPP!PPPP!

「秀！メールだ。」

「誰からだろう？」

僕は、メールを開いてみた。すると、驚いたことに、春奈さんからだった。メールにはこう書かれていた。

拝啓、高原秀様。この大停電の中、いかがお過ごしでしょうか。私

も停電の影響で食事ができなくて困っております。あなたの話を盗み聞きしましたが、発電所に行くつもりでしょう。そこで、何かのお役に立てたらと思い、これを送ります。それは、ムササビスーツといい、井上コンツェルン（以下EK）で開発されています。敬具

「やけに丁寧なメールだな。」

「うん、将来は会社を告ぐ身みたいだし。メールの書き方も勉強してんだなとも思うよ。」

「ふーん、金持ちはわからんな。」

「でも、ムササビスーツって何だろう？」

僕は、取り合えずとして返事を書いておいた。

「とりあえず、辰ノ町の公園に来て。」

これがメールの文面だ。そして、送信した。あの時言い忘れたが、昔のメールは輸送をナビに任せていたが、今は電腦ポストができたため、ナビがいちいちオペレーターの元に行かなくてもいいようになった。当時は、ナビの迷子が多くてメールを届けるのに10時間かかったという話もあった。そして、僕もムササビスーツを持って下の公園へ向かった。6年前、僕が倒れたあの公園だ。

30分後

春名さんがやってきた。

「高原君。話って？」

「この、ムササビスーツのことなんだけど。」

「これは、うちの会社がつってる試作品ね。これは、実験済みだから売却してたの。」

「で、これはどういう仕組み？」

「言うならば、動物のモモンガをモチーフに作られたスーツかな？」

「どっやって使うん？」

「まずは、そのスーツを着てみて。」

僕は、そのモモンガスーツを服の上から着てみた。ちなみに、着ながらこんなことを考えた。

（ムササビとモモンガってどう違うんだろっ？ま、いいや。）
「で、どうするの？」

「そしたら、そこから飛んでみて。」

僕は、ジャングルジムのところから飛んでみた。あ、ちゃんと飛べるんだ。

「ムササビスーツの使い方は分かった？」

「ああ。」「めんな。こんなこと呼び出しちゃって。」

「いいの。私も本社に用事があったから。」

「そうか。じゃ、僕は発電所に行くよ。あれ？エレベーターは？」

「うん、非常電源に切り替わったから動くわ。」

「じゃあ、IKの屋上から飛んでくよ。」

僕と春名さんはエレベーターに乗り込んだ。そして、春名さんは10階で降りていった。おそらく10階代のどこかのテナントに用事だろう。僕は屋上を目指した。

そして、屋上に到着した。隣のDIBも見える。IKの本社ビルは45階建てだ。対してDIBは40階建て。ちょっと負けてる気がするな。ま、いいや。

「いくぞ、ファイターマン。」

「おう！」

「発電所はどっち方面だっけ？」

カクッ

「西へ3キロだよ！」

「ああ。そうか。ハッ！」

僕はモモンガスーツで飛び立った。ジェットパックはとうとうこないだ落下しちゃって壊しちゃった。注文はしてあるけど、1週間はかかるらしい。

しかし、いい風だな。風に乗れるといいもんだな。さすが、IK社
製といったところか。
そんなことを考えながら、僕は発電所に向かった。

第13話 失われた電気 ジェミニマン登場！（前編） - 3（後書き）

夏もわずかになりましたが、皆さんはどうか行きましたか？
調べたんですが、コンツェルンはドイツ語だそうです。

僕は発電所に到着した。この発電所は、セントラル電力の管轄で、二ホンの中部の電力は、この電力会社がつけている。電気は全部テラソーラーパネルで作られている。その日の予想電力に応じて、パネルを稼働させる仕組みだ。ちなみに、強力すぎるのか1年1度定期点検を受けないといけない。そのときは普段とまっている予備のソーラーパネルが稼働する仕組みだ。もちろん、この発電所も無人じゃない。ちゃんと人がいる。みると、来客用の駐車場にはあふれんばかりの車が止まっている。おそらく、文句を言いに来た連中だろう。

僕は駐車場の近くの道路に着陸した。そして、モモンガスーツを脱いだ。ちなみに、服の上から着てるからやましいことはない。そして、建物の中に入っていった。

すると、怒号が聞こえてきた。おそらく、電気が来ないことに文句を言っているのだろう。僕は、人々の足の間をとおり、なんと前に行こうとした。まさか、背が低いのがここで役に立つなんて。

そして、一番前に到着した。そして、受付の人にJPバッジを見せた。

「ジュニアポリスです。プラグインの許可をお願いします。」

「分かりました。機械室への進入を許可します。」

僕は、機械室に入った。別に問題はなさそうだけど。まあ、一応。

「プラグイン！」

「ちょっと待って！」

なんだよ、せつかく人が決めようとしたのに。振り返ると職員が一人立っていた。おそらく、ここで働いている作業員だろう。

「何すか？」

「ちょっと電池を見せて。」

僕は、その人にPETのディスプレイを見せた。ファイターマンが仁王立ちしているがそこは気にしないでおう。

「電池がわずかじゃないか！プラグインしても電池の減りはわずかだけど、それでもナビを中に入れるよりは、消費が早い。こんな状況でプラグインするなんて自殺行為だぞ！」

「でも、やないと、シティのみんなが……。いくぞー！ファイターマン！」

「ああ！」

「じゃ、あらためて……。プラグイン！ファイターマン！トランスマッション！」

「ファイターマン。状態は？」

「「こじゃ、まだわかんねえよ。」

とりあえず、俺は先に進むことにした。しかし……。

「うわ！このネットワーク、電気が流れてるぞ！」

「多分、ここで作られた電気だよ。この電気がその辺のシティに供給されてるんだ。」

「何とかしてわたる方法はないのか？」

すると、プログラムが話しかけてきた。

「この先に進むなら、これを履いてください。これは、絶縁ブーツ
といい電気を一切通しません。」

そして、俺は電気が流れるネットワークを進むことにした。なるほど、電気が通らない。

「ファイターマン。その電気がどこに流れてるかを調査して。」

「OK！」

電気が流れていく方向を考えるとやっぱり下流だよな。俺は、電気の流れていくほうに沿って歩いてみることに。

しばらく歩いていると、電気の分かれ道にきた。

「秀！どっちだ！？」

「右がドラゴンシティに続いている。」

「よしー！」

「左は、隣町だから。」

俺は、右に進んだ。さて、何が待ち構えてるんだ？

進んでいくと、電気のネットワークが途切れていた。

「どうなってんだ!？」

「これが、停電の原因か。ここから、変電所に行つて、電気があちこちに行くはずなんだけど。」

「こりゃ、ウイルスの仕業じゃないな。」

「うん。いったい誰が？」

PPP! PPP!

「秀!メールだ!」

タイトルはメールニュースらしい。文面にはこう書かれていた。

ドラゴンシティ大停電、続報。現在、ドラゴンシティでは大規模停電が発生している。変電所や周辺の電線に影響なし。発電所のコンピュータの影響があると考え、ドラゴン警察署は、ティーンポリスを出動させた。

「それにしてもひどいよこれは。」

「まったくだ。」

お前が言うか。普通。ナビロイドって奴が暴れたのも全部お前のせいだろ。って口でいえれば言いたいんだけどな。

「なんか言ったか？」

「いや。なんでもない。」

まったく、これだから一人称小説はやなんだよ。ん？なんか嫌な気配が……。

「ファイターマン！後ろ！」

「!？」

「ディスプレイを見ると、ファイターマンの後ろから電気が飛んできた。」

「ぐあああああ！」

「ファイターマン！」

第13話 失われた電気 ジェミニマン登場！(前編) - 4 (後書き)

明日から学校。嫌だなー。

第13話 失われた電気 ジェミニマン登場！（前編） - 5（前書き）

ジェミニマンは2人で1人ですが、セリフはまとめています。

第13話 失われた電気 ジェミニマン登場！（前編） - 5

「ぐあああああ！」

「ファイターマン！」

くっ、油断したか……。後ろからの電撃をまともに受けてしまった。電撃を食らわせる奴といたら、あいつしかいない。

「誰だ？あの二人。」

「二人じゃないんだな。あいつは、二人で一人のネットナビ。幹部のジェミニマンだ！」

「それなら、僕も本で読んだことがある。ジェミニはふたご座って
いう意味があっただけ。」

「ああ。」

「何をゴチャゴチャ言ってるのかな？貴様をデリートする。そして、
渡してもらおうか。鍵を。」

な、なんだこいつ！？二人で口調がまるで違う。それにしても鍵って何だろう？

「ファイターマン、鍵って何？」

「お前には関係ねえ！」

「……………」

とりあえず、しばらくはその鍵とやらの話題は話さないでおこう。
うん、そうしよう。そう心に決めた。

「とりあえず聞くが、これはお前の仕業か？」

「そうさ。君を呼び寄せるためのね。そして、のこのこと来た。お
前の命日だとも知らずに。」

「命日はどっちだ？」

「フツ、それがお前の遺言か？」

「ああ。やるぞ！秀！」

「おう！」

電池は、レッドゾーンだけどまあ何とかなるだろ。

「バトルオペレーション！セット！」

「イン！」

「一撃で決めるぞ！プログラムアドバンス！バトルチップ、ソード・
ワイドソード・ロングソード、スロット・イン！プログラムアドバ
ンス発動！ドリームソード！」

「うおおおおおー！」

だが、攻撃はあっけなくかわされてしまった。

「エレキソード！」

「秀！」

「バトルチップ！リーフシールド！スロット・イン！」

危なかった。今の食らったら危うくデリートだったぞ。

「それで防いだつもりか？」

「は？」

「はあっ！」

「ぐっ！」

「ファイターマン！」

後ろを取られてしまった。くそっ……。これじゃ、挟み撃ちかよ！？一人を攻撃するとかわされる。すると、もう一人が追い討ちをかけてくる……。どうすれば……。

「これじゃ、完全に不利じゃないか！」

「でもここで逃げたら電気は戻らない。何とかしないと。バトルチップ！カウント」

「おそい！」

「な？！」

「ジエミニサンダー!!」

「うわあああ!」

「ファイターマン!」

「秀……。俺はもうだめだ……。お前と……。短い間だった
が一緒にいられて楽しかったぜ……。」

「な……。何言ってるんだよ!」

「じゃあな……。秀……。」

そのとたん、PETの電池が切れた。

「……。……。ファイターマ~~~~ン!!!!」

僕……。どうしたらいいの?

第13話 失われた電気 ジェミニマン登場！（前編） - 5（後書き）

秀 PETの電池が切れちゃった。ファイターマンもデリートされ
ちやうかも……。僕、どうしたらいいの？

渥美 秀！弱気になっちゃダメ！あなたは、男の子でしょ！

秀 男でも弱気になるときはあるよ……。

渥美 大丈夫！私がサポートするわ！

秀 渥美姉ちゃん……。

秀・渥美 次回、ジュニアポリス 失われた電気 ジェミニマン登
場！（後編！）

渥美 秀！また事件発生よ！

秀 よし、出勤！

第14話 失われた電気 ジェミニマン登場！（後編） - 1（前書き）

前回までのあらすじ

秀 突如ドラゴンシティを襲った大停電。僕は原因を調べるために発電所へ向かった。それは、ファイターマンをデリートするため仕掛けたザンザークの罠だったのだ！しかも、PETは、電池がなくなりとんでもなくやばい状態だ！僕、どうすりゃいいんだ！？

第14話 失われた電気 ジェミニマン登場！（後編） - 1

画面が収納（この時代のPETは、エア・ディスプレイ方式になっている。）され、ファイターマンの声も聞こえなくなった。そして、僕の全身を絶望が包んだ。

「そ……そんな……。」

僕は泣きたい気分だった。でも、泣いたってどうにもならない。

「ごめんな。ファイターマン……。」

「君！」

すると、人の声が出た。さっきの作業員だ。

「あきらめるのはまだ早いぞ！これを使ってくれ！」

「これは……手回し発電機？」

理科の授業で見たことがある。実験でも、結構使っていた。

「PETの充電用に改良したからこれで充電を！」

「はい！」

僕は、また希望の光に照らされた。そして、すぐに手回し発電機を回した。

1分かったが、電池は4分の1程度になった。そして、電源を入れた。

「ファイターマン！応答してくれ！ファイターマン！応答してくれ！」

「おう、俺だ！」

「ファイターマン！大丈夫！？」

「ああ、平気だ。」

「だったら、サブチップ！フルエネルギー！スロット・イン！」

サブチップとは、バトル以外で使うチップのことだ。戦いで失った体力をこれで回復できる。回復チップには、リカバリーもあるがこっちのほうが効率がいいと僕はおもってる。

「体に力がみなぎってくるぜ。サンキューな、秀。」

「気にすんなって。」

「ふん、オペレーターが戻ったか。だが、俺たちを倒すなど無理に等しい。」

「それはどうかな？エレキソード！」

「バトルチップ！ソード！ダブルスロット・イン！」

俺は何とか、ダブルソードで両側から来るエレキソードを受け止め

た。だが、一人で二人分のエレキソードを受け止めるとさすがにきついな。

「秀！チップをくれ！」

「まだまだ！今、攻撃を仕掛けてもカウンターを食らっちゃまう！僕は奴のパターンを読むから、それまで耐え忍んでくれ。」

「まあ、やってみるぜ。」

何とかこっちも隙をうかがわないと。オペレーターはナビに戦わせてるんじゃない。ナビと一緒に戦ってる。かっこいいセリフだな。ちなみにこれは渥美姉ちゃんの名言だ。いや、言ってる場合じゃない。

しばらく様子を見ると、ジエミニマンが手を合わせた。来るか！？

「ジエミニ」

「バトルチップ！リーフストーム！スロット・イン！」

相手が叫ぶより早くこっちはチップを挿した。

「食らえ！」

二人は・・・いや二人で一人か。は、固まってるからお互い、カウンター攻撃できない。つまり、そういうこと。どうということだろう？

「きたよ！ファイターマン！」

「！！」

ファイターマンは何とか攻撃をよけている。よし、次の攻撃のチャンスを練って……。いまだ！

「バトルチップ！オジゾウサン！スロット・イン！」

俺は地蔵の後ろに身を隠した。ここが、一番安全だ。そして、地蔵が壊れた。そして、この罰当たりが！！と言わんばかりに地蔵から雷が落ちてきた。こりゃ、大ダメージだな。

よし、これで一気に逆転だ！なーんて思ってたら向こうはあれ以来、一向にジエミニサンダーを放つ気配がない。作戦読まれたか！？こつちが攻撃を仕掛けると、もう1体からのカウンターを食らっちゃまう。どうしたら……！

第14話 失われた電気 ジェミニマン登場！(後編) - 1 (後書き)

この小説、文芸社に出版しようかなー。なんて思っています。

第14話 失われた電気 ジェミニマン登場！（後編） - 2

あれからというものの、ジェミニマンは一向に隙を見せない。つまり、ジェミニサンダーを放ってこないことだ。多分、僕の戦略を見透かされたな。

なんてやつだ。言い忘れたが奴は、ザンザークのボスの右腕だ。それだけ手ごわいってことか。

「ダブルソード！」

「来るぞ！」

「バトルチップ！バリア！スロット・イン！」

とりあえずは、これで一時しのぎはできる。だが、問題はその後だ。

「ロケットナックル！」

「バトルチップ！ワイドバルカン！スロット・イン！」

ワイドバルカンは、基本的にはバルカンと同じだが、広い範囲を攻撃できる。これが結構効率がいいんだよな。

「マヒプラスを付けときゃよかつたかな。」

「電気属性の奴には効果がないぞ！」

「フツ、エレキソード！」

「プログラムアドバンス！バトルチップ！ソード、ワイドソード、ロングソード！スロット・イン！プログラムアドバンス発動！」

「ドリームソード！はああああ！」

「ジェミニサンダー！」

しまった！カウンターを取られた！

クソッ、それこそおしまいか……！だが、俺たちの希望はまだ健在だったらしい。

「フェアリー！」

「タイフーンダンス！」

「エンジェル！」

「サンシャインアロー！」

俺は声をするほうを見た。そこにいたのは……！

その声につられ、僕も見た。そこにいたのは、僕たちがよく知る人物だった。言わなくても……。わかるよね？

第14話 失われた電気 ジェミニマン登場！(後編) - 2 (後書き)

こんなもんですいません。

第14話 失われた電気 ジェミニマン登場！（後編） - 3

そこにいたのは、間違いない。僕の姉貴二人。渥美姉ちゃんとかさ姉ちゃんだ。

「渥美姉ちゃん！つかさ姉ちゃん！何でここに！？」

「あなたのことだからここに来るだろうって。」

「で、一緒に行ったらこうなったってわけ。」

「でもよかったよ。助っ人が来てくれて。」

二人は、PETに向き合った。もちろん僕もだ。

「行くわよ！フェアリー！」

「ええ！」

「行くよ！エンジェル！」

「いつでもどうぞ！」

「バトルオペレーション！セット！」

「イン！」

「ちっ、助っ人が来たか。何人来ようと結果は同じだよ。」

「それはどうかしら？」

「何？」

「パワーショット！」

「タイフーンダンス！」

「サンシャインアロー！」

その攻撃をジェミニマンは華麗にかわしていく。そして、こっちに攻撃を放ってきた。

「ロケットナックル！エレキソード！」

その攻撃も俺たちは交わした。すると、ジェミニマンが手を組んだ。来るか。

「ジェミニサンダー！」

「秀！」

「渥美ちゃん！」

「つかさちゃん！」

「……（コクッ）プログラムアドバンス！」

「バトルチップ、バルカン！トリプルスロットイン！プログラムアドバンス、発動！」

「うおおおおお！！無限バルカン！」

「バトルチップ、ソード、ワイドソード、ロングソード、スロット・イン！プログラムアドバンス、発動！」

「はあああああー!!ドリームソード!」

「プログラムアドバンス!バトルチップ、ヨーヨー!トリプルスコット・イン!プログラムアドバンス、発動!」

「えええええい!!ヨーヨーグレード!」

「いっけえええええ!!!」

これで勝ったか!?

第14話 失われた電気 ジェミニマン登場！(後編) - 3 (後書き)

これから、忙しくなるので更新が遅くなると思います。

第14話 失われた電気 ジェミニマン登場！（後編） - 4

そこにジェミニマンは倒れて・・・

いなかった。って、何だ？この行間は？ま、いいや。とにかく、ジェミニマンはいない。逃げられか！？

目の前に、チップが落ちていた。バトルチップではないようだ。よく見ると、それはザンザークのIDチップだった。こんなもん落とすなんてバカだなと俺は思った。

「秀、すまん。逃げられちゃった。」

「いいよ。それよりそれは何？」

「こいつは、ザンザークの身分証明書のIDだ。」

「有力な証拠を手に入れたんじゃない！？僕たち。」

「ファイターマン！それより電気を！」

「あ。」

俺は、電気のネットワークを見た。とてもじゃないが、俺の手に負えない。

「くそ、どうしたら……。」

「後は任せて！」

すると、電気のプログラムたちだった。プログラムたちは、みるみるネットワークを修復していく。そして、ネットワークがつながり、電機が戻った。

「……プラグアウト！」

「これで、平和になったね。」

「うん。電気もこれで戻ったでしょ！」

「やったね！」

僕らは、3人でハイタッチした。

「おい、盛り上がってるところ悪いが、俺は限界だ。」

「私も。」

「私も。」

みると、電池がレッドゾーンだ。早いところ帰らないと。

だが、問題がおきた。電池が切れることなくドラゴンステーションまでこれたのはまだいい。停電の影響で止まっていたメトロは運転再開するかと思いきや、再開にはまだ時間がかかるという。なんでも、停電のドサクサで運転指令所のデータが全部パーになってしまったらしい。

「どうする？」

「しょうがない。バスは混むから歩こう。」

歩いてみると、シティが違う目線で見えてくる気がした。大通りにはたくさん車が走っている。

「地上は、違うな。」

「そうね。メトロはずっと地下走ってるもんね。」

僕は、近くにあった自販機でジュースを買い、飲んだ。

「フー、のどが癒されるー。」

「家出る前から飲んでないもんね。」

「ああ。」

市役所あたりで見上げると、DIBとIKのツインタワーが見えた。

「あと、どれぐらいだ？」

「サイン SIN コサイン KOS タンジェント TANを使えば、求められるわよ。」

「さっぱり分かん。」

そんなのは高校で習うレベルだろ。と突っ込みたかったが、やめておいた。さあ、あと一息だ！

第14話 失われた電気 ジェミニマン登場！（後編） - 5

何とかDIBに到着した。

DIBのロビーは、電気がついている。いつもの生活が戻ったようだ。いや、実際戻ってるか。僕らは、エレベーターに乗り込み、高層家に帰ってきた。誰も、何も言わない。

「ふうー、疲れたー。」

僕の開口が、それだった。

しばらく昼寝した僕は、テレビを見ていた。

「本日ドラゴンシティで起こった原因不明の大停電ですが、先ほどすべて復旧しました。」

チャンネルを回したが、ほとんど、この大停電について報道していません。

「はあー。」

その夜・・・
バチッ！

突然部屋の電気が消えた。また、停電か！？

「何だ！？とりあえず、電源室に行ってみる。」

すると、電気がついた。予備電源に切り替わったらしい。

「ちょっと、外でてみよう。」

「これだ。停電の原因は。」

見ると、電線が切れていた。これは多分業者がやれるだろう。よく見ると、線がさびている。老朽化が原因のようだ。

だが、ビルに入ったときまた問題がおきた。また停電の発生だ。予備電源は確か、地下5階にあったはずだ。

僕らは従業員エレベーター（非常電源で停電でも動ける）にのりこみ地下5階へ向かった。ちなみに、警備員室と、清掃員室は地下4階にある。

「これだ……。」

予備電源の計器類が置かれている。DIBの屋上から取り入れられた太陽光は、発電装置で発電され、そして伝染を経由し、ここに備蓄される。ちなみに、もてあました電気は電力会社に売られている。誰もいないが、すべてプログラム制御だ。

「よし、行くぞ。」

（（コクッ））

ちなみに、電池は夕食時に充電していたので万端だ。

「プラグイン！」

「ファイターマン！」

「フェアリー！」

「エンジェル！」

「トランスミッション！」

みると、ウイルスに感染しているようだった。ウイルスがうじゃうじゃいる。全部、電気系統だ。こいつらは一気にやるべきか……。ウイルスが突撃してきた。

「スピッキク！」

「タイフーンダンス！」

「スピッシュット！」

ウイルスは一気にデリートされた。

「やったな！」

秀はそうだったが、なぜか妙に何か心が引つかかっている。

「秀、あのウイルスは時限式で、誰かが仕掛けたみたいなんだ。」

「え？」

「誰が仕掛けたかまではわからねえ。秀、用心しておけ。」

「あ、ああ。」

電気は復旧したようだ。エレベーターの乗換えが面倒なので、僕は従業員エレベーターで、一気に35階へ向かった。でも、一体誰があこのウイルスを？考えても仕方ない。今日はもう寝よう。

第14話 失われた電気 ジェミニマン登場！(後編) - 5 (後書き)

次回は、決まったらお知らせします。

キャラクター紹介 高原つかさ

たかはら
高原つかさ

誕生日 1月23日（みずがめ座）

身長 150cm

体重 秘密

年齢 15歳（14話現在）

性別 女

一人称 ボク

二人称 君

所属 冠来女子高校1年生（福）ティーンポリス・ジャックランク
性格 いつも明るい性格。好奇心旺盛で怖いもの知らず。

秘密 最近、妙な薬を調合していることが多い。

略歴

基本的な略歴は、高原渥美と同じ。

解説

渥美の双子の妹。いつも元気いっぱい、回りを振り回している。彼女に振り回された人は、3日間電池が抜けたような状態になる（秀だけは慣れているので、そうはならない。）。学校の成績はことごとく悪いが、本人はまったく気にしていない。ネットバトルの腕はあまりよくない。（まったく悪いというわけではない。）また、どういいうわけか薬の調合にはまっっており、変な薬をよく作っている。渥美からはあまり信用されていないらしく、信用できるものといったら、塗ると1時間で怪我が直る傷薬だけらしい。

キャラクター紹介 高原つかさ（後書き）

次回予告

ファイターマン 秀、ネットバトルはどんどん進歩してるらしいぜ。

秀 うん。もうすぐAR（Augmented Reality）ビジョンを用いたネットバトルが始まるみたいだな。

ファイターマン で、お前は綾小路財閥のGABGOM社で実験されてるARビジョンの試運転に参加するんだったよな。

秀 うん。すげー！これが次世代ネットバトルかー！

ファイターマン おい、これ映像じゃないぞ！本物だ！

秀 な、何だって！？

秀・ファイターマン 次回、ジュニアポリス。ARナビ、暴走！？

ファイターマン 秀！また事件だ！

秀 よし、出動！

第15話 ARナビ暴走!? - 1

僕ら現代人は、PETと呼ばれる情報端末を持っている。PETとは、Personal Terminalパーソナルターミナルの略称で、その中には擬似人格プログラム、通称ネットナビがインストールされている。ネットナビは、人間の代わりにほとんどの仕事を（何でもかんでもやってくれるわけではない）代わりにやってくれるので、人間たちの生活は便利になったもんだ。それ以外にも、ネットナビはウイルスに感染したコンピューターの中に入って行き、ウイルスを除去してくれる。そして、ネットナビ同士を戦わせることをネットバトルという。昔は、どこかの電脳にプラグインしないとネットバトルができなかったが、今は携帯ゲーム機のようにワイヤレスでPET同士を接続させることで、いつでもどこでもネットバトルができるようになった。そして僕の家、もとい高原家でもネットバトルが行われていた。

「バトルチップ、エレキソード！スロット・イン！」

PETの画面の中では（今のPETの画面は空間ディスプレイになっている）ファイターマンが、エレキソードを構えてフェアリーに向かって突進していた。僕が誰と戦ってるかは、読者の君ならもう分かるよね？

「バトルチップ、カースシールド！スロット・イン！」

フェアリーの目の前にカースが出現した。

「ファイターマン！攻撃は中止だ！」

だが、僕がそう叫んだ時には遅かった。ファイターマンはカーズシールドを攻撃してしまった。すると、カーズがファイターマンに噛み付いた。

「ぐああああ！」

ファイターマンはやられてしまった。ちなみに、通信対戦同士のネットバトルでは、ナビはデリートされる心配はない。

「ふー。フェアリーも強くなったな。」

「そうでもないわよ。渥美ちゃんの腕がよかったのよ。そうでしょう？」

「うん。」

僕は、テレビをつけた。テレビでは、今ガブゴン社で実験中のAR (Augmented Reality) バトルの話をやっていた。ガブゴン社は、綾小路財閥の会社で、詳しいことは分からないが、今の社長は綾小路やいとこの娘、綾小路ありさというらしい。ちなみに、やいととは熱斗とは知り合いだったらしい。キャスターは、ありささんと話しをしていた。

「さて、ありささん。ネットバトルの環境はどんどん進化していると聞きましたが。」

「ええ。これからのネットバトルは、画面越しに見るのではなく眼鏡越しに見るのです。」

「ほお、眼鏡越し。ですか。」

「そうです。では、かけてみてください。」

ありさんとキャスターは、少し前の3Dめがねに似ためがねをかけていた。あ、赤と青のフィルターのやつじゃないよ。そして、両者はスタジオの端と端に立った。

「では、バトルモードを起動してください。」

「はい。」

「バトルモード、起動!」

バトルモードが起動した。すると、キーワードに反応したのかメガネの電源ランプが点灯した。

「バトルオペレーション!セッ!」

「イン!」の声はしなかったが、ネットバトルが始まったようだ。

「うわあ!私のナビが目の前に!」

「ええ、それがARバトルの特徴です。」

「じゃあ、バトルチップ、キャノン!スロット・イン!」

キャノンは初級ネットバトラーが持っているチップだ。もしあそこに僕がいたら鼻で笑っていただろう。だが、失礼なのでやめておくことにしよう。

「うわあ！スタジオが！壊れた！」

「心配ありません。これはあくまで映像です。じゃあ、こっちの番です。バトルチップ、バルカン！スロット・イン！」

「うわああ！映像って分かってても、鳥肌が収まりませんね。」

「そうですね。」

最近のネットバトルは、すごいな。これが僕の感想であった。

第15話 ARナビ暴走!?! - 2

そして土曜日、僕らはHNSRのみらい号（デンサンシティ行き）に乗っていた。何でこうなったんだろう。それは、木曜日にまでさかのぼる。

「ええ~~~~!!?ガブゴン社にいけて!?!」

「ええ。綾小路財閥のありさんが、あなたたちを呼んでいたわ。」

「でも、私たちお金ないんですよ。」

「それに、わざわざ僕らじゃなくても、現地に優秀なJPとかTPとかいるじゃないですか。」

ちなみに、JPやTPはドラゴンシティで出来た組織だが、今や二ホン中に広まっている。それだけ犯罪の身近さを知ってもらい、協力してもらおうという魂胆だろう。ま、話を戻そう。

「何でも、社長のやいとさんが、任意で選んだらしいわよ。」

「で、それが僕らに当たったと。」

「そついうことね。」

で、この列車みらいに乗っているわけだ。ちなみに切符は、ガブゴン社が出してくれたのでよしとしよう。ちなみに、その金は雑費で処理されたとか。

デンサンシティに到着した。たしか、待ち合わせ場所は駅の東口だったはずだ。歩いていくとリムジンが1台止まっていた。

「これじゃないよね、まさか。」

すると、一人の黒服の男が出てきた。

「お待ちしておりました。高原様。」

「その・・・、どうも。」

僕たちはリムジンに乗り込んだ。結構広くてなんか落ち着かない。なんていうか、正直緊張している。むしろ、こんな車に乗って緊張しないほうがおかしいだろう。あ、社長とかは乗ってそうだな。とりあえず僕は車窓からデンサントウンを眺めることにした。

程なくして・・・。

「見えてきましたよ。あれがガブゴン社です。」

運転士が語りかけてきた。僕は、窓からを外を見ると、なるほど。巨大なビルが見えた。

車は、ガブゴン社のビルの前で止まった。玄関に一人の老婆が立っていた。

「ようこそ、ガブゴンへ。」

うわ、この人おでこが光ってるよ！この人が誰かはロックマンエグゼやってた読者なら分かるよね？

「なるほど、周りの人がグラスンしてるのは、そのためか。」

「やいと様は若い頃からこうなのです。」

「……………」

すると、社員の一人が来た。

「ようこそ、綾小路財閥、ガブゴンへ。高原さんですね。わたくし、こういっ者でございます。」

僕は、PETをその人のPETに向けた。大園達子というのが彼女の名前だそうだ。

「では、応接室までご案内いたします。」

「……………」

僕は彼女のあとにつき、ビルの中を歩いていた。窓の中を見ると、たくさんの人が働いていた。電話をしているものもいれば、パソコンにせっせと何かを入力しているものもいる。

「こちらで、お待ちください。」

「……………」

僕は応接室に通された。すると、外から大園さんの声がした。

「誰か、手が空いてる人がいたらお客様にお茶とお菓子をお出しして。」

1分後、一人のOLが入ってきた。

「では、お茶をどうぞ。」

「ありがとうございます。ところで、社長はいらっしゃらないんですか？」

「社長は、まもなく参ります。」

「そうですね。」

そういって、OLは出て行った。

「で、何のようで俺たちは呼ばれたんだ？」

ファイターマンが口を挟んできた。

「ん？そりゃ、この会社の社長の綾小路ありささんに呼ばれてて。」

「んなこた、どうでもいい。俺はバトルがしたいんだ。」

「もう、時機にバトルできるって。」

「本当か？」

「ああ。」

いつから、こんな好戦的な性格になったんだらう。
コンコン

誰かが、ドアをノックする音がした。

「どうぞ。」

渥美姉ちゃんだ。すると、一人の可憐な女性が入ってきた。

「始めまして。綾小路ありさです。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0055i/>

ジュニアポリス

2011年12月29日03時52分発行